

註釈付き翻訳  
グスタフ・パルタイ著  
『ブリューダー通りの家——ベルリンの  
ある有名な家族の暮らしから——』

渡部重美

解題、および翻訳の目的

ここに訳出するのは、„Parthey, Gustav: Das Haus in der Brüderstraße. Aus dem Leben einer berühmten Berliner Familie. Hrsg. von Gabriele Koebel. Berlin: Verlag Das Neue Berlin. 2. Afl.“の一部、„Vater Parthey・Großvater Nicolai“の章から„Nicolais Tod・Umzug in den ersten Stock“の章まで(原著で5ページから83ページ、全体の約1/6)である。著者パルタイ<sup>1)</sup>は、18世紀のベルリンで活躍した書籍出版業者兼作家クリストフ・フリードリヒ・ニコライ<sup>2)</sup>の孫で、ニコライとの生活を実際に体験している。ここに訳出する部分には、孫の目を通して見たニコライの日常の姿が実に生き生きと、しかもきわめて冷静かつ客観的な筆致で描き出されている。

この本を翻訳する理由はいくつかある。まず、日本ではニコライの生涯および彼の主要著作に関する戸叶氏の著書<sup>3)</sup>以外、ほとんど研究書が出ていない状況をあげることができるだろう。レッシング、メンデルスゾーンとともにベルリンの啓蒙主義を代表するニコライは、パルタイも本文中で指摘しているようにかなりの論争好きで、ゲーテ、シラー、カント、フィヒテなど当時の有名な作家、哲学者、学識者たちとさかんに論争を繰り返した。とりわけ、『若きヴェルターの悩み』(„Die Leiden des jungen Werthers“)のパロディーを書いたことがきっかけでゲーテから激しい攻撃を受けた<sup>4)</sup>ために、後のゲーテ中心の文学史では継子扱いを受け<sup>5)</sup>、ドイツでもあまり研究が行われてこなかったこ

とがその原因である。

しかし、このニコライについて、本国ドイツでは前世紀 80 年代から新たな見直しが始まった。ベルリン自由大学ドイツ語・ドイツ文学科のメンバーが中心となって、ペーター・ラング (Peter Lang) 社から新しい全集(ベルリン版全集)の出版が始まったのである<sup>6)</sup>。この全集のハイライトは、これまでほとんど手付かずの状態にあったニコライの往復書簡<sup>7)</sup>を編集・出版する点にある、といっても過言ではないだろう。「ドイツ百科叢書」 („Allgemeine deutsche Bibliothek“) を代表例としてさまざまな文芸批評誌を刊行し、ドイツ文芸の発展に寄与したニコライと、ニコライの活動に協力したさまざまな学識者たちとの間で交わされた書簡にこそ、当時のドイツにおける文学、学問等々の状況が、一言で言えば当時のドイツ文化の状況が如実に映し出されており、この書簡も含めて考慮することで初めてニコライについての正しい評価ができる、との認識が前提になっての企画である。ところが、最初の数巻が出版された後、諸般の事情でこの全集出版の企画はペーター・ラング社から別の出版社へ移譲され、今後どのような形で継続されるのか残念ながらまだ見通しは立っていない。ただし、ベルリン版全集の編集責任者の一人でもあった、ベルリン自由大学私講師エアハルト・ヴァイドル (Erhard Weidl) 氏が中心となって書簡の解説・編集作業は続けられており、その成果がすでに全集とは無関係に三点ほど刊行され、主だった書簡については今後とも引き続き出版が予定されているそうである<sup>8)</sup>。

ドイツでのこうしたニコライ再評価の動きを受けて、日本におけるニコライ研究の基礎資料の一つとして彼の伝記を訳すのは、意味のないことではないだろう。それにしても、ニコライの伝記としては、彼自身の筆になる „Über meine gelehrte Bildung, über meine Kenntniß der kritischen Philosophie und meine Schriften dieselbe betreffend, und über die Herren Kant, J. B. Erhard, und Fichte. Von Friedrich Nicolai. Eine Beylage zu den neun Gesprächen zwischen Christian Wolf und einem Kantianer. Berlin und Stettin 1799.“ や、彼の親友でパルタイの洗礼立会人の一人でもあったゲッキ

ング<sup>9)</sup>の „Friedrich Nicolai's Leben und literarischer Nachlaß. Berlin: Nicolaische Buchhandlung 1820.“ などがある中で、どうしてパルタイの伝記を訳すのか説明が必要である。前者はまず自伝であり、またそのタイトルからも容易にうかがえるように、カントを始めとしたドイツ観念論哲学者に対する論争書なので、論述の客観性という点で少々問題がある。ゲッキングの伝記は、上記ニコライの自伝に加え、その遺稿をも視野に入れながら書かれており、また、ニコライとレッシング、メンデルスゾーン、月曜クラブ<sup>10)</sup>や水曜会<sup>11)</sup>のメンバーとの関係については非常に詳しく触れている。しかし、ニコライの同志であったゲッキングゆえに、その論述はどちらかというとなニコライに好意的である。また、戸叶氏は、上掲書「第十章 孤独な晩年の生活」の中でパルタイの伝記を一部引用しているものの、それ以外の部分では主に上記ゲッキングの伝記、ニコライの自伝に依拠してニコライの生涯を綴っている。つまり、ゲッキングの伝記とニコライの自伝についてはすでに日本語でその概略を読むわけで、これにパルタイの視点から見た別のニコライ像を付け加えることはそれなりの意味を持つはずである。ゲッキングの伝記やニコライの自伝はむしろ、パルタイの描写を補うための資料として扱い、必要に応じて註の形で引用したい<sup>12)</sup>。

さらに、パルタイの妹リリー<sup>13)</sup>の日記をまとめた „Lili Parthey. Tagebücher aus der Berliner Biedermeierzeit. Hrsg. von Bernhard Lepsius. Berlin-Leipzig: Gebrüder Paetel 1926.“ が出版されており、その序論で編者レプジウス<sup>14)</sup>はニコライについても簡単に触れている。ニコライ家の間取りや別荘のあったブルーメン通り (Blumenstraße) の様子については、他の伝記にはない図解付きで詳しく述べられているものの、かなりの箇所がパルタイの直接、間接引用であるため、これもやはり参考資料として扱うことにする。

パルタイの本を翻訳する理由は他にもある。パルタイは、ニコライを中心に描写する一方で、ニコライの活動の舞台となったブリュダー通り (Brüderstraße) 周辺の様子、その近辺でのいろいろな出来事——例えばナポレオン軍がベルリンに侵攻してきた時の様子——、ニコライと家族の関係、あるいはニ

コライと当時のベルリンの文化人たちとの交友関係、当時のファッションなどについてもとても興味深い報告をしている。そもそもベルリンという町は、シュプレー川 (die Spree) を挟んでその両岸に生まれた村落ベルリン (Berlin) とケルン (Cölln) が結びついて発展した町であり、ニコライ書店のあったブリューダー通りはケルン側のほぼ中心部に位置している<sup>15)</sup>。現在では対岸のベルリン側、特にニコライ地区 (Nikolaiviertel)<sup>16)</sup> が元祖ベルリンの面影を伝える歴史的な場所として観光スポットになっているが、ニコライの時代にはフリードリヒ大王の王宮もケルン側、ブリューダー通りの北の突き当たりに建っていて、この辺りこそベルリンの心臓部として活気に溢れていたはずである。その証拠に、ブリューダー通りにはニコライ以外にも、当時を代表する銅版画家でニコライの小説にも挿絵を提供しているゴドヴィエツキ<sup>17)</sup> などの重要人物が暮らしていた。ニコライ家にまつわる人間関係も実に興味深い。ニコライが1787年にブリューダー通り13番の家を買った後、その改築を依頼したのがツェルター<sup>18)</sup> である。フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディなどの弟子を育て、1800年以降はベルリン合唱協会会長を務め、ゲーテとの交友でも知られるツェルターは、左官の親方でもあった。また、バルタイの描写にも出てくるが、ニコライの家は当時のベルリンを代表する作家、思想家、学識者たちが集まるサロンであり、ベルリンの文化の中心であった。したがって、ニコライ家を中心としてブリューダー通り界隈の様子を描写したバルタイの文章は、単にニコライ研究のためだけでなく、ベルリンの歴史や文化史を振り返る際にもとても貴重な資料となるはずである。

ここに訳出するバルタイの本は、1871年にまず友人向けに稿本として出版され、1907年にエルンスト・フリーデルが新たに編集して400部出版されたもの<sup>19)</sup> をさらに短く編集し直したものである。また、バルタイは、ニコライについて年代を追って体系的には描写していない。どちらかというところ、ニコライに関する様々なエピソード、容姿・性格描写、家族・隣人・知人との関係をコラージュ風に積み重ねて行く手法を取っている。拙訳には、上述したニコライの自伝、ゲッキングの伝記、戸叶氏の著書、『リリーの日記』に付けられたレブ

ジウスの序論を始めとして、他の二次文献からも必要に応じて注の形で補足説明等を加えた。そうすることで、パルタイが提供してくれるニコライのパノラマをさらに広げ、そこから、ニコライを中心とした当時のベルリンの社会的・文化的状況の全体像をできるかぎり浮かび上がらせることがねらいである。

また補足資料として、ブリューダー通りを中心としたニコライゆかりの地の今の様子を(場合によっては昔の様子と比較しながら)写真等を使って紹介してみた。現在ベルリンでは、昔王宮があったところに新しい王宮を再建しようという動きがある。そうすると、隣接するブリューダー通りにもまた活気が戻ってくるかも知れない。もちろんそれは、ニコライの頃とはまったく異なる観光産業に依拠した活気になるだろう。このように激変して行くドイツの首都ベルリンの、ある小さな一画の過去と未来をつなぐ現在の様子を、できる限り記録に留めておきたいと思ったからである。

この翻訳を仕上げるに当たっては、特に二人の方のお世話になった。一人は、1713年にニコライの父親が創業して以来現在もなお営業を続けている(ただし、当時は一緒だった出版部門と小売部門が、現在では分離して独自に営業している)ニコライ書店の前社長ディーター・ボイアーマン (Dieter Beuermann) 氏である。ボイアーマン氏からは、今回この翻訳の底本として使ったパルタイの本だけでなく、『リリーの日記』、本文中でも言及されている「長さ・幅ともに1インチそこそこの小さな」携帯暦の復刻版、博物館ニコライハウス (Museum Nicolaihaus) の館員 Marlies Ebert 氏と Uwe Hecker 氏が執筆し近刊予定の „Das Nicolaihaus. Brüderstraße 13 in Berlin. Ein Beitrag zur Kulturgeschichte der Stadt Berlin“ の原稿のコピーなど、非常に重要な資料をいただいたばかりか、特にニコライ家、パルタイ家およびその人間関係に関する質問に懇切丁寧に答えていただいた。また、何度かご自宅にお邪魔した際に、オリジナル版「ドイツ百科叢書」を始めとしたニコライの著書およびニコライに関する貴重な書籍を拝見させていただいた。もう一人は、すでに上述したエアハルト・ヴァイドル氏である。ヴァイドル氏には、ポツダム広場の近くにある国立図書館 (Staatsbibliothek) でニコライの自筆書簡の一部を見せていただ

きながら、ニコライの書簡編集作業の一端を紹介していただいた。その後、何度も手術を繰り返さなければならないほどの大けがをなされたにもかかわらず、どうしても翻訳に困った箇所について貴重なアドバイスをいただいた。

その他、博物館ニコライハウスの方々やメルキッシュ博物館 (Märkisches Museum) の館員の方にもいろいろとお世話になった。また、そもそもこのような方々と知り合えたのは、獨協大学から 2001 年度長期海外研修の機会をいただいたからであり、快く私の受け入れ先となってくださったベルリン自由大学文学理論・比較文学研究室 (Seminar für Allgemeine und Vergleichende Literaturwissenschaft) ゲルト・マッテンクロット (Gert Mattenklopp) 教授のおかげである。あわせてここに心からの謝意を表したい。

#### 翻訳：ブリューダー通りの家——ベルリンのある有名な家族の暮らしから——<sup>20)</sup>

父パルタイ、祖父ニコライ

1798 年 10 月 27 日、ベルリンのブリューダー通りにある母方の祖父フリードリヒ・ニコライの家で、私は生まれた。洗礼を施してくれたのは、ニコライの親友で後に近所に住むことになる監督教区長テラー<sup>21)</sup>。立会人は、詩人のフォン・ゲッキング、エリーザ・フォン・デア・レッケ夫人<sup>22)</sup> 等々。両親にとっては最初の子供で、半死の状態で生まれてきたのを揺すったりたたいたりして、私はやっと息を吹き返したようだ。2 年後には妹のリリー、その後さらにゾフィーが生まれたが、このゾフィーは 1 歳になる前に亡くなった。

私が生まれた頃、父<sup>23)</sup> は宮廷顧問官という肩書きで、財務管理総局で働いていた。波瀾万丈の人生を送り、結婚した当時すでに 52 歳になっていた。ザクセンの山間の町フランケンベルクに暮らす裕福な亜麻布職人の長男として生まれ、家業を継いで親方資格を取り、織物・亜麻布職人組合に入会したが、24 歳でこの職業に不満を感じた。父は大の音楽好きだったが、小さな故郷の町ではこの音楽熱を満たしてくれる機会があまりにも少ないというのがもっぱらの理由だった。

こんなわけで父はライプツィヒに出てきた。ライプツィヒには、以前見本市の際に知り合った知人が数人いた。しばらくの間は記譜と家庭教師で暮らし、独学でフランス語とイタリア語を学び、さらに音楽の修業にも努めた。やがて楽長ヒラー<sup>24)</sup>が父の非凡な音楽的才能に気付き、1774年に、音楽教師兼家庭教師としてクーアラントのメーデム伯爵<sup>25)</sup>に紹介してくれた。ライプツィヒからミータウへの旅は、当時は、今想像するよりもはるかに大きな冒険で、世界一周旅行のようなものだった。父が親類縁者に宛てた手紙が一部残っているが、これらの手紙がそのことをはっきりと証言している。

メーデム伯爵家に温かく迎え入れられた父は、じきに家族みなの人気者になった。フォン・レック男爵との結婚がうまく行かなかった長女シャルロッテは、この近辺で一番美しい女性と言われていた。彼女は後にドイツへやって来ると、シャルロッテの代わりにより詩的なエリーザという名を名乗った。カリオストロに関する暴露本<sup>26)</sup>、『イタリア紀行』その他の著作でドイツ文学史に名を残すことになった彼女と、父は終生変わらぬ友情を結んだ。

父が担当したのは、主に伯爵家の次女ドロテア<sup>27)</sup>の教育である。ドロテアは音楽が大好きだったため、父は特に力を入れて音楽の指導をした。

ドロテアの教育が終わると、彼女の兄フリードリヒ<sup>28)</sup>がドイツ、フランス旅行に出かけるというので、父が同伴することになった。しかし、二人はシュトラースブルクまでしかたどり着けなかった。ここでフリードリヒが風邪をこじらせて病に伏し、1778年6月11日に若干20歳で亡くなってしまったからである。この事件は平和が続いていた当時一大センセーションとなり、シュトラースブルクの牧師ブレッスイヒ<sup>29)</sup>が特別に『ヨハン・フリードリヒ・フォン・メーデム伯爵の生涯。全2冊』(シュトラースブルク、1792年)という本を書いたほどである。

ベルリンのニコライ家の人々は、このブレッスイヒの本をよく読んでいた。ニコライの長女ヴィルヘルミーネ<sup>30)</sup>はそこに掲載された父の手紙を読んで、直接会う前からすでに彼に密かな愛情を抱いていた。それ故、数年後に父がベルリンを訪れ、ゲッキングからニコライを紹介された時には、ニコライ家の人々

にとって父は見ず知らずの人には思えなかったのである。

当時ニコライは書籍出版業者・作家として大きな名声を博しており、彼の家は市民たちが集う初期サロンの一つだった。ピアノとフルートの名手だった父は大歓迎を受け、モーツァルトの新作コンチェルトの発表会では二つのフルートソロを初見で見事に演奏した。感激したニコライは、演奏後父を抱きしめて口付けしたほどである。しかし、それ以上の親密な関係というのはまだ想像もできなかった。地位も財産もない男が、こんなに裕福で声望のあるニコライ家の娘にどうして求婚などできただろうか。

二人の愛情が深まるにつれて、この困難な問題もついに解決した。枢密財務顧問長官として当局で大きな影響力を持っていたゲッキングの力添えで、父は財務管理総局に給料のいい職を見つけ、長いこと愛してきたヴィルヘルミーネにやっと正式に求婚することができたのである。結婚式は、1797年7月19日に、レーム小道18番の別荘<sup>31)</sup>で執り行われた。ニコライ家の一階にある、中庭側と、草がびっしり生い茂り高い塀に囲まれた庭園側の二カ所に窓のついた小さな住まいが、その後の幸せな家族生活の舞台となった。父はありとあらゆる手立てを用いて、年を取り、すでに妻を亡くしていた義父の暮らしを快適なものにしようと努めた。ニコライは、次々と家族の不幸に見舞われていたのでなおさら感謝して、父の好意を受け止めた。

ニコライの父親クリストフ・ゴットリーブ<sup>32)</sup>は、ヴィッテンベルクのゴットフリート・ツィンマーマン<sup>33)</sup>に書籍出版業を学び、その娘と結婚した。持参金代わりにベルリンの小さな支店を譲り受けたが、17世紀末のベルリンは、文学書の流通に関しては、有名な大学町ヴィッテンベルクよりはるかに遅れていた。

私の曾祖父には八人の子供がいたが、ニコライはその末っ子だった。若い頃から文筆業に人並みならぬ愛着を持っていたニコライは、成人して父親が亡くなると、わずかな遺産の利息と自分の筆で生きて行こうと決心した。父親が残した書店は兄<sup>34)</sup>が継いだか、その兄も数年後に亡くなってしまった。別の兄<sup>35)</sup>は、フランクフルト・アン・デア・オーダーの高名な神学教授だった。レッシングの友人で、レッシングとランゲ<sup>36)</sup>の論争の中でしばしば言及される人物で



ある。この兄が書店を継ぐ可能性はなかった。大学教授から本屋に鞍替えするということは、当時としては大きな社会的後退を意味したからである。

こんな経緯で、ニコライは父親の書店を継ぐ決心をした。彼はまず、古くて貴重な在庫品の大部分を換金し、それを資本金として書店の経営を続けた。彼の企画は成功した。1765年には「ドイツ百科叢書」を創刊し、1805年まで268巻の刊行を続けた<sup>37)</sup>。7年戦争の間にオイゼービア・マカーリア・シャルシュミット<sup>38)</sup>と結婚し、八人の子供に恵まれた。

文芸批評の分野でニコライが果たした役割は、文学史上意義のあるものだった。ドイツ文学の夜明けをどしゃ降りの悪天候だと勘違いした点は今後も非難を免れないだろうが、自分が正しいとみなしたことに対して常に心底誠実な努力を傾けた点は、彼の論敵からも認められている。亡くなった時点で所有していた蔵書は16000巻を数え、中には書誌学上の稀覯本も含まれていた。学識者を描いた絵のコレクションは6800枚、楽譜や音楽図書のコレクションには昔の貴重なものも含まれていた。趣味は他にもあったが、ニコライは常に学識者らしい入念さと節度を持ってすべての趣味にいそしんでいたため、友人のエンゲル<sup>39)</sup>が「他の人はたった一つの道楽しか持っていないのに、ニコライには既一杯の道楽がある。」<sup>40)</sup>と言ったほどだ。

1785年には、妻方の家族と若い盛りの五人の子供に囲まれて銀婚式のお祝いをした<sup>41)</sup>。お祝いの席は99人分用意された。主だった出席者の名を挙げると、ピースター<sup>42)</sup>、ドーム<sup>43)</sup>、ゲーディケ<sup>44)</sup>、グライム<sup>45)</sup>、クライン<sup>46)</sup>、マイル<sup>47)</sup>、メーゼン<sup>48)</sup>、エルリヒス<sup>49)</sup>、エースフェルト<sup>50)</sup>、ラムラー<sup>51)</sup>、テラー、テーデン<sup>52)</sup>、ヴェルナー<sup>53)</sup>など、18世紀中頃から世紀末にかけてベルリンで評判だった人物ばかりである。

この銀婚式にニコライのもとに集まった素晴らしい人々の中から、まもなく、一人また一人と亡くなる人が続出した。

自ら望んでニコライの書店を手伝っていた長男ザームエール<sup>54)</sup>は、子宝に恵まれないながらもハレの有名な法学者クラインの娘と幸せな結婚生活を送っていたが、鬱ぎの虫に襲われて自分の人生に幕を引いてしまった(1790年)。彼は

若い頃から憂鬱症だった。

ザームエールの死後数年して(1793年)、ニコライは今度は妻に先立たれた。健康に自信を持っていた彼女だが、盛装してサロンに出かけるため寝室を出ようとしたところで突然卒中の発作に襲われ、倒れたきり二度と立ち上がることはなかった。

知的で才気煥発、母親のお気に入りだった次男のカール・アウグスト<sup>55)</sup>は、体力をうまくコントロールして使うことができなかった。父親ニコライの高圧的な態度に耐えられなかった。姉ヴィルヘルミーネのとりなしによって父親との軋轢は、なくなりはしなかったが和らげられた。父親に我慢がならなかった彼は自分で書店を立ち上げ、ティークの初期作品の出版を手掛けたりしていたが長くは続かず、30歳で亡くなってしまった(1799年)。

三男ダーフィット<sup>56)</sup>は官房学を学び、行政関係に優れた才能を示し、立身出世のスピードも速かった。誠実でストレートな人柄のため、どこへ行っても友達ができた。最初はベルリン市の行政に携わっていた。後に私たち子供が、優美なゴシック体で書かれた街角の小ざれいで青い街路標識や、家々の玄関口に付けられた青地に金色の番地表示を素晴らしいと言うと、これはダーフィットおじさんが考え出したものだと説明を受けた。

ダーフィットは31歳の時にカーリシュの官房長官に任命され、彼の妻、枢密財務顧問官アイヒマン<sup>57)</sup>の若くて愛くるしい娘<sup>58)</sup>を連れて赴任した。赴任後まもなく、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世<sup>59)</sup>が訪問してくるようになった。そこでダーフィットは、国王の食卓に獣肉を供するため、早朝から同僚たちと馬に乗って出かけた。獵師が仕留めたウサギを持ってやって来ると、彼の馬がそれに怖じ気付いて暴れ出したので、これを静めようとしてダーフィットは馬の目の前にウサギをぶら下げた。ところが、逆に馬は棒立ちになって乗っていたダーフィットを振り落とし、彼の胸を踏みつけてしまった。瀕死の状態でもとへ運ばれ、その後まもなくこの世を去った(1804年)。

ニコライの末娘、ロットヒェン<sup>60)</sup>おばさんのことは今でも鮮明に覚えている。彼女が亡くなったとき、私は10歳だったからだ。ほっそりときゃしゃで、

頬が青白く、優しい目をしていた。あの頃流行の服装や髪型をしていたというだけでなく、情愛のこもった顔つきの全体的な印象から、後に、『ヴェルター』のロッテの肖像画を見るとおばさんのことをよく思い出したものだ。ツェルターに言わせるとたぐいまれな現象の一つに数え入れられる、そのすばらしく響きの豊かな声のおかげで、おばさんはファシュ<sup>61)</sup>率いる合唱協会の誇りだった。しかし、ひょっとしたらこのことが原因で過度の負担がかかったのかも知れない。胸を病んで、だんだん衰弱していった。

おばさんは晩年、ニコライとうまく行かなかった。ライブツィヒの作家ロホリッツ<sup>62)</sup>が彼女に誠実な愛情を示し、彼女もまたこれに心から応えた。しかしロホリッツは、求婚の際に、自分の文学作品でニコライ書店を新たに、より大きく躍進させたいなどとあまりにも大きな自信をほめかしてしまったのだ。これが老ニコライを激怒させ、以後、娘の結婚については一切聞く耳を持たなかった。結婚に自分の幸せを見いだそうと思っていたおばさんは、悲嘆に暮れながらやつれて行き、ニコライよりも3年早く、1808年7月2日に亡くなった。

私のごく幼い頃の思い出の一つに、両親と行ったテプリッツへの旅がある。母が湯治することになったのだ。一つ一つのシーンが、つながりなくばらばらにはあるが記憶に残っている。馬車の中で座席から座席へ橋渡しした小さな板の上で眠ったこと、ボヘミアのガイアースベルクの麓で野生らしき雄牛が馬車に繋がれたこと、湖に面した園亭から美しい乳白色の白鳥に餌をあげたことなど。テプリッツからの帰路、ドレスデンで父の妹<sup>63)</sup>を訪ねた。二度目の結婚で商人カイナーに嫁いだおばは優しい人で、私を鉛白工場の酢酸貯蔵庫<sup>64)</sup>に案内し、干しぶどうをご馳走してくれた。

この湯治はしかし、母の健康回復には特に効果がなかった。ロバの乳とかアイランドの苔など他の方法も試みたが無駄だった。結局母は、1803年9月1日、私が5歳になる前に亡くなった。母についてはごくほんやりとした記憶しか残っていない。その声も顔立ちも忘れてしまった。私の記憶力の発達がと

でも遅かったためである。

ここで、幾多の観察によって確認された、私の生まれつきの生理的特質について触れておきたい。つまり、声のはっきり耳に残っている人については、その体つきや顔つきもはっきり記憶しているのだが、声の印象が残っていない人については、その姿形も記憶から抜け落ちてしまうのである。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト<sup>65)</sup>はこの特質に興味を持って、「他の人の場合も、耳で受ける印象と目で受ける印象の間にこのような密接な関係があるのだろうか。生理学者にとっては調査研究に値するテーマだ。ちなみに、私の場合そういった関連性は見られない。」と言った。

結婚後早々に未亡人となってしまったダーフィットおじさんの妻は、親元に戻っていて、ニコライ家にもよく顔を出した。とても温和で善良な人だったので、私たち子供は彼女に会うのが好きで好きで仕方なかった。それ故父は、彼女と結婚するのが、自分にとっても子供にとっても何よりの幸せであると考えていた。ある晩、父は私たちを膝の上へ乗せて優しくたずねた。『『小おばさん ロットヒェン』(ニコライの娘、『大おばさん ロットヒェン』と区別するために、彼女のことをこう呼んでいた)をお母さんに欲しくないかい?』私たち二人は元氣よく「うん。」と答えた。「だったら、明日おばさんにきちんと頼んでごらん。」私たちは大喜びでおばさんに頼んだ。といっても、話を切り出したのは例によって妹の方で、私にはかみながら、でも本当に心から喜んでうなずいていたのである。

二人の子供、つまり私の母とダーフィットおじさんを失う苦痛を味わった祖父ニコライは、義理の息子と義理の娘が結婚して老後を楽しませてくれるのを喜んだ。

二度目の結婚のとき父はすでに61歳だったが、義父アイヒマンとくらべて、青年のようだったとは言えないまでも実に若々しかった。ボンベイウスとカエサルの場合のように<sup>66)</sup>、義理の息子の方が義理の父より年上だということが分かったのは、何年も経ってからのことである。私の父は1745年生まれで、祖父アイヒマンは1748年生まれだった。

フリッツ、ヘアスタイル、辮髪

父の二度目の結婚は、年齢差があったにもかかわらず、私が想像できる限りで一番幸せな結婚だった。父は、ウェイクフィールドの牧師<sup>67)</sup>のように、周りの人々が楽しそうな顔をしているのを見るのが何よりも好きで、また、周囲をそんな雰囲気にするすべを心得ていた。二人目の母は、私たち子供に対して愛情と親切そのものであり、私たちも心からの愛情でこれに応えた。しかし、母の人のよさはしばしば弱さにつながり、父が厳しい顔をするのもごくまれだったので、私たちがいたずらをしたりわがままを言ってもたいていはお咎めなしだった。

弟モーリッツ<sup>68)</sup>が生まれて1年後、私たちの子供部屋には四人目の仲間が加わった。父が、ある貴族の庶出子を引き取ったのである。名前はフリッツ。彼は10年間わが家にいた(1808–1818年)。私たちはまるで兄弟のように愛し合っていた。もちろん衝突することもあり、時には深刻な事態にいたることもあったが、そんな中で子供は鍛えられるものである。

フリッツ(1800年生まれ)は私より2歳年下で、とてもお人好しで愛想が良く、怒りっぽいがすぐ仲直りをし、おませでおしゃべりで、何でも知っていて何でも見たことがあると言っては口出しする出しゃばりで、勉強が特に好きというわけではないが、しかし実際の状況を見極める能力に長けていた。ザクセンの小さな田舎町で大きくなったため、ザクセン式の礼儀正しさが身に付いており、私の両親のことをうち解けて「お父さん」、「お母さん」と呼べるようになるまで時間がかかり、しばらくは「宮廷顧問官パルタイ殿」、「宮廷顧問官パルタイ夫人」と呼んでいた。

フリッツと私の性格の違いは、最初の数日ですぐ明らかになった。いたずらの罰として部屋の隅に座らせられると、私の場合、自分を不幸に思う気持ちで心がいっぱいになり、そこに座ったまま静かに泣き続けるだけで、罰を軽くしてもらえるよう嘆願することなど思いもつかなかった。しかし、フリッツと私が殴り合いをして、初めて二人とも部屋の隅に別々に座らせられた時、しばらくするとフリッツが落ち着き払って、断固とした調子でこう切り出した。「宮廷

顧問官パルタイ夫人、もう立ち上がってもよろしいでしょうか?」正直言ってこの手本をまねるのは私には難しい、いや、ほとんど不可能であった。

すでに述べたように、二度目の結婚のとき父はすでに61歳だったが、いまだに恰幅がよく堂々としていて、身のこなしのきびきびとした男だった。若い頃はダンスが達者で、大胆に馬を乗り回した。競争や跳躍で父にかなう者はごくわずかしかなかった。シュトラースブルク滞在中はビリヤードでならして、繰り返し賭けで勝負していた。

父は、粉をふりかけた髪を額からかき上げて、後ろで辮髪に結っていた。父の話では、18世紀末、だて男たちは辮髪に贅を尽くしていた。変わった形の辮髪が流行しては、忘れ去られていった。贅沢な辮髪や庶民的な辮髪、他人の髪のもで作った辮髪や半分裏打ちした辮髪等々があった<sup>69)</sup>。今の濃い髭と同じように、太い辮髪は男らしさの象徴であった。父の辮髪はとても太かったので、たいてい他人の髪のもで作った辮髪だと間違えられた。

フランス革命によって辮髪は廃止されたが、ドイツではその後も辮髪を結う習慣が廃れなかった。1800年になってもなお、ジャン・パウルは『巨人』<sup>70)</sup>の主人公に他人の髪のもで作った辮髪をつけさせている。今の私たちには滑稽に思えるが、当時としては普通のことだったのである。対フランス戦争(1806-1807年)の間は、髪粉、ポマード、辮髪のリボン、髪袋や時間を節約するために、ベルリンではたいていの市民が辮髪を切り落とした<sup>71)</sup>。

父が調髪してもらう様子を、私はよく窓辺の足台に座って注意深くながめていた。とても時間がかかった。まず奉公人のヴィルヘルムが道具を小脇に抱えて部屋に入ってきて、一辺が少なくとも6フィートはある四角い、亜麻製の敷物を絨毯の上にひろげ、その上に椅子を置いてから、「宮廷顧問官殿、もしおさしつかえございませんようでしたら。」と言う。父は書き物机から立ち上がると、ヴィルヘルムの手を借りて白い化粧着を着て、新聞を手に取り椅子に座る。ヴィルヘルムは、前日の辮髪をほどいて髪全体を何度もくしけずる。白い磁器製の箱からいい匂いのするポマードをかなりの量取り、髪全体に塗る。この作業の間、ヴィルヘルムの手はポマードでひかり、ぴちゃぴちゃと音を立てるの

だが、私はこれがいつも嫌でしかたなかった。続いて、専門用語で何というのか忘れてしまったが、木製の筒を使って両耳の上で長く水平方向にカールを巻き、カールがくずれないようにポマードで固める。

それから髪粉の番だ。ヴィルヘルムは、上質の小麦粉がたっぷり詰まった大きなブリキ缶を開け、柔らかい羽毛でできたおしろい刷毛をひたし、刷毛で軽くたたきながら髪全体にまんべんなく白い粉をふりかける。粉は、ポマードを塗った髪に付着するだけでなく広く周囲に飛び散るので、新聞紙で繰り返しはたき落とさなければならなかった。乾いた粉がもうもうと立ち上るのは先程のポマードと同じくらい不快で、このもやが晴れるまで私は息を止めようと骨を折った。

次にヴィルヘルムは、一方の端を歯の間にはさんで固定した白いリボンを使って、ちょうど首筋のところで辮髪を結う。さらに良質の黒い絹製リボンを入念に巻き付ける。

エレガントな辮髪リボンは小さな贅沢品だった。それが恋人からもらったプレゼントであれば、甘い思い出の品であった。最後にヴィルヘルムが父にかみそりを渡す。父は鏡の前に立って、かみそりの鈍い刃で慎重に髪粉を額から髪の付け根までかき上げる。

こうして出来上がった髪の芸術作品は、そもそもは、被らずに左の脇の下に抱える帽子<sup>72)</sup>との組み合わせを前提としたものだった。しかし、当時の人々はたいてい三角帽か丸い帽子を被っていて、帽子を被ったり脱いだりするたびに髪型が崩れ、帽子の方もすぐにポマードで脂だらけになった。そのため、夜会に出かける前に、父は改めて髪粉をふりかけてもらうか、もう一度最初から退屈な調髪作業を繰り返してもらっていた。

就寝前にヴィルヘルムは、側頭部のカールをカールペーパーにくるみ、辮髪リボンを家用のものと交換し、辮髪の向きをうまく変えて白い木綿のナイトキャップの中にしまい込んだ。

1806年の戦争中に、ベルリンでは辮髪を結う習慣がますます廃れていったが、父は自分も辮髪を切り落とすと言い出した。最初、私たちはみな反対した。

辮髪は父という人物の一部であり、それを失って欲しくないと思ったからである。しかし、私たちの気持ちも次第に変わっていった。学校ではすでに教師の大半が辮髪を結っておらず、辮髪を結っている数少ない教師には、ありとあらゆるあだ名がつけられていた。例えば、書法の先生はセロリの根っこ、唱歌の先生はミミズと呼ばれていた。ある日曜日の朝、父が、切り落とした、全紙一枚の上には乗り切らないくらいの辮髪を見せてくれたときには、私たちはびっくりして悲喜こもごも複雑な気持ちになった。父の頭には、ふさふさとした銀白色の、絹のように軟らかい髪が残った。この髪は77歳で亡くなるまで抜け落ちることはなく、それだけいっそう私たちは気に入っていた。

ブリューダー通りの家、監督教区長の住まい、ニコライ家の暮らし向き

私が育ったブリューダー通りの家は、祖父ニコライが1787年に購入して改築したものだ<sup>73)</sup>。まだ私の所有物で、孫たちがここで暮らしている。ニコライの義母シャルシュミット夫人もこの家に住んだことがあるので、市民の家庭としてはめずらしく、相前後して6世代が同じ場所で暮らしたことになる。

この地方の言い伝えでは、この家は慈悲の修道士会修道院があった場所に建っていて、ブリューダー通りという通りの名前もここから来ているそう<sup>74)</sup>。そう仮定する根拠も十分ある。確かに、ニコライの『ベルリン紹介』には慈悲の修道士会に関する言及はなく、王宮前広場<sup>75)</sup>の古い司教座教会の近くに建っていたと言われる黒の修道院<sup>76)</sup>のドミニコ会修道士、および、クロスター通りの灰色の修道院<sup>77)</sup>のフランシスコ会修道士について触れているだけである。

家の敷地には大きな中庭と小さな中庭があり、また、大昔にさかのぼる建物の残滓がある。大きな中庭の南西側には、フォン・クレーデン教授<sup>78)</sup>によると14世紀に建造されたという、半円筒型丸天井のついた地下通路がある。この地下通路に接続して南東側に15、16世紀の尖頭型丸天井があり、その下には内壁を張った丸い、今は土砂で塞いでしまった貯水槽がある。幅広の、石で頑丈に築かれた排水溝が西の側翼、小さな中庭とこれに続く「フランス屋敷」の地所の下を通して、ユングフェルン橋<sup>79)</sup>のすぐ横でシュプレー川に通じている。家



の通りに面した部分と南東の側翼の下にはとても広い地下室がいくつかあり、真ん中の地下室から煙突まで、一階の部屋の床下を通して石の暗渠が通っているのがつい最近(1866年)発見された。つまり、修道士たちは地下室を暖房し、煮炊きもできたということだ。彼らは、十分な食料と薪を持っていて、敵の襲撃や冬の包囲攻撃にも持ちこたえることができたのである。

現在の家は、1730年に大臣フォン・クニプハウゼン<sup>80)</sup>によって建てられ、大がかりな客の応対や祝宴用に設えられた。その後ゴツコフスキー氏<sup>81)</sup>が買い取り、さらにディーコー氏<sup>82)</sup>の所有物となった。ニコライが1787年にディーコー氏から家を買ひ、ツェルターに改築してもらったとき、たった一つの食堂が14の部屋に生まれ変わった。その他にまだ図書館用の広間、音楽会用の広間、パーティー用の広間が残っていた。

二階の広い部屋の間をうまく行き来できるように、ツェルターは、中庭の上方に側翼から側翼へ、屋根のついた木製のトラス構造<sup>83)</sup>の廊下を作り、さらに、通り側からその廊下の真ん中へ T の字になるように廊下を渡した。こうして当初の目的は達成されたのだが、廊下のおかげで下の部屋は暗くなり、中庭に入ってくる人は、頭のすぐ上を通っている廊下に不快感を覚えた。私たち子供はそんなことはお構いなしで、廊下を遊び場としてありがたく利用させてもらった。一番楽しかったのは、音のする床板の上を走ったり跳んだりすることだった。

私たちの家から数歩離れたブリューダー通り10番に、ペトリ教会監督教区長の住まい<sup>84)</sup>がある。この家もまた、昔の慈悲の修道士会修道院の跡地に建っているのだという説がある。この説の根拠がどこにあるのかは知らないが、隣人から監督教区長の家にまつわる恐ろしい話を聞いたことがあり、その話は私たち子供の心に忘れがたく焼き付いている。

それはこんな話だ。100年前、この大きな家は年取った、裕福な、子供のいない、けちな未亡人のものだった。彼女はまったくの一人でこの家に住んでいて、小さな屋根裏部屋だけ貧しい神学生に貸していた。ある朝、この未亡人がベッドで絞殺され、貯金箱が空になっているのが見つかった。奉公人は無罪で

あることがわかったので、貧しい神学生に嫌疑がかかった。彼は告訴され、当時の刑事訴訟手続に従って、拷問にかけろぞと言って自供を迫られた。これに怖じ気づいてしまい彼が犯行を認めたのか、それとも実際に拷問を受けたのかどうかはもう覚えていない。とにかく、神学生は処刑されることになった。

死刑執行の前夜、この事件を担当していた判事は、夜遅くまで仕事部屋で書類に向かっていた。目の前の机の上には、ろうそくのぼんやりとした光に照らされて証拠物件が並んでいたが、その中に未亡人絞殺に使われた縄があった。そこへ、翌日の段取りを申し合わせるために、死刑執行人が面会を求めてやって来る。彼は中に通される。判事は、話をしている間、死刑執行人が机の上に置かれた縄をととも注意深く見ていることに気付く。「どうしてこの縄をそんなにじろじろと見ているのかね？」と判事はたずねる。死刑執行人は答えて、「判事殿、申し上げますが、この縄には刑吏の手下にしか結べない結び目がございます。」

この重要な証言に基づいて処刑は延期され、あらためて審理が行われた。有力な証拠があったため、まもなく、犯行は実際に刑吏の手下によって行われたことが明らかになった。貧しい神学生は幸いにも死刑を免れた。老婆の相続人たちは凶行が行われた家を所持しなかったため、市当局がこの家を引き取り、ペトリ教会の監督教区長の住まいとして使うようになった。

この話を聞いて以来、監督教区長宅のそばを通り過ぎるたびにある種の戦慄を覚え、監督教区長テラーはどんな気持ちでこの家に住んでいるのだろうかとしばしば考えた。後に、殺人が行われ、一風変わった仕方これが発見されたのはアレクサンダー広場<sup>85)</sup>のいわゆる義足酒屋<sup>86)</sup>であり、恐れる必要はないのだということがわかった。それでも私は、ブリューダー通りの言い伝えをここに書き留めておきたかったのである。

ニコライは、1787年に、当時のありとあらゆる贅を尽くして新しい家を設えた。今も残っている請求書には、エタジュール<sup>87)</sup>、ベルジュール<sup>88)</sup>、ゲリドン<sup>89)</sup>など、私たちがかうじて名前だけ知っているような家具がリストアップされている。ニコライはこの家を、広範にわたる饗応の舞台とした。彼の名声

はドイツ全土に響き渡っていたので、ベルリンを訪れる学識者はたいていニコライを訪問した。直接会いたいと面会を申し出る人もいれば、多忙をきわめるニコライの貴重な時間を奪いたくないと、一階で営業していた書店に名刺を置いて行くだけで満足の人もいた。書店の店員は、仕事のかたわらこれら訪問者のリストを作って、毎週金曜日にニコライに渡さなければならなかった。ニコライは、土曜日に招待する人の名前に下線を引き、ほとんど日曜日ごとに催される華やかな午餐には、新旧さまざまな客人が集まって来た。他国の詩人をもてなす時には、ベルリンの詩人の中からラムラー、ゲッキング、カルシン夫人<sup>90</sup>が招かれた。哲学者たちにとって、モーゼス・メンデルスゾーンは魅力的な人物だった。教育家たちはゲーディケとフォン・ロホー男爵<sup>91</sup>、愛書家たちはビースターとエルリヒスを囲んで集まり、神学者たちの相手をしたのはテラー、ツォリコーファー<sup>92</sup>、ツェルナー<sup>93</sup>、医者相手をしたのはテーデンとゼレ<sup>94</sup>。美学者の代表を務めたのはエンゲル、法律家を代表したのはスアレス<sup>95</sup>とクライン。音楽家の中からはファシュとツェルター、画家の中からはローデ<sup>96</sup>、コードヴィエツキとマイルが選ばれた。

こうしてニコライの家は、何年もの間首都ベルリンの文芸、社交の中心となっていた。後のサロンやクラブハウスのような役割を果たしていたのである。もてなしは手抜きなく行われ、市民に相応しい華やかさを兼ね備えていた。奇妙なのは、客人たちがよくニコライ風の「熱いスープ」や「切れ味のよいナイフ」について語っていたことである。

私が成人する頃には、こうした饗宴はもうとっくの昔に行われていなかったが、いくつかの出来事は覚えており、その中の一つは特に私の脳裏に焼き付いている。

ニコライを訪ねてきたある学識者が、豪勢な午餐に招待された。列席者の中にはエンゲルと監督教区長ツェルナーがいた。エンゲルは当時劇場監督を務めていて、その素晴らしい語りの才能で名声を博していた。しかし、素晴らしい語り手によく見られるように、いったん話を中断されるとなかなか次の言葉が見付からなかった。ツェルナーも同様に語るのがうまかったが、当時とりわけ

聖職者にはつきものだった悪い癖で、あいまいな話をするのが好きだった。その日、エンゲルは最初まじめに意見を述べていたが、まもなく話の腰を折られて黙り込んでしまった。それに対してツェルナーは、お馴染みの浮世話を事細かに語り、楽しんでいた。次の日、この学識者が暇乞いにニコライを訪れ、エンゲルとツェルナーのことをどう思うかと聞かれたとき、「とても気に入りました。ただ、私はツェルナーが劇場監督で、エンゲルが監督教区長だと思っていました。」と答えた。

エリーザ・フォン・デア・レッケ夫人とニコライは、終始変わらぬ友情で結ばれていた。詐欺師カリオストロとの関係を大胆に暴露した彼女を、啓蒙に夢中になっている知識人たちは一致して支持し賞賛したが、その先頭に立っていたのがニコライである。

フォン・デア・レッケ夫人は、友人ニコライの精力的な活動とその広範囲に及ぶ学識を非常に尊敬していたが、その分、彼が展開した文芸論争には賛成できなかった。温和と寛大さを絵に描いたような彼女には、哲学に関する、あるいは文学に関する意見が異なるからといってなぜこうも激しく論争しなければならないのか理解できなかった。一度ならずニコライの喧嘩好きを諷めたものの、無駄だった。

1801年にフィヒテが『ニコライの生涯』<sup>97)</sup>を出版した。ニコライに対する非常に激しい攻撃を内容とする本で、当時約16軒あったベルリンの本屋はみな、尊敬すべき同業者への侮辱を自分自身に向けられた侮辱とみなし、この本を販売するつもりはないと口をそろえて宣言した。これを聞いたニコライは、この本を販売する、しかも、すべての人に必要な部数お譲りするつもりであると公表したのである。

この機会に、フォン・デア・レッケ夫人は文芸論争の件でニコライをかなりきつく非難した。「しばしば人身攻撃の泥沼に陥ってしまうこのような諍いが、学問にとってなんの役に立つのでしょうか。フィヒテは、新刊書の中であなたのことを犬呼ばわりしている<sup>98)</sup>のですよ。どうしてこんなことを言われなければならないのです。」ニコライは話を遮って、「おっしゃる通り、私はよく吠える

犬です。ドイツの文芸界でなにか支障が生じたときには、いつも吠えたとて警告するのが私の役目なのです。」と応じた。これほどの信念を持っている男に、さらに言うべき言葉はなかった。

フィヒテとの一件がきっかけでニコライは、1799年の科学アカデミーにおける講演会ですでに、しばらくの間彼を悩ませた幻覚に関する奇妙な報告<sup>99)</sup>を行っていた。そして、この報告が原因で、ゲーテがニコライを肛門幻視者としてブロックスベルクに登場させることになったのである<sup>100)</sup>。このエピソードについても、事件の補足や、印刷された報告とは食い違うさまざまな話がニコライ家に伝わっている。

ニコライが息子カールにひどく腹を立ててかなりの興奮状態にあったとき、自ら命を絶った息子ザームエールが突然書き物机の後方、ニコライの目の前に現れた。少なからず驚いたニコライは、横に立っていた妻に、今は亡き息子が見えるかどうかたずねた。妻はさらに驚いて、何も見えないと答えた。そして、ニコライがじっと見つめるとその幽霊は消えてしまった。これでこの件は一件着落かと思ったニコライだが、幻影は繰り返し現れた。亡くなった人ばかりか、生きている人の幻影まで彼の部屋を訪れた。ニコライにはその理由が分からなかった。ある時は、書き物机から振り返ると、部屋の隅にあるソファーにザームエールが座っていた。ニコライが二歩近付いた。ザームエールはまだ座っている。さらに二歩。まだ座っている。そして、すぐ近くまで寄ってザームエールの方からだをかがめた途端、幽霊は消えてしまった。

想像を絶する多忙さのため、当初ニコライは医者に相談する時間がなかったが、そのうちにこの招かれざる客にも慣れてきた。生きている人が入ってくる時には本人なのかそれとも幻影なのか迷ったが、幻影の場合はドアを開ける際、歩く際にまったく音がしないのでそれと分かった。

しまいには幻影と話をするようになった。幻視が幻聴を伴ったわけである。弱った精神の持ち主にとっては、科学アカデミーの講演会が、故人と実際に交わした会話をあの世からのメッセージとして発表する絶好のチャンスだった。もしニコライが医者への助けを借りて当を得た血吸蛭の処置で幽霊を駆逐しな

かったら、過度に敏感になった神経の病的な興奮状態がどのような方向に悪化していたか、誰にも予測がつかない。

幻影はやがて話すのをやめ、だんだんと精彩を欠き、白い幽霊となり、腹のあたりで半分に分かれ、上の部分だけが浮遊するようになり、最後には消えてしまった。この感覚器官の変調は結局約二ヶ月続いた。

私たちは毎晩、上の階に住む祖父ニコライのところで夕食を食べた。日曜日には昼食も一緒に食べた。ニコライは時折小さな引き出しからニュルンベルクの魔法の本を取り出してきて、素早くページを繰り、最初は擲弾兵、それから軽騎兵、それから槍騎兵などを見せてくれた。そして、最後に「消えてなくなれ！」と言うと、本のページは真っ白になった。私たちは最初とてもびっくりしたが、ニコライはその秘密を絶対に教えようとはせずいつも同じ手品を繰り返すだけだったので、私たちはしだいに興味をなくした。いくら頑張っても解けない謎と同じである。こうした遊びの場合、子供の好奇心をかきたてるだけでなく、それを満足させてやることも重要なのである。

窓辺の書棚から、コドヴィエツキの銅版画が挿絵についた二つ折り版の本を取り出して読むことを許されたときの喜びは大きかった。この比類ない名匠の作品を、ニコライはかなりの枚数良質のコピーで持っていた。これらが今なお、私のほぼ完全に揃ったコドヴィエツキ銅版画コレクションの中心になっている。とりわけ美しいのが、『ゼバルドゥス・ノートアンカー』<sup>101)</sup>、『ジョン・ブンケル』<sup>102)</sup>、その他ニコライの作品に挿入された銅版画である。何百枚もある小さなカレンダー用銅版画は、世界史や文化史のすべてのシーンだけでなく、シェークスピアからシラーにいたる劇作家や、同時代の小説のほぼすべてをモチーフとして描き出している。まもなく私たちは、銅版画に付けられた説明文を見なくてもですらすら言えるくらい、一枚一枚の作品に精通していった。子供の頃のこの楽しい作業が、文芸に関する私の知識の土台となった。後に、この分野でさらに見識を広めようとしたとき、コドヴィエツキの銅版画から仕入れた知識に新しい情報を付け加えるだけでよかったからである。コドヴィエツキの銅

版画が挿絵になっているというだけで私は多くの本を読んだが、しばしば失望させられた。彼がその挿絵に吹き込んだ生き生きとした生命力を、文章そのものからはなかなか感じ取ることができなかったからである。

私たちは広くて四角いテーブルで夕食をとった。祖父ニコライは目を病んでいたため上座の、緑色の笠がついた電灯の陰に、両親と時折訪れる客人はテーブルの両側に、子供たちは下座に座った。末の娘の病気が長引いていたため、ニコライは私の二番目の母の妹ヘンリエッテ・アイヒマン<sup>103)</sup>を引き取り、家事のきりもりをしてもらっていた。私たちは彼女のことを「イエットヒェンおばさん」と呼び、親切な彼女を愛していた。

食事中ニコライは多弁だった。私たちがほとんど理解できない長たらしい話をいろいろと語った。妹と二人きりのときは静かに座ってできる限り退屈さを凌ごうとしたが、活発なフリッツが加わると必ずくすくす笑ったりおしゃべりが始まり、ついにはニコライから「静かに！ 大人が話をしているときは、子供は黙っていなさい。」と強い調子で注意された。私たちはすぐに言うことを聞いて、大人の話が終わっておしゃべりできるのをただひたすら待ったが、無駄だった。こんな状態が何日も続くと、ひそひそ話やおしゃべりはもう止められず、ニコライがまた威嚇するような調子で同じセリフを繰り返すと、フリッツはべそをかきながら、「ですが、ニコライお祖父さん、あなたはしゃべりっぱなしじゃないですか。」と抗議した。フリッツは、静かにするようさらに厳しく注意を受けた。しかし、後でイエットヒェンおばさんが打ち明けてくれたところによると、このフリッツの指摘はまったく的を射ていて、おばさんも私の両親も思わず笑ってしまったようだ。

食後ニコライは、緑色のソファーに座ってしばらく歓談を続けた。私たちは、食事中よりももっと静かにすることを要求されたので、ニコライが特別な書棚に大事に並べていた児童書をなおさら好んで手に取った。

青少年向けの本では必ず何か事件が起こらなければいけないし、その事件から教訓や訓戒が引き出せなければいけない。それゆえ、私たちがザルツマン<sup>104)</sup>の『入門書』の退屈な文章を読むことはなかったが、祖父ニコライが几帳面に

一枚一枚厚紙に張り付けていたその銅版画は、コドヴィエツキの銅版画同様私たちに尽きぬ楽しみを与えてくれた。一番喜んで読んだのはカンペ<sup>105)</sup>の『旅行記』全12巻で、この本を読んで初めて私は、外国をいろいろ訪れてみたいという気持ちになった。最高の児童書はもちろん『ロビンソン』<sup>106)</sup>だった。私たちは交互に、読み終わるとまた一巻目から順番に読んだものだ。

祖父ニコライの容姿については、とてもはっきりとしたイメージを持っている。とてつもなく大柄で骨太の男で、私の父や他の家族よりも大きかったため、いつも巨人のように思えた。ヴェーバー<sup>107)</sup>に言わせれば、ニコライはひよろひよろと背が高く、異様にまじめで、風刺やお笑いの精神を微塵も持たない男である。チェボー<sup>108)</sup>もニコライを感じのいい男には描いていない。彼によればニコライは、「頑固なわりに不注意な男だった」。年を取ってからはうつむきかげんだった。シャードー<sup>109)</sup>の胸像は実物に生き写しなのだが、首をすくと伸ばしているところだけは似ていない。顔色は薄い灰色で無表情だったので、長くは見つめたくなかった。72歳でリュウマチのため右目を失い、医者からは、残った左目をいたわるためになるべく緑を見るようにしなさいと言われた。そこで部屋を緑色に塗り、ソファーと椅子には緑色のカバーを掛け、夕食のときには緑色のナイトガウンを羽織った。昼食の席ではいつも決まって明るい灰色の上着、短く黒いズボン、黒の靴下、すそのついたベストを身に付けていた。私が知っている限りでは、ニコライは鬘を被らず、灰色の、髪粉を振りかけた髪を額から掻き上げ、髪袋を使わずに後ろでかなり太い辮髪に結っていた。

私は昔、祖父ニコライの書き物机の上に長さ・幅ともに1インチそこそこの小さな本が数冊置いてあるのを見て、とても興味を引かれた。革装の、細い金モールか金糸で縁取りをした、背の上部に鳩目のある本だ。印鑑と一緒に時計の鎖につけて持ち運ぶ携帯暦だと聞いた。ニコライはこの携帯暦を7年戦争のときに製造し、一山当てようと目論んだのである。この商売の収益は6000ターラー以上にも上ったそうだ。本の内容は、王やツィーテン將軍<sup>110)</sup>、ザイドリッツ將軍<sup>111)</sup>、ヴィンターフェルト將軍<sup>112)</sup>などに寄せる詩に、小さな銅版画を添



えたものだった。数千部も売れた。細い金モールは当時、ニュルンベルクでしか製造できなかった。ニコライはこれを大量に注文し、何百エレ<sup>113)</sup> という長さで製本屋に引き渡した。

私がまだ幼少だった頃、当時としては珍しい気球をベルリンで上げることになった<sup>114)</sup>。人々が鑑賞できるように、さしあたり気球は王立図書館<sup>115)</sup>の二分分を吹き抜けにした中央広間に、空気を充填して展示してあった。私は祖父ニコライに連れられてこの気球を見に行った。祖父は淡色のひもを縁飾りにした、幅広のグレーのコートを身にまとい、大きな三角帽を被って、象牙の握りと金色のふさ飾りの付いた長い籐の杖をついていた。道行く人々が私たちのことを目で追っていたのは、この祖父の出で立ち——当時としてはごく普通の服装——のせいではなく、巨人が小人の手を引いて歩く姿が珍しかったからである。気球を見て私は大きな感銘を受けた。エピキュロスの神々の完璧な球形<sup>116)</sup>が思わず心に浮かんだ。板石の上を歩くと足音が遠くまでこだまする、柱をふんだんに使った広間の大きさも、忘れがたく記憶に残っている。

家の庭に接して隣家の高い建物が建っていたが、そのまばゆいばかりに白い壁が、目を病んでいた祖父ニコライにとっては苦痛の種だった。庭にはクルミの若木が一本と菩提樹が数本植わっていたものの、祖父の目の保護にはほとんど役立たなかった。以前ニコライともめごとを起こして裁判沙汰にまでなった隣人は、ニコライが費用を持つという条件で、やっと壁を緑色に塗らせてくれた。庭で大きな足場が徐々に組み立てられ、大胆不敵な大工職人が薄い板の上を足場の上まで登ってゆく様子を、子供たちはびっくり仰天しながら見ていた。いつもは固く閉ざされている庭の戸がこの機会に一日中開放され、小ぎれいに手入れされた花壇の一部が左官たちに踏みつぶされてしまった。左官たちは汚い服を着ていたので、私たちは最初近付くのをためらっていたが、庭で遊んでいるうちにしだいに彼らとも知り合いになった——あの頃すでにフリッツがうちにいたら、もっとはやく知り合いになっていたはずだ。

祖父ニコライが晩に語ってくれた話は概して分かりづらかったが、それでも二、三の話は記憶に残っている。ある時ニコライは石のスープの話をととても詳しく語ってくれた。しかも、かなり真面目に。それはこんな話だった。旅人が二人、不親切な宿屋の亭主とおかみから、食べる物を何も与えてもらえなかった。旅人は言った。「何も食う物が無いんだったら、石でも煮てたべるか。」——「えっ、どうやって柔らかく煮るおつもりで？」——「なあに、十分煮込んで薬味がよければなんとかなるもんよ。」——旅人たちは小川の小石を12個、きれいに洗って火にかけた。しばらくして一人が言った。「まだ出来上がんないなあ。パンを一切れ、きざんで入れればいいんだが。」——パンを一切れ、きざんで入れた。——「塩をうんと入れりゃ、はやく煮えるのに…、バターを一かけ入れりゃ、柔らかくなるんだが…、パセリは置いてないのかい？小麦粉一握りでもなんとかなるよ。」しまいには卵を二、三個割って入れた。この栄養満点のスープをもりもりとたいらげたあと、旅人たちは石を食べずに残した。——「石はお召し上がりにならないんで？」——「もう固くなっちゃった。もし食べたけりゃ、もう一度温め直しな。」

レッシングにまつわる次の小話は、ニコライの口から直接聞いたのかそれとも両親から聞いたのか覚えていない。いずれにせよ、私たち子供にとってはとても面白い話で、その中で初めてレッシングという名前を耳にした。

あちこち旅行をしていたレッシングはある日、夜が明け白む頃、シェッペンシュテットにやって来た。町に近付くと、彼は御者にたずねた。「ねえ君、どうだろう。シェッペンシュテットの愚行<sup>117)</sup>にお目にかかることができるだろうか？」——御者は答えた。「ご心配には及びません！」馬車は門を通過してシェッペンシュテットの郊外に入るが、通りにはまだ人影はなく、ドアも窓の錠戸も閉まったまま。さらに市門を抜けて町中をゆっくりと走るが、どこもかしこもしーんと静まり返っている。レッシングは質問を繰り返し、御者は自信に満ちた口ぶりで同じ答えを返す。そうこうするうちに彼らは町を走り抜け、郊外の最後の家々のそばを通りかかる。とそのとき、窓の錠戸が開いて、肌着を着た市民が一人窓から出てきて、外から玄関の戸を開けた。「あれがお目当てのもの

でさ。」と叫ぶと、御者は馬にだくを踏ませた。

祖父ニコライから聞いたのか、それともだれか他の人から聞いたのかやはり定かではないのだが、レッシングは旅先でこう言うのが癖だったようだ。「さよならはゴットシュート<sup>118)</sup>が考え出したもの。いつだってまた会えるさ！」

祖父が夕食に招待した客人の中で、ツェルターは並はずれた人物だった。左官の親方だった彼は、こつこつとこの仕事にいそむ一方で非常に優れた音楽的才能にも恵まれ、彼が曲を付けた歌は世間で評判だった。ファシュが亡くなった(1800年)後、合唱協会の長として大成功を収めた。巨人のような体つき、巨大な手、ステントール<sup>119)</sup>のような大声の持ち主で、最初は子供たちを怖がらせたが、声量を抑えることも心得ていてとても分かりやすく印象深い言葉で語ってくれたので、私たちは彼の話聞くのが好きだった。

ハノーヴァー出身で、教育家の甥に当たる若い医者コールラウシュ<sup>120)</sup>がニコライを頼ってきて、しばしば簡素な夕食の席に招かれた。ツェルターよりも体が大きかったが、身のこなしは上品で優雅。流暢に何か国語も話すことができた。イタリアに数年間暮らしていた際に見事な骨董品を手に入れ、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと知り合い、このフンボルトがベルリンへ呼んだのである。彼は間もなくおばのイエットヒェンに心惹かれるようになり、1815年に彼女と結婚し、枢密医学参事官としてアルテンシュタイン省<sup>121)</sup>に勤務するようになった。後に私は、彼の芸術品コレクションをながめては至福のひとつを過ごした。

ニコライは、以前は家族とともに二階全体を使って暮らしていたが、末娘ロットヒェンと二人きりになってからは中庭側の部屋に引きこもったため、ブリュダー通りに面した二階の部屋はすべて空いてしまった。彼の大きな書斎は南側で小さな庭に面していた。窓辺の書き物机の上には高い書棚があり、ニコライの文学活動の記念碑的作品、「ドイツ百科叢書」全268巻が並んでいた。両脇の壁にはガラス戸の付いた白い本棚が設えてあった。窓の向かい側の壁には隣の図書室に通じるドアがあり、その脇に小さな、テーブルに似た形のピアノが置いてあった。ニコライはときおりこのピアノで賛美歌を弾いていた。こ

の壁のそれ以外の部分には、かなり上の方まで、ラーベナー<sup>122)</sup>からアレクサンダー・フォン・フンボルト<sup>123)</sup>にいたる当時の有名人の肖像画が額縁に入れて所狭しと飾ってあった。レッシングとシラーの影絵の原画や、フリッシュ<sup>124)</sup>、コードヴィエツキ、グラフ<sup>125)</sup>のデッサンがどれほどの価値を持っているのか私たち子供には分かるはずもなく、ただ外見で判断してこの顔は気に入ったとか気に入らないとか論評を加えていた。例えば、スタル夫人<sup>126)</sup>の顔は、遠くから見ると男の顔に見えたので嫌いだった。

本棚の上には大きめの銅版画が、ソファーの上にはフォン・デア・レッケ夫人の等身大の半身像やその他の肖像画が飾られていた。

ニコライの書斎に入るときはいつも気後れしたものだが、ある日、彼が本棚の戸を開けて中に入り、姿を消してしまったときにはとてもびっくりした。幅の狭い本棚の中に、がっしりとした体格の大男がどうやって収まってしまったのか。少ししてから祖父はまた入って行った。思い切って本棚の戸を開けてみて分かったのだが、この戸は、床から天井まで壁全体が本で埋め尽くされた小部屋に続く隠し戸になっていたのだ。図書室を通して寝室に行くのは遠回りになるため、祖父はこの近道を思いついたのだった。

後に、父がこの部屋に住むようになってからは、図書室へ通じるドアは閉ざされ、小部屋を通るより快適な通路が利用されるようになった。何人ものお客が隠し戸を通して入って来ては、帰る際に振り向いて本棚の前で立ち往生し、出口を見付けられないでいる様子をしばしば目撃して、私たちはひそかに楽しんでいた。

### 1806年の戦争、ベルリンのナポレオン一世、ハルトゥング学校

私たちの楽しい市民生活は、1806年の戦争で妨げられた。いや、ほとんど根絶されてしまった。この戦争はプロイセンに、近年他の国が経験することのなかったような苦難の7年間をもたらした。あらゆる生活環境の崩壊、ただ途方に暮れるばかりの当局、戦勝国フランスの厚かましく思い上がった行為に対する不安と苦悩。これらをともに体験した者でなければ、1813年から1815年に

かけての解放戦争におけるドイツ国民の高揚について理解するのは難しい。

「これからフランスとの戦争だ！」大人たちが不安気にこう言っているのを聞いて、子供たちも怖じ気付いてしまった。何か今までに経験したことのない災いが目前に迫っているような感じだった。現国家体制は完全に揺らいでしまっているとの認識が、無意識のうちに人々の間にあまねく広まっていて、勝利に対する明るい期待感はまったくなかった。耳にするのはただ、「状況はもっとひどくなるだろう!」、「敵が迫ってくるぞ!」、「これから先どんな運命が待っているのか、ちっとも見当がつかない!」などといった言葉ばかりだった。

それまで、ベルリンでプロイセン軍の気配を感じたことはほとんどなかった。軍人たちは兵営で平穩に暮らしていたのである。ところが今や、閑静なブリュダー通りでも、幅広の三角帽を被りひどく長い辮髪を結った、武装した軍人の一団を目にするようになった。彼らは仏頂面をしてペトリ教会の集合場所へ歩いて行き、整然と隊列を組んだ。子供や無為の輩たちが、普段見慣れないこの光景を遠目に眺めていた。人混みの中で私の横に立っていた女の人が言った。「かわいそうに。二度と戻って来られない人が何人もいるのよ!」

よからぬ前触れ——もちろん、これは実際に事実となった場合にだけ記憶に残るものだが——にも事欠かなかった。ある連隊が軍樂を演奏しながら兵器庫<sup>127)</sup>のそばを通りかかったとき、中央の切妻の上から戦争の女神ベローナ<sup>128)</sup>の頭部が舗道に落ち、大きな音をたてて割れた。

プロイセンの将軍、ブラウンシュヴァイク公<sup>129)</sup>とフォン・メレンドルフ元帥<sup>130)</sup>は、7年戦争の功績から評判がよかった。しかし、フベルトゥスブルクの和約からすでに43年が過ぎていた。ブラウンシュヴァイク公は何か言葉を書こうとする際にはいちいち思い出さなければ書けないし、フォン・メレンドルフ元帥は椅子を使わなければ馬に乗れず、乗っても反対側から落馬してしまうことがあるなどと、人々の間では噂されていた。

イエーナ近郊での敗戦が伝えられたのは開戦後すぐのことで、ほどなくして皇帝ナポレオン<sup>131)</sup>がベルリンにやって来た。その日、1806年10月27日は私の誕生日だったので、今でもその様子をありありと思い出す。私は父の手を握

りしめて皇帝宮殿<sup>132)</sup>の前に立っていた。野次馬たちも、ごく少数だが集まっていた。徒歩の、あるいは馬に乗った連隊がいくつも、次から次へと途切れることなく行進して行った。それからしばらく間隔を置いて、白馬にまたがった小さな男が、華やかな軍服を着た騎兵隊を従えて、さかんにあちらこちら見回しながらゆっくり城の方へ馬を進めて行った。父が言った。「あれが、皇帝ナポレオンだ。」長いことナポレオンを見送ったあと、回り道をして家へ帰った。今シュロス橋<sup>133)</sup>があるところには当時フンデ橋という橋が架かっていたが、このお粗末な木製の跳ね橋が通行止めになっており、王宮前広場はフランス軍の軍人たちでごった返していたからである。

戦争必需品の大量納入や法外な軍税については、あちこちで苦情を訴える声が上がっていた。状況は、戦前もっとも臆病な人たちが恐れていたよりもさらに悪かった。フランスの軍人たちは市民の家庭に宿営することになり、ブリュダー通りで一番の豪邸だったわが家では、たいてい連隊長や將軍たちを引き受けなくてはならなかった。ニコライは、通りに面した部屋をすべて異国の軍人に開放しなければならず、しばらくの間わが家には22人の軍人と12頭の馬が宿を取っていた。中庭には6頭の馬を収容できる厩があった。当時、田舎から訪問客があったときには、お客用の部屋だけでなく厩と十分な飼料も提供できることが、よく設備の整った家の条件の一つだったのである。しかし、その時はこれではまったく間に合わず、何頭もの馬が中庭で野ざらしになった。二階の部屋を結ぶ回廊がいい雨除けにはなったが、一階の住居の、中庭に面した窓を開けると、大きな馬の頭が覗き込んでくることもまれではなかった。私たちは、小ざれいな馬の世話をして鞍を置くときに軍人たちが発するフランス語の決まり文句やかかけ声を、びっくりしながらも興味津々と聞いていた。そしてまもなく、馬櫛でこするところから始まって、からだを洗い櫛で梳くまでの手順を覚えてしまった。フリッツは軍人のまねをして、いろいろなパターンで舌を鳴らしたり口笛を吹くのがとても上手だった。

食事が気に入らないと軍人たちは突き返してきた。十分意に適わないからといって、將軍が昼食を窓から中庭に投げ捨てたこともあった。この行為は、品

格があり、こうした扱いを受けることに慣れていない家主ニコライにとっては腹に据えかねるものだった。フランス語に精通していたニコライは、將軍のもとに出向いて行って、彼の取った行動について抗議した。將軍は最初、不躰な振る舞いをしたわりにはフランス風の上品さを失わずに話をしていたが、ニコライの激しい気性に触れてしだいに興奮し、きわめて下品な口喧嘩が始まってしまった。戸口でこれを聞いていた使用人たちは心配で気が気ではなかった。もし軍人がさらに行軍を続けるために家を出て行かなかつたら、もっとひどいざこざが起こっていたかも知れない。

將軍はたいてい、副官だけでなく、お付きの者全員を連れてわが家に宿を取った。コックに台所を開けてやらなければならないので、うちのコックは台所の片隅で料理を作っていた。フランス人従者とうちの使用人が意志疎通できるように、ニコライは、フランス語ができる使用人を一人雇い入れた。ジャンという名前のフランス人居住区出身の若者で、ニコライのためにこの難しい役目を意欲的にこなしていた。

町に過度のフランス兵が宿営したため、あらゆる品物、とりわけ食料品の値段がとてつもなく跳ね上がった。パン屋と肉屋が、小麦粉や肉はすべて軍人用に供給してしまつて何もないと言えば、田舎の人々も、自分たちの村にだって敵軍をまかなうだけの十分な物資はないと苦情を訴えた。わが家では、將軍の食卓に日々肉を供することがとても重要であったため、まもなく、牛をまるまる一匹買ってきて自家用に屠殺し、少なくとも数日間の蓄えを確保するのが一番の得策だと分かった。

私たち子供はフランス兵による重圧をほとんど感じなかったが、祖国の不幸を痛感させられるような出来事はいくつか耳にした。国家財政が逼迫していたので、役人たちの給料はかなりの期間未払いになっており、知り合いで途方に暮れている役人もいた。色褪せた制服を着た国王の使用人が、食い扶持を稼ぐために、ブリューダー通りを行ったり来たりして水を運ぶ姿が見られた。

ベルリン市内にはプロイセン軍の軍人は一人もいなかったため、市民の安全をはかるために国民軍が組織された。ある日、いとこのヴァーレンティーン<sup>134)</sup>

がカラフルな軍服を着て、サーベルを腰に付け、三角帽を被って部屋に入って来た。この思いも寄らない出来事に私たちは喜んだ。日曜日のパレードで、太鼓の音が響き渡るなか、ヴァーレンティーンが王宮前広場を行進してゆく姿を眺めるのも楽しみだった。しかしこの国民軍は、フランス人支配による苦境の中で組織されたものだったので、まったく支持を得ることができなかった。お国のために市民が武装するという考え方は受け入れられなかったのだ。国民軍の軍人たちは実にいい加減に任務を遂行していた。最初は意欲的に参加していたヴァーレンティーンも、しまいには、ある人のとりなしで軍を脱退できるのをとても喜んでいて。

ナポレオンは王宮に陣取っていたが、そこへまもなくドゥノン<sup>135)</sup>という名前の特別委員がやって来て、プロイセン王が集めた絵画コレクションの中から優れたものを選びすぐりフランスへ持ち帰る算段をしているとの噂が立った。さらに、絵画と同じように、それまで王侯たちの私有財産と考えられていた素晴らしい彫刻や古典古代の貨幣まで、パリに移送されることになった。ポツダムでは、軍営教会に葬られていたフリードリヒ二世<sup>136)</sup>の棺から、王の剣が持ち去られた。

フランス軍が侵略した国々で行ったこのような卑劣な略奪行為は、ベルリン市民の大きな怒りを買った。さらに人々が憤慨したのは、ナポレオンの命令でブランデンブルク門から勝利の女神ヴィクトーリアが取り外され、パリのどこかに陳列されることになったときだ。ベルリン市民は怒りを抑えながら女神の取り外し作業を見守っていた。4頭の馬の1頭が撤去されたとき、ちょうどその場に居合わせた祖父アイヒマンは、ある露天商の女が立ち去る際に「ほら、皮はぎ職人がまた馬を持っていく！」と吐き捨てるように言うのを聞いた。

ベルリン滞在中にナポレオンは、王宮前広場でしばしば皇帝軍の査閲を行った。自分自身は広場の片隅、王宮前薬局のあるところに立って、各部隊を個々に行進させたり、あるいは整列した部隊の中を歩いて検閲した。広場の、見物人が集まりそうな西側特権区域<sup>137)</sup>と北側遊歩庭園は、近衛騎兵たちによって封鎖されていた。父はよく私をそこへ連れて行っただが、いつも見物の場所を確保



するには困らなかった。人出がそれほど多くなかったのである。

ナポレオンは約4週間後にベルリンを出て、さらに東へ軍を進めて行った。しかし、優秀な軍隊を持ち、こんなにも多くのプロイセンの要塞を陥落させたナポレオンでも、いつものようにこの行軍を1年以内に終わらせることはできなかった。1806年から1807年の冬、プロイセンとロシアはしぶとく抵抗を続けた。雪と雨でぬかるんだ底なし状態の道を行軍して行ったナポレオンは、「私はこの地で五つ目の元素、泥土があることを知った。」とジョークを飛ばしたという。ベルリンでは、かなり長い間フランス軍についての消息がなかったため、人々は再び希望を持ち始め、「ナポレオン軍は敗れた」との大胆な噂まで口の端に上った。アイラウの合戦でロシア軍とプロイセン軍が勝利を取めた、という知らせが秘密裏に伝えられたときはなおさらだった。しかし、悲しいかな、戦況はまったく逆であることがじきに分かった。「ナポレオンは、プロイセンの中心部を突破しようと何度も試みたが無駄で、晩になると疲れ果てて軍隊を引き上げた。夜営に戻るとお付きの将軍に問うた。『もし敵が追ってきたらどうする?』将軍は落ち着き払って答えた。『閣下、ご安心ください。敵は追って来ませんから。』」人々はこんな強がり言っていたものの、その後の作戦では勝利の女神はフランス軍に微笑んだ。王国の北東の外れまで追いやられ、領土の10分の9が敵の手中に落ちてからやっと、プロイセン王は講和を結ぶ決心をした。その際には、プロイセン王の個人的な友人、ロシア皇帝アレクサンドル<sup>138)</sup>が仲介の労を取った。こうして、1807年7月8日、ニエメン川に浮かぶ筏船の上でティルジット講和条約が結ばれた。この条約によってプロイセンは約500万人の住人を確保した。

戦争が始まる前から、思い上がった将校たちを除いて誰一人勝利を確信するものがいなかったとはいえ、敗戦のショックがベルリン中を覆い、とりわけ市民の落胆は大きかった。人々は、王や大臣、将軍、軍組織、手際の悪い外交代表部、役人の頼りなさなどを非難し始めた。もっともな非難もあれば、根拠のない非難もあった。大人の話や耳をそばだてて聞いていた私たち子供は、話のごく一部しか理解できなかったものの、プロイセンが完膚無きまでに打ちのめ

され、法外な軍税を課せられ、言いようのないほど不幸な状況に置かれていることだけははっきりと感じ取っていた。

祖父ニコライはひどく落ち込んで、夕食の時も口数が少なく、内にこもってしまった。生まれつき楽天家の父も落胆の色を隠すことができなかった。祖父アイヒマンは、みな目を明るい未来に向けさせようと骨折したが、あまり効果はなかった。彼のよどみない断固とした調子の演説を私は注意深く聞いていたが、まもなく、政治的な話を長いことしていると人はみな自説に固執してしまうものだという事に気付いた。

フランス人による武力支配の年月がこうしてゆっくりと過ぎていった。この圧制は、一瞬一瞬を楽しむ陽気な子供心をすっかり押え付けることはなかったが、家や、市民や、国の情勢を顧みるたびに重苦しい重圧となつてのしかかってきた。

1808年の大規模な進歩的な改革に対しては、たいいていの人に関心を示さず、多くの人が不信感を抱き、反感を抱く人さえいた。祖父アイヒマンは、新たに取られた措置が卓越したものであることは認めていたが、彼のものの見方はフリードリヒ二世の絶対主義的統治方法を理想とするものだった。彼に言わせれば、「紙の上では何だって見栄えがするものだ。理屈通りに実際事が運ぶかどうかあやしいものだ。」

フランスとの戦争が始まる少し前に、私はハルトゥング学校に入学した。この学校は昔から評判がよかったが、それなりの理由があつてのことである。ここで私は、文明の近代化に伴って青少年教育からは切っても切り離すことができなくなった苦しみと痛みのすべてを体験することになった。愚鈍で虚弱な子供には、この苦しみと痛みは倍に感じられたことだろう。理解が速く品行のよかつた私は、どんどん先へ勉強を進めていった。

教員の中では、威厳に満ちかつ親切な校長アウグスト・ハルトゥング教授<sup>139)</sup>が傑出しており、思春期の子供たちからひとときわ気高い人物として敬われていた。私たちは教授を、あらゆる人間的学識の体現者であるばかりか、最高の道徳的完全性をも兼ね備えた理想的人物とみなしていた。彼の張りのあるバスは、

今でも私の心の琴線に触れる。彼はその声をじつに穏やかに調整することができる一方で、必要に応じて雷鳴のように轟かすこともできた。

ハルトゥング教授の次に思い浮かぶのはパウリ牧師<sup>140)</sup>である。私は彼に心から感謝しなければならない。というのも、その素晴らしい授業によって私の勉学意欲を奮い起こしてくれたからである。すらりとした、ほとんど痩せ細ったといってもいい姿、青白いあばた顔、いつも黒でござっぱりとした服装の牧師は、身を以て規律と礼儀作法の手本を示してくれた。冴えわたった声の持ち主で、彼の講義を聴くのは私たちの楽しみの一つだった。きわめて厳格な規律を、本当に情愛のこもった心で貫徹する人だった。彼の授業中は、不真面目な生徒、不注意な生徒はいなかった。かといって、彼が声を荒げたり叱ったりした記憶はない。彼の前ではみな自然と品行方正に振る舞った。牧師はウィンクと視線だけで私たち生徒を指導し、優れた連隊によく見られるように、生徒はみな喜んで彼の言うことを聞いた。彼の教授法は模範的で、つねに子供の身になって教えながらも、子供たちがさらに先へ勉強を続けて行きたくなるような動機付けも忘れなかった。無味乾燥な幾何学の初歩を、簡単な例を挙げて現実の問題に適用することで生き生きとした授業にしてくれた。図形の面積の計算は、田畑や草原などを例に取って説明してくれた。二本の平行線の定理については、平行線を無限に延長して考えることが私たちには難しかったため、「この二本の無限に長い直線は、いったいどこまで延長することができるのですか？」といった素朴な質問もよく出た。牧師は、無限の時間と無限の空間を巧みに比較し、同時に、もっとずっと高度な考え方にも触れることで、学問のさらなる奥深さを垣間見させてくれた。きれいに分かりやすい文字で書かれた彼の八つ折り版の本が、今でも目に浮かんでくる。地理と歴史の入門書で、子供たちに書き写すよう見せてくれた本である。私は、パウリ牧師という理想に少しでも近づきたいと思い、努力を重ねた。

後に広く世間一般で有名になった学友のうち、何人かをここで紹介したい。役者としてベルリンの観客の寵児となったゲルン<sup>141)</sup>。彼は、私が入学してま

もなく学校を退学した。お別れの時、ほろりとさせる詩を表情豊かに、心を取りこにするような声で朗読したので、ほとんどクラスの生徒全員が泣いてしまった。彼についてはこんな話が伝わっている。卓越したバス歌手であった彼の父親は、息子が芝居の道に進むのを認めなかった。彼は父親に、せめて初舞台の役だけは演じさせて欲しいと頼み、そのかわり、もしカーテンコールが起こらなかつたら芝居を諦めると約束した。果たして彼はカーテンコールされ、劇場の花形喜劇役者となった。父親が活着ている間は「小ゲルン」、亡くなってからはただの「ゲルン」、最後は「老ゲルン」と呼ばれていつまでも観客の人気者だった。偉大な道化役者の常として、最晩年は強度の憂鬱症に悩み、1869年に亡くなった。

ゲルンよりも少し前に、ルートヴィヒ・デフリーント<sup>142)</sup>もハルトゥング学校に通っていた。その頃すでに優れた身振り・物まねの才能を發揮して、教員の間には彼にまつわる話がいづつか伝わっている。8歳のとき、公開試験でリヒトヴァー<sup>143)</sup>の『動物も人間もぐっすり眠っていた』を朗読することになった。家で暗唱の練習をしているうちにコミカルな演技力に磨きがかかり、聞いていた姉のロッテは笑いが止まらないほどだった。彼はこの詩を大まじめに、適度に抑揚をつけて暗唱したつもりだったので、姉の反応には涙を流すほど気分を害された。彼は、「ロッテがぼくのことをあざ笑う限り詩の朗読はできない。」と言い切った。いい気分で試験に臨んだ彼だったが、姉が客席の一番前に陣取っているのを見ると顔つきが曇ってしまった。最初こそすべて順調に運んでいたが、「しっぽの生えたお客たち」の箇所です突然泣きながら叫んだ。「ロッテ、もうまた笑ってるね！」彼はしゃくりあげながら引っ込んでしまい、最後まで暗唱することができなかった。

フランス人支配の苦境にあっても、祖父ニコライは何度かピルモントへ湯治旅行に出かけた。ピルモントには合計17回旅をしたことになる。以前は娘のロットヒェンがお供をしたが、彼女が病気になってからは、おばのイエットヒェンがその代わりに務めた。準備として、まず緑色の布を張った旅行用馬車

を中庭の回廊の下に用意し、念入りに手入れをした。私たちはすかさず革ひもで吊った広い運転席にもぐり込んだ。フリッツはまもなく、運転席を揺らして素敵な遊びができることに気付いた。この遊びは、フリードリヒが回廊の窓から「今に革ひもが切れるぞ!」と恐い声で叫ぶまで続いた。

祖父の部屋には梱包する荷物が何日も散らかっていて、フリードリヒがいつものように綿密に衣類の整理をした。子供たちには平たい緑色の小箱がとても魅力的で、その中には日常のこまごまとしたものが詰められていた。ハンマー、やっこ、釘、長靴のホック、剃刀、ライター、芯切り、栓抜き、コップなどである。

出発前に祖父は、長いメモ用紙に、家の人たちに知っておいて欲しい旅程をすべて書き出した。出発日だけでなく、昼食を取る宿駅や晩の宿泊先などを一つ一つ事細かにメモし、何時間も郵便馬車を待たなくてすむように荷物には荷札を付けた。砂地の辺境伯領と草が生い茂るヴェストファーレンでは、一日に5~6マイル以上進むのは至難の業で、砂埃に悩まされたり馬車が転覆するなどの災難に遭わずにそれ以上先に進むことができたなら、それは幸運というものだった。祖父は起こりうるあらゆる障害のことをあらかじめ考慮していたので、旅はたいてい最初の計算よりも若干速く進行し、これがある時私たちをがっかりさせることになった。

祖父ニコライがピルモントからベルリン到着の日付と時間を知らせてくると、両親は、祖父を迎えに最寄りの宿駅まで子供たちを連れて行くことに決めた。家の庭で十分運動ができたため、めったに市門の外へ出ることのなかった私たちにとって、この遠出はとても魅力的だった。2マイルの道のりにはいったい何が待ち受けているのだろうか？ どんな新しい、見知らぬ土地にお目にかかれるのだろうか？ 私たちは出発の時を今か今かと待ち焦がれ、その日が来ると、肉やパンやワインの蓄えをたっぷり積み込んだ馬車に幸せいっばいの気持ちで乗り込んだ。しかし、喜びはつかの間だった。ペトリ教会のあたりにさしかかったところで、祖父の重装備した4頭立て馬車に出くわしてしまったのだ。イエットヒェンおばさんが窓から私たちに優しく会釈をし、年老いたフリード

リヒが御者台から不機嫌そうに私たちを見下ろした。ここで私たちの遠出は終わり、引き返すことになった。祖父たち一行は、たまたま最後の宿駅間道の状態がよかったため、予定より数時間早く着いてしまったのだ。

夢に終わったこの旅行の埋め合わせとして、その後間もなく、シェーンアイヒェと一緒に連れて行ってもらった。ベルリンから東へ3マイルほどの村である。

この村にはダップ牧師<sup>144</sup>が住んでいた。ニコライは彼の神学関係の著書を何冊か出版したことがあった。二人は親友で、牧師はしばしばベルリンを訪問したし、ニコライも、夏の数週間を閑静な牧師館で過ごすのが習慣だった。

この陸路の旅は、どこまでも無限に広がる平坦な地平線と果てしなく長い道を経験できた点では子供たちの期待を裏切ることにはなかったが、景色を楽しむことはまったくできなかった。そもそも景色と言えるようなものがなかったからである。幅広の石段と、天井が高く住み心地のいい部屋を設えたシェーンアイヒェの明るい牧師館は、実に立派なものだった。後で聞いた話だが、フリードリヒ二世は、すべての田舎牧師に新しく豪華な牧師館を建ててやることで、自らは好きでなかった牧師たちの俗物化を防ごうと目論んでいたそうだが、この計画はまずシェーンアイヒェの牧師館からスタートしたが、儉約家の王にとって費用があまりにも嵩んだため、結局この牧師館だけで頓挫してしまったそうである。

農民の家は、豪華な牧師館とは対照的に極度の貧困を呈していた。私たちはここで初めて天井の低い部屋に足を踏み入れたが、そのかび臭い空気に息が詰まる思いをした。みすばらしいぼろを着た住人の姿からは、彼らが不毛の自然と闘いながらろうじて生きている様子を窺い知ることができた。当時の軍税の負担が状況をさらに悪化させていた。この砂地で暮らす農民たちの姿は、長いこと忘れられなかった。

夕方遅く帰途についた。荒れ果てた砂地を夜、馬車一台で行く旅は、恐ろしさが入り交じった、なんとも言いようのない魅力的な旅だった。

ピルモント旅行の間に父は、祖父ニコライの部屋の模様替えをした。しかし、いろいろと手は尽くしたものの、思うようにはいかなかった。ソファの上と窓の向かい側の壁には、一枚また一枚と集められた肖像画が乱雑に掛けられていた。たいていの絵が八つ折り版の大きさで、金の縁取りがしてある簡素な黒い額縁に収められていた。これらの絵はまた、長い間埃まみれになっていた。

父は、これら肖像画の埃を払ってきちんと整理整頓してあげれば、祖父が喜んでくれるものと思っていた。そこで、祖父がピルモントに湯治に行っている間に肖像画をすべて取り外し、掃除して、新たに左右対称になるように壁に掛け直した。見た目に心地よい、調和のとれた配列になった。私は絵の大きさを測ったり、絵を父に手渡ししたりして一生懸命手伝いをしながら、肖像画に描かれた顔と名前を覚え込んだ。しかし、そんな作業をしながらも、祖父が予定より早く帰宅して部屋の模様替の現場を押さえられるのではないかと、不安で仕方なかった。

一番隅の銅版画を取り外すと、緑色の壁紙に隠し戸が現れた。肖像画が所狭しと掛けてあったので、すっかり覆い隠されて見えなかったのである。父が鍵を取ってきて戸を開けると、中は縦横2メートル、奥行き1.5メートルほどの、厚い壁で囲まれた隠し場所になっていた。書棚の上にはたくさん書類が置いてあった。父の話では、この家の前の住人が7年戦争の間、細長い明かり窓のついたこの場所にお金や貴重品類を隠していたのだらうとのことだった。当時はまだ想像もしていなかったが、1813年にまたこの隠し場所を使うことになったのである。

祖父は予定通り帰宅した。私たちは、部屋の模様替えについて祖父から何かお褒めの言葉をもらえるのではないかと期待していたが、無駄であった。数日後、父はたまたま「お部屋をいじったことにご不満ですか？」と訊いた。祖父の答えはこうだった。「あなたの善意には感謝します。でも、前の配列を崩さないでいただきたいかった。肖像画の中には先立ってしまった旧友がたくさんいます。彼らがいつもの場所に見つからなくて困っています。」

クーアラント公夫人<sup>145)</sup> 宅での集いは、祖父ニコライのもとで過ごす暗くて単調な冬の夕べとは大違いで、とてきらびやかなものだった。もっとも、父が私たちをそうした場に連れて行くことはごくまれだった。つましい市民の子供にはそういった贅を尽くした華やかさは何の役にも立たない、というもっともな主義を貫いていたからである。

ナポレオン軍がベルリンを占領していた頃、フランス人の上級将校たちが公爵を囲む集いに入出入りするようになった。ベルリン総督ユラン將軍<sup>146)</sup> や、その他の重要人物の姿があった。私たちはフランス人に対して燃え立つような憎しみを抱いていたので、金飾りのついた彼らの軍服や軽妙洒脱な上品さに惑わされることはなく、むしろ嫌悪感と憤りを覚えながら彼らの様子を見守っていた。わが子の乏しい才能をあまりにもひけらかしたがる点が、父の小さな欠点だった。社交の場に列席している高位高官が私たち子供にフランス語で話しかけるようしばしばお膳立てをして、私たちがしどろもどろになってどもりながら答え、それに対して「素晴らしい発音です」と贅辞が返ってくると喜んでいて。私たちにとってはまさに地獄の責め苦だった。フリッツは私たち兄妹よりもフランス語が下手だったため、順番がまわってこないこともあり、そんな時はいつもとても満足気だった。公女ドロテア<sup>147)</sup> が私たちと同じようにフランス人を憎んでいて、この招かれざる客たちとは一切かわりを持ちたくないと言っていたのが、私たちにとっては救いだった。しかし、まもなく状況が変わってしまった。

これに続く数年間、フランス軍の勝利はますます輝かしいものとなり、ナポレオンはヨーロッパ統一君主国実現の夢に一步また一步と近付いて行った。ナポレオンはまた、自らの努力目標にしていた「大衆の融合」を、若いフランス軍人と、被占領国の上流家庭出身の娘や裕福な遺産相続人とを結婚させることで実現しようとした。

1809年1月、タルラン公<sup>148)</sup> の甥で若くて粹なフォン・ペリゴール伯爵<sup>149)</sup> が、クーアラント公夫人をレービヒャウの領地に訪れた。非の打ち所のない美しい女性に成長していた公女ドロテアは、このフォン・ペリゴール伯爵に嫁



ぐことになった。ずたずたに蹂躪されたドイツで、外国人のクーアラント公夫人がセーヌ川から昇った太陽の方に心惹かれたからといって、彼女のことを悪く取ることはできないだろう。公女ドロテアの心の中では、敬虔なドイツ魂が葛藤を続けていた。最初はこの異国の求婚者とかかわりたくないと言っていた彼女だが、何度か踊りの相手をして彼のうちとけた好意に触れた後、まもなく母親の薦めに従った。

### レーム城、ペトリ教会の火事

祖父ニコライは、ブリューダー通りの家以外にもレーム小道に、必要な家具調度類が一式揃った別荘を持っていた。このレーム小道は、後にもっと美しい「ブルーメン通り」<sup>150)</sup> という名前に改名された。どちらの名前にもそれなりの謂われがある。一部しか舗装されていないレーム小道は袋小路になっていて、突き当たりに粘土採取場があった<sup>151)</sup>。後にブルーメン通りと改名されたのは、道の両側の簡素な垣根越しに小さなつつましい家々が建っていて、たくさんの園芸農園を持っていたからである。花卉栽培で有名な、家族4~5人で働くブシェ家<sup>152)</sup>が、この辺りを代表する家だった。

三階建てのニコライの家はひときわ立派にそびえ立っていたので、仲間うちでは最初レーム城、その後ブルーメン城と呼ばれていた。上の切妻窓からは隣接するすべての農園がずっと遠くまで見渡せた。西側には町の塔が二、三、東側にはフランクフルト門と市壁の一部が見えた。私たち子供にはこの市壁が果てしなく遠くにあるように思えた。全体ではほぼ5モルゲン<sup>153)</sup>ある農園の南西側には、両側を板垣で仕切られた細長い「緑の道」が通っていた。夏場には砂埃を巻き上げ、冬場には通れないくらいにぬかるむ道である。この道は、私たち子供にとってはとても面白い道だった。まばらに生える雑草以外に緑はまったくなく、東端でこの道と交差するバラ小道からのぞき込む窓以外には、窓が一つもなかったからである。

この辺り一帯ではほとんど作物が栽培されていなかった。シュプレー川左岸の市壁の内側、シュレージエン門からハレ門にかけてはケベニック耕地が開け

ていた。もともとは草の生えない黄色い砂地だったものを、都市農民<sup>154)</sup>が熱心  
に開墾して、徐々に穀物や野菜を収穫できる耕地に変えていった。これとほぼ  
同じ大きさの平地がシュプレー川右岸、シュトラールアウアー門からフランクフ  
ルト門、ランツベルク門にかけて広がっていた。左岸に比べて農園や牧草地  
の数は多いものの、家の数はほとんど同じくらいまばらだった。

私たちの別荘はとても機能的に設計されていた。庭に面した涼しい広間から、  
三つのガラス戸を通して石造りのテラスへ降りることができた。二本の菩提樹  
の古木が陰を落とすこのテラスからは、さらに、楓やアカシアの木に囲まれた  
広い芝生の庭を見下ろすことができた。庭の左側には生け垣で囲まれた空間が  
あり、そこにはベンチと、台座にのった子供の石像を設えたライラックの園亭  
がいくつかあった。庭の右側にはこんもりと生い茂った小さな森があり、私た  
ちの格好の遊び場になっていた。暗い茂みの中にロビンソンの洞穴を作ったり、  
菩提樹やプラタナスの木の上から近所の庭を見渡したりして遊んだものだ。芝  
生の庭の外れには大きなポプラの木が二本立っていて、ちょうどその間に煌々  
と輝く満月が登ることもあった。ポプラの木の脇にある茂みでは、ナイチン  
ゲールやアトリが安心して子育てに励んでいた。

芝生の庭がこのように詩趣に富んだものだったのに対し、さらにその奥にある  
庭は実用的に使われていた。野菜やアスパラの大きな苗床、あらゆる種類の  
果樹、桃とパイナップル<sup>155)</sup>を育てる温室、日当たりのいいブドウ棚でいっぱい  
だった。午後のおやつはたいていプチパン一個で、それを持ってイチゴやスグ  
リ、セイヨウスグリの植わっている所へ行った。つまり、好きなだけ摘み取っ  
て食べてよかったのである。最初は思う存分、もう食べられないという限界ま  
で食べていたが、何度かそれで痛い目にあってからは、腹八分目に控えること  
を知った。後々私が健康だったのは、この頃たっぷり果物を食べたおかげで  
ある。一番上等なイチゴとラズベリーは庭の一番外れになっていた。テラスか  
ら誰かが呼んでもそこまでは声がとどかなかった。私たちがそこに必要以上に  
居座らないように、父は小さな笛を用意して、テラスに続く真ん中のガラス戸  
の脇に掛けておいた。冴えた笛の音が聞こえたら、私たちはすぐに家へ戻らな

ければならなかった。大小さまざまなパーティーの席では、デザートに必ず完熟メロンが出た。一番の楽しみはパイナップルだったが、その薄く切ったスライスが子供たちの席まで回ってくることはほとんどなかった。

別荘に隣接して家畜小屋を設えた広い中庭があった。コールラウシュ医師が訪問してくると、この家畜小屋に馬をつなぐこともあった。ニワトリやカモ、ガチョウたちが、めいめい自分に与えられた場所で走り回っていた。屋根裏には鳩舎が作られ、その脇の、いい匂いのする干し草棚は子供たちの格好の遊び場になっていた。干し草棚の下にある材木置き場では、秋になると庭師が木の枝を乾燥させた。父は夏のうちにそれに手を加えて薪にした。まず枝を細かく切って、わら縄で適当な大きさに束ね、地面の上に寝かせておくのだ。秋になって夕方冷えびえしてくると、庭に面した広間では暖炉に火が点され、お客たちはその周りに集まって暖を取った。

柴の束は大理石の風呂をわかすのにも使った。この風呂は家の北側にあり、子供たちは最低二週間に一度は入浴して汗を流した。貴族の墓石用にと、シュレーゲン産灰色大理石の石板がベルリンに運ばれたことがあった。当時としてはめずらしい贅沢品である。しかし、なかなか買い手が見つかず、石板は長い間売りに出されていた。これをニコライが安値で購入して、別荘にしゃれた大理石の風呂を作らせたのである。

材木置き場では、最初は乾いた木の枝を手渡したり、柴の束を積み上げる作業だけ手伝うことを許された。大きくなると小さな庭仕事用の斧を自分でふるえるようになり、これが楽しくて仕方なかった。木の種類に応じて扱ひ方、利用の仕方が異なった。ブナとニレの木は簡単に割れた。ポプラは火力が弱いのでほとんど利用されなかった。まっすぐに伸びた楓の若枝は絶好の燃料になり、菩提樹からは細くて均等な薪ができた。アカシアには棘があるので注意して扱わなくてはならなかったが、それでもなんとか加工できた。一番難しかったのは、まるでハリネズミのように四方八方を棘で覆われたセイヨウスグリの古木の取り扱ひだった。塊状になった根をつかんで、根元から枝を切り離すしか手はなかった。

私たちは春になると別荘に移り住み、秋になるとまたブリューダー通りの家に戻った。夏と冬の境目に行われるこの二回の移動が、一年の暮らしの中で重要な節目となっていた。

ただ、いつ別荘に移りいつ町中の家に戻るのかは、特に決まっていなかった。1800年にはこんなことがあった。暖かな秋の陽気に誘われてつい別荘に長居してしまった母が、10月2日に妹リリーを出産し、準備をしていなかったにもかかわらずそこで産褥期を過ごさなければならなくなったのだ。後に、快活な妹がみなを心で晴れやかにしてくれるたびに、父は満足気な面持ちで「リリーは庭で生まれた子だ!」と言うのが口癖だった。

別荘に出発するのはとても待ち遠しかったが、出発の準備にはいつも数日を要した。と言うのも、別荘の準備がすっかり整っているにもかかわらず、何事においても入念で几帳面だった二番目の母が、暖房の入っていない部屋に一冬の間ずっと置いてあったベッドに寝るのは体によくないと考え——もちろん、もっともな考えなのだが——、秋にベッドをブリューダー通りの家へ運ばせてあったからである。春になって、まずこのベッドを他の家具と一緒に荷馬車に乗せて送り出した後で、いよいよ私たち自身が大きな馬車に乗り込み、父が「さあ、出発だ!」と馬に鞭をくれた。ブリューダー通りの家に戻ってくる際には、父はいつも、「神よ、今回も無事戻って来られましたが、来年また無事に別荘へ出かけられますようお取り計らいください!」とおまじないをかけていた。

5月から9月まで続く夏は、子供にとっては計り知れない無限の時間に思え、この夏もいつか終わるのだとは想像できないほどだった。なにしろ、あれやこれやの望みが叶うまで何日も待たなければならなかったからである。イチゴが赤く色づくのは別荘に入ってからたいいま一週間後だったし、それからまたかなり長いこと待って、やっと最初のスミノミザクラの実やラズベリーを摘み取ることができるようになった。スグリやセイヨウスグリが色づき柔らかなるまでにはさらに時間が必要で、むしろプラムの方が先に収穫できた。木を揺すったときに落ちてくるプラムは確実に熟していた。アンズとモモは、午後のおやつに自由に摘み取って食べるわけにはいかなかったが、優しい父はよく、

私たちが学校から帰ってくるまでに、その日採れた一番いいものを大きな箱に入れて取って置いてくれた。

こうして別荘での夏は一日また一日と過ぎていった。7月から8月にかけて六週間続く夏休みは、最初のうちはまさに楽園状態で、朝から晩まで外で遊ぶことを許された。しかし、休みも終わり頃になると、宿題に苦しめられる陰鬱な日々が続いた。それ以来私は、この悪習について何人もの親しい学校長たちと議論を重ねた。彼らもたいへん、勉強しなければならない休みなどそもそも休みではないという私の主張を認めていたのだが、私の知る限りでは、旧態依然としたこの悪習はいまだに受け継がれていて、年がら年中苦しめられているかわいそうな生徒たちの唯一の楽しみ、数週間勉強は一切しないで過ごせるはずの夏休みを台無しにしているのである。

秋の晩、風が強くなってくると、父が風琴を天窓に取り付けた。その憂鬱でぼんやりとした音はよく夢の中にも出てきた。この風琴の音が鳴り響く頃になると、夏ももうおしまいだった。

まもなく町中の家へ帰る日が決まった。父は私たちをもう一度奥のラベンダー畑へ連れ出し、香り立つラベンダーを一人一束持ち帰ってよろしいと言った。これが洗濯物にいい香りをつけるのだが、この匂いを嗅ぐと、別荘の大きな庭で過ごした日差し溢れる秋の日のことを今でも思い出す。

出発の日、荷馬車の準備が済む前にもう一度私たちはすべての通路を駆け抜け、すべての花壇や苗床のまわりを駆け回り、大小二つのマロニエの園亭から馬車馬にあげるマロニエの実をできるだけたくさん拾い集め、犬に優しくお別れを言って、もの悲しい秋であるにもかかわらず朗らかな気持ちで用意のできた馬車に乗り込んだ。

子供の頃の思い出話に紙数を割きすぎた感があるが、なんとと言ってもあの頃の思い出が一番素晴らしい。同じような経験をした友人ならこの気持ちを理解してくれるだろう。

祖父ニコライは、晩年はあまり別荘に来なかった。別荘でともに楽しく暮ら

す家族がもはやいなかったからである。以前のレーム城は、ブリューダー通りの家と同じように広範囲に及ぶ友人との社交の場であり、ニコライはここにヴィルデノー<sup>156)</sup>、アレクサンダー・フォン・フンボルト、クラブロート<sup>157)</sup>、ボーデ<sup>158)</sup>、その他の客人たちを招いた。土曜日に出かけて日曜日を別荘で過ごし、月曜日の朝ブリューダー通りへ戻ってくるのが常だった。ニコライの部屋はテラスの脇にあり、壁紙だけでなく家具も緑色で、窓の外に植えられたアカシアの高木が木陰を作っていた。

窓辺には緑色の書き物机が置かれ、必要な家具調度類一式が揃っていた。ニコライは、別荘での息抜きの時間にさえ、何か仕事をしないではいられなかった。ドアの左横にある作り付け戸棚には、植物学や園芸関係の図書が並んでいた。蔵書の中にはヒルシュフェルト<sup>159)</sup>の『造園術』、ディートリヒ<sup>160)</sup>の『植物学事典』、トムソン<sup>161)</sup>の『四季』や、他のイギリス詩人の古典があった。後に私は、蒸し暑い夏の午後を、これらの本に読み耽ることで楽しく過ごしたものだ。ドアの右横の棚にはあらゆる種類の園芸用具、提灯、ピストルの形をしたライターが置いてあった。子供の好奇心をそそるものばかりである。ピストル形のライターは、普段使っていた鋼と火打石のついたブリキ箱の代用品で、非常に工夫を凝らして作られていた。銃床、木製の銃身、ライター石の遊底からできていて、引き金を引くと火薬ではなく、火薬皿に圧縮して盛られている火口(炭化した亜麻布)に火がつく仕掛けだった。ライターの火を点すためにはさらに、ゆっくりと燃える火口から火を移し取る黄色い火付け糸が必要だった。

日曜日の朝、庭を散歩する祖父ニコライのひょろ長い姿を見かけることがあったが、一緒に散歩しようという気にはならなかった。厳格でそっけない祖父に対して、私たちは抑えがたい嫌悪感を抱いていたからである。ライトブルーのフロックコートを着た庭師クトゥリエが、散歩のお供をしながら、すでに出来上がっている、あるいは今造成中の庭の設備について話をしていた。

フランス人居住区出身のクトゥリエは、別荘の庭について語るときには欠かせない存在である。ニコライの子供たちが成長してゆく様子を見届け、彼らの誕生日には必ずドイツ語かフランス語の詩を作ってお祝いしてくれた。彼の手

入れした庭は非の打ち所がなかった。夏にはやはり別荘暮らしをしていたゲッキングが、かつて、ニコライの庭は一平方フィートすら余さずに作付けしたり手入れが行き届いていると言ったほどである。テラスでも窓の外でも、鉢植え台にはきれいな花が置かれ、アスパラ畑からはたっぷりと収穫できた。温室の果物を売って得た収益が、庭全体から上がる収益の中心だった。

クトゥリエは日曜日にときおりフランス教会へ行くことがあった。その際は、ぴかぴか輝く、ほとんどターレル銀貨大のボタンのついたライトブルーの長いフロックコートを着て、とてつもなく大きな三角帽を被り、グレーのズボンと折り返しのついた不格好な長靴をはき、黒い髪袋をつけ、長い籐の杖を持って出かけて行った。この出で立ちが、当時まだすっかり流行遅れになっていたわけではなかったものの、彼のグロテスクな姿はいつも道にたむろする若者たちの注目を集めていた。

彼の娘で庭仕事を手伝うたくましいロツテのことを、私たちはとても美しいと思った。とりわけ、幅広の麦わら帽子を被ってレタス畑の手入れをしたり、大きな果物かごを二つ抱えて市へ出かけてゆく姿が美しかった。しかし声が父親似でしわがれ、とぎれとぎれだったので、私たちは彼女と付き合いたいとは思わなかった。父親がよい教育を受けさせたおかげでフランス語がとても達者だったが、これが裏目に出てしまった。フランス軍の占領下にあった頃、レーム小道の別荘にもかなりの数のフランス兵が宿営し、庭師が彼らの面倒を見るはめになった。彼らは母国語で語り合うことができるのをとても喜んだ。ロツテはフランス人嫌いだったにもかかわらず、じきに彼らの持って生まれた優雅さに参ってしまい、黒ひげ軍楽隊長の特別な庇護のもと、1812年にロシアへ遠征を続ける連隊に従軍商人としてついて行ってしまった。その後彼女は消息を絶った。

娘を失った苦痛に、誠実な父クトゥリエはもちこたえることができなかった。彼は物思いに耽りながら庭を行ったり来たりし、誰とも口をきかず、ブランドーを飲んで苦しみを忘れようとしたが無駄だった。ある朝早く下男が温室にやって来ると、老クトゥリエが日曜日に着るライトブルーのフロックコートを

着て首を吊っていた。この最後の一步を踏み出すのに、彼は晴れ着を着て盛装していたのだ。

当時は今よりもまだずっと交通量が少なかったが、それでも、別荘から学校へ通うのには難儀した。最初の数年は下男のヴィルヘルムが私たちを学校へ連れて行ってくれたが、まもなく自分たちで通うようになった。

レーム小道は墨壁(今のアレクサンダー通り<sup>162)</sup>)に接するあたりだけ舗装されていた。それ以外の部分は、緑の道にぶつかるまでずっと地盤が軟らかかったので、雨が降ると、石から石へうまく飛んだり跳ねたりしながら大喜びしたものだ。シュトラークラウアー通りには、毎週水曜日と土曜日に果物を持ってモルケン広場の市を訪れる、ベルリン近郊の農民たちのための宿場がたくさんあった。多くの家には馬車寄せのスロープが設えられていたため、歩道を歩くときは絶えず上ったり下ったりしなければならなかった。車道の両側には小さな雄牛か馬を繋いだ農家の馬車が止まっていた。こうした小振りの牛や馬は砂地が広がる辺境伯領特有のもので、今ではもうすっかり絶滅し、もっと大型の家畜が使われているようである。小型の馬の場合は、亜麻布で飾り付けした馬を、たいてい四頭横に並べて馬車に繋いでいた。雄牛の体高はとても低かったので、子供が通りすがりにその角をつかんで、牛がゆっくり頭を動かしてその手を払いのけるまで、しばらくの間つかみ続けることができたほどである。

人でごった返すモルケン広場を歩くときは、いうまでもなくフリッツが先頭に立った。フリッツは学校靴をじつに巧みに、あるときは重い果物かごの攻撃から身を守るための盾や胸墻、また、あるときは露天商のおかみさんたちの人垣を突破するための破城槌として使いこなした。

こうしてミューレンダム<sup>163)</sup>に着くと、アーケードで息抜きがてら、当時ベルリンで第一級かつ最も洗練されていると言われていた豪華な商店街を見て目の保養をした。とりわけ魅力的だったのは絹商「ケーニヒ・アンド・ヘルツォーク」の高級店で、ここにはまた最高級の品物が取り揃えられているに違いないと私たちは信じていた。



ケルンの魚市場のアーケードも人出が多かったが、市場は後にインゼル橋の方へ移動することになった。というのは、魚を入れた桶が通りの中までせり出しており、反対側にはたいい大きな粉袋を積んだ長い荷車が駐車していて、歩道をはさんで荷の上げ下ろしをしていたからである。こうした障害物もやがて取り除かれ、ブリュダー通りまでの全道程——父が何度か測定したところによると、3300歩の距離——をだいたい半時間で歩けるようになった。

ブリュダー通りでは、12時から2時の自由時間になると、うちによく遊びに来た近所の子供たちと中庭や庭、地下室、屋根裏部屋や書店の奥の部屋で遊び回った。小さな庭でミズキのこんもりとした茂みから細い枝を切り取り、中庭に出てチャンバラごっこをしたりした。

夕方5時になると、いい機嫌で学校鞆を持ってブルーメン通りへ帰って行った。この時間になると市の雑踏も過ぎ去り、私たちが朝ほど急いではないので、道すがらいろいろな見どころを見物できた。ミュールendamのかどにはリトファス<sup>164)</sup>印刷所で刷られた色彩木版画を多数扱う露店が出ていた。なかでも興味深かったのは戦争シーンを描いた版画である。その筆致はきわめて単純で、どのページにも歩兵が一列に並んで発砲するシーンが描かれ、しかも遠近感を出すために奥へ行くほど歩兵は小さくなり、脇には馬をギャロップで走らせる騎兵と大砲が二、三描かれていた。背景の中央には、たちこめる硝煙の上に村か町の赤い塔がそびえ立っていた。注として付けられた数字は、下に大文字で書き添えられた説明と対応していた。フリッツはたいいタイトルだけ読んで次へ行こうとしたが、私は、新たに追加されたページの説明書きをすべてチェックし終わるまではその場を動こうとしなかった。

思い出す限りで一番古い作品はアウステルリッツの戦い(1805年12月2日)である。右側の歩兵の前でひときわ目立っているのが緑の軍服を着たナポレオン、左側にはやはり緑の軍服を着たロシア皇帝アレクサンドル、その脇に、白い軍服姿のオーストリア皇帝フランツ<sup>165)</sup>。三人とも馬上の人として描かれていた。この版画に象徴されるように、私たちのところに宿営していたフランス人たちはこの戦いを「三帝会戦」と呼んでいた。

次の年には、同じような筆致でイエーナの戦い(1806年10月14日)を描いた版画を目にした。緑の皇帝ナポレオンに、青の軍服姿のプロイセン王が対峙するシーンが描かれていた。青のルーイ・フェルディナント王子<sup>166)</sup>が、不幸にも緑のフランス人猟兵に馬から突き落とされるシーンを描いたザールフェルトの騎兵戦(1806年10月10日)には、同情を禁じ得なかった。

1807年にはアウアーシュテットとアイラウの戦いを描いたものが出た。ティルジット講和条約(1807年7月8日)の版画には、三人の君主——緑のフランス皇帝とロシア皇帝、青のプロイセン王——がニエメン川に浮かぶ筏船の上で握手している姿が描かれていた。

1808年にはスペイン出兵を描いたものが二、三出た。それほど興味を引く版画ではなかったので、スペイン兵が褐色の軍服を着ていて、町の家々がひときわ赤々と燃え上がっていたことしか記憶にない。

1809年は多産な年で、ウルム、エックミュール、アスペルン、ヴァーグラムの戦いを描いた版画が出た。ヴァーグラムの戦いはいつもより大きな判で、緑のナポレオンを迎え撃つ白のカルル大公<sup>167)</sup>が、じつに堂々とした姿で描かれていた。

1810年と1811年は休戦状態。そして、ナポレオンがロシアに兵を進める運命の1812年が近づいてくる頃には、私たちもだいふ図画にうるさくなくなって、荒削りの木版画ではもう満足できなくなっていた。

美術通たちが今、必死になって30年戦争や7年戦争当時のビラ、パンフレット類を集めている。この状況から考えて、もしリトファスの木版画が一式揃っていたら、これらの時代に劣らず重要なナポレオン戦争当時を証言する同時代の大衆画として、芸術史上大きな関心を引いていることだろう。

うちの庭の西側に隣接して灰色の修道院院長ベラーマン<sup>168)</sup>の庭があり、80～90フィートの高さのロンバルディア産ポプラが植わっていた。1811年秋の大きな彗星——この彗星は、翌1812年のロシアにおけるフランス軍敗退の前兆と解釈された——は、うちの中庭の石段から、日没後、ベラーマン家のポプラのちょうど右側に見えた。このポプラの木はまた、ほぼ垂直方向にたなびいた、

赤々と輝く尾のとてつもない長さを測る尺度にもなった。私は後にたくさんの彗星を見たが、大きさと明るさの点でどれもこの1811年の彗星にははるかに及ばなかった。特に、1835年に再び現れた有名なハレー彗星——これも、私たちは別荘の庭で観察できた——は、全然くらべものにならなかった。1811年の彗星はさらに、すばらしいワインをもたらしてくれた。有名な「11年産彗星ワイン」である。と言っても、彗星が直接このワインを生み出したわけではなかったが、この年の夏はめったにないくらい天候が安定していた。3月から11月にかけて日中は暑く、7、8月はほぼ毎晩雷雨が来て暑気を払い大地を潤した。そのおかげでブドウの実がよく熟したのである。

別荘での静かな生活が惨憺たる事件で妨げられたことが一度ある。1809年9月19日、フリッツの誕生祝いに花を添えようと、広い芝生の庭で庭師が花火を上げた。ところが思ったようにうまく行かず、輪転花火はどうやっても回転せず、軸が重すぎるロケット花火は強い西風を受けて高いポプラの木にひっかかってしまい、光球花火は発光しなかった。それでも私たちは心底楽しんで、満ち足りた気持ちで床に就いた。

まもなく父と母が火災警報で目を覚ました。当時はきわめて不合理な、非常にばかげたやり方で火災警報が発令されていた。まず、火影を見た、あるいは見たと思った夜警が角笛を吹く。これに二人目、三人目の夜警が続き、しまいには町中の夜警が短三度、あるいは増音二度の音程でメランコリックな音を鳴り響かせる。これに驚いた市民が窓辺に走り寄り、「火事はどこだ?」と近くの夜警に聞く。答えは決まって「分からない!」だった。こうして警報は自然に鳴り止むまで続くのだった。翌日になると新聞に、…門の前で、あるいは、シャルロテンブルクで火災が起こったという記事が載った。

ところが、この夜の警報は一向に鳴り止まず、やがて情報収集に出かけていた召使いたちが戻ってきて、ペトリ教会が燃えていると告げた。最初は信じられなかったが、しだいに事実だと分かった。ペトリ教会はブリューダー通りのわが家から数百歩と離れていなかったのも、父は町へ駆けつけて祖父ニコライを助けるのが自らの義務だと考え、出かけて行った。しかし、その間に危険が

別荘の方にまで迫りつつあることを、父は予想だにしていなかった。

ほどなくして、天窓から注意して見ていた庭師が近付いてくる火影に気付き、ペトリ教会とレーム小道のほぼ中間に位置する孤児院の塔<sup>169</sup>も燃えているという知らせが入った。やがて火の勢いはさらに激しさを増し、火の粉が家の上を飛ぶようになった。この時点で、母は上の三人の子供を起し荷造りを始めた。私たちは母に寄り添い、屋根裏部屋の張り出し窓から遠くの火災を眺めてぞっとした。火の手はますます広がってゆくように見えた。興奮しやすいフリッツは不安におののき、白いフランネルのガウンを着た姿はじつに哀れに見えた。妹と私の二人はフリッツよりは平静を保ち、父や祖父、イエットヒェンおばさんのことを心配していた。

西風は嵐となって吹き荒れ、飛んでくる火の粉の量はさらに増えた。まもなく、赤々と燃える炭が屋根に降ってきた。庭師がバケツに水を入れて屋根に上り、火を消し止めた。下男が干し草棚の見張りに立った。彼は別荘の中に住んではいなかったが、昔からの馴染みで駆け付けてくれたのだった。家も家畜小屋も屋根は瓦葺きだったので、少し注意をしていれば火が燃え移ることはなかった。

やっと火の勢いは治まり、炭の雨も上がった。町から帰ってくる人々の話では、二つの塔が倒壊したそうである。私たちに危険が及ぶ心配もなくなり、明け方頃また床に戻り安らかに眠った。

父はというと、ブリューダー通りになかなか思うようにたどり着けなかった。当局がたくさんの軍人を徴発して、燃え上がるペトリ教会の周りを、その後さらに孤児院の周囲をぐるりと遮断してしまったからである。これは必要な措置だったかも知れないが、あまりにも厳密に執り行われたため、近所の住人がお互いに助け合う障害となった。父は何カ所かで軍人のバリケードを突破しようとしたが無駄で、何度も遠回りをし、夜が明ける頃ようやくブリューダー通りに着いた。

父が到着した時には、幸い最大の危機はすでに過ぎ去っていた。もしペトリ教会の塔がブリューダー通りの方へ倒れていたら最悪の事態になっていたかも

知れない。しかし、塔は真夜中頃真下に崩れ落ち、火災はまもなく鎮火するだろうと人々はホッと胸を撫でおろした。

後屋の部屋へ駆けつけた父を、祖父ニコライは敷居のところで晴着姿で出迎えた。彼が身に付けていたのは金ボタン付きの青絹のコート、緞子のベスト、きわめて上質のブリュッセル製襟飾り、絹のズボン、とてもエレガントな留め金付き短靴だった。父はびっくりして後退りしながらたずねた。「どうしてそんなに着飾っていらっしゃるのですか？」ニコライは平然とこう答えた。「何かを見捨てなければならぬのだとしたら、いいものよりも悪いものを見捨てる方がいい。私は自分が持っている一番いい服を着た。下の中庭には馬車の用意ができていて、現金の貯え、書類、重要な帳簿を積み込んである。」

続く数日間、出火原因と火事の経過についてさまざまな情報が飛び交った。辮髪時代の遺物であるペトリ教会の醜い建物は、当時の悪習にしたがって、周囲の壁をぐるりと露店で囲まれていた。夜になると露天商たちは、酒手と引き替えに寺男に頼んで、商売道具一式を教会の中で保管してもらっていた。教会の中は安全だったからである。女の露天商たちは、赤熱する炭を詰めたブリキ製の火鉢を腰掛けの下に入れて暖を取っていた。おそらくは、まだ火が完全に消えきらない火鉢を教会の木製の階段の下にしまい込んで、それが出火原因となったのだろう。

教会の屋根裏部屋は倉庫として賃貸しており、ニコライ書店は違ったが、いくつかの書店がそこに商品を置いていた。これらがすべて焼失してしまった。その際に一種の炭化現象が起きたようで、後にヘルクラネウムの書巻<sup>170)</sup>を見た時にそのあり様をまざまざと思い出した。長い印刷全紙は、八つ折り版のページがすべてそのまま無傷で残り、黒い下地の上にさらに黒い文字が難なく読めるような具合に炭化していた。

ペトリ教会の塔がすっかり火に包まれていたとき、その燃える破片が強風に吹かれて孤児院の木製の塔に飛び移り、この塔も灰燼に帰ってしまったのである。二つの塔の間を走るシュトララウアー通りもすっかり焼けてしまったものと思われたが、家が数軒被害を受けただけで済んだ。この火事で亡くなった

人はいなかった。炭の雨も、シュトラールラウアー通りの左を流れるシュプレー川で、水面から顔を出していた杭を二、三本焼いただけにとどまった。

その後長い間、フリッツは祖父アイヒマンにからかわれることになった。アイヒマンは、前夜のロケット花火からこの火事が起こり、すべての不幸の原因は花火にあると言い張ったのだ。これに対してフリッツは熱心に弁解を続けた。

教会を囲む塀は巨大な廃墟として長年放置されていたが、その後売却され取り壊された。そのあとには木が植えられたが、瓦礫を地中深くまで十分に取り除かなかったためうまく根付かなかった。それでも、近くの狭い通りに住む子供たちにとっては、この場所は大きな恵だった。塀の売上金を元手にしてこつこつと利息を貯め、町の誉れである今の教会がシュトラック<sup>171)</sup>により建てられた。

この場所に教会を再建することに対しては、例えばこんな反対の声も上がった。「パリやロンドンのような大都市では、住民の憩いの場を作るのに何百万ものお金を投じているのに、ここベルリンでは、天命によって授かった場所、近所の子供たちがこんなに喜んでしゃぎ回っている場所にすら建物を建てようとしている。」信心深い人々は、教会がすでに二度も——最初は、フリードリヒ・ヴィルヘルム一世<sup>172)</sup>の治世下(1730年)に雷が落ちて出火、焼失し、その後まもなく(1734年)新築の塔が倒壊した——被害に遭っている事態を重視して、「どうやらこの場所は天から見放されているようだ。」と反対した。しかし最終的には、他に場所がないという理由で再建が決定した。

最初の火災については老人たちが話を聞かせてくれたが、彼らの若い頃からの習慣で、フリードリヒ・ヴィルヘルム一世の気性の激しさを物語るような話にまで展開して語ってくれた。それはこんな話だった。教会再建の最中に大工職人が蜂起して賃金アップを要求した。この一件を耳にした王は、ヴスターハウゼンから当局に宛てて自筆の激烈な調子の命令を出した。その中にはこんなくだりがあった。「余がベルリンに帰り着く前に、レーデルを絞首刑に処すべし。」大工職人の中にレーデルという名前の男はいなかったが、王の命令には絶対に従わなければならない。そこで、この一件には何のかかわりもない、駐屯

軍のレーデルという名前の将校が逮捕された。もし、王は「この一件の首謀者は絞首刑に処すべし。」と書くつもりだったことが明らかにならなかったら、おそらくこのレーデルは処刑されていたろう<sup>173)</sup>。この話の結末はこうだった。まったく無実だったかも知れない赤毛の大工が首謀者の烙印を押されて、王がベルリンに帰還したその日、王を満足させるために絞殺された。

フリードリヒ・ヴィルヘルム一世の激しい気性については、さらにいくつかの逸話が語り継がれ、何か事件があるたびに語り直された。王自身きわめて行動力のある人だったので、いかなる怠惰も許すことができず、臣下たちにも常に勤勉さを要求した。ある晩、王が長い籐の杖を持ってブリューダー通りを歩いていると、ガラス屋の親方が戸口でくつろいでいた。「そなたはどうして働かないのだ？」と王が語りかけた。「閣下、ただ今のところすることがないのでございます。」と親方。「ならば、余が仕事をこさえてあげよう。」と言うが早いか、王は籐の杖で一階の手近な窓を何枚も割ってしまった。「さあ仕事できました。明日請求書を送ってよこすように！」

#### ニコライの死、二階への引っ越し

1811年1月6日の日曜日、祖父は夕食の席でいつもと違い言葉少な目だったが、翌日月曜クラブに顔を出すことに決めた。コールラウシュ医師が居合わせていて、会話が途切れるとさかんに話をして間をつないでくれた。食事の後、私たち子供は例によってカンペの『旅行記』に読み耽っていた。ニコライは寝室に行くのに立ち上がろうとしたが、ソファーに倒れ込んでしまった。父とコールラウシュ医師が支えると難なく立ち上がることができ、お休みを言って部屋へ引き上げていった。この時またしてもフリッツが私に先んじて、明かりを持って祖父の前を歩いて行った。

翌朝、いつものようにフリードリヒが8時に祖父を起こすことになっていた。しかし、かなり激しく鼾をかいているのを聞いて、「旦那様は昨晚本調子ではなかったから、もう半時間そっと寝かせて置いてさしあげよう。」と思った。ところが半時間経ってもまだ鼾が止まず、それどころかもっと激しくなっていたの

で、フリードリヒは天蓋付きベットのカーテンを開け、卒中の発作が始まっているのに気付いた。軒だと思っていたのは実は瀕死のうめき声だったのだ。

ただちに医者呼んで手当を施したが、まったく意識のない77歳の老人に効き目がないのは最初から明らかだった。うめき声は月曜日一日中、そして夜の間も続き、1月8日火曜日未明、ニコライは安らかに永眠した。

ベルリンではだれもがニコライの死を嘆き悲しんだ。晩年に親しくつき合っていた友人や学識者の仲間は、彼のことを大いに尊敬していた。ニコライはまれにみる寛大さで、自分の所有する貴重な本を若い文学者たちに閲覧させていた。彼らもまた、ものの考え方はまったく違っていたが、レッシングの竹馬の友ニコライを崇拝していた。文学界でニコライがどれほど重要な人物だったのか、それまで私たち子供は何も知らなかった。私たちの知っているニコライは、無愛想ではないが、まったく魅力のないおじいさんに過ぎなかった。それゆえ、学校でハルトゥング教授が、亡くなられたニコライ氏はベルリンを代表する学識者の一人でしたと教えてくれたときにはとてもびっくりした。いやそれどころか、なんでこのことをもっと早く知らなかったのか、内心ひどく不機嫌になった。私はその頃すでに学問の世界に大いなる尊敬の念を抱いていたのである。

葬式はとても気まずい、後味の悪いものになってしまった。今でもそうだが、近所のごろつきたちがみな葬式に集まってきた。有名なニコライが埋葬されるというので、普段よりもたくさんの人々が殺到して来た。下層階級の人々の窮状は、当時、戦争のせいで今よりももっとひどかったに違いない。玄関を出て、じっと見つめるプロレタリアの人々の間を通過して葬儀車に向かうとき、私は戦慄を覚えた。目の落ちくぼんだ青白い顔の人たちが襲いかかって来て、私たちは略奪されるか殺されるに違いないと思ったからである。葬儀が執り行われたルーゼ教会はもっとひどい状態だった。二階席にいたるまですべての場所が、物騒な下層民たちでびっしり埋め尽くされていた。彼らはがたがた音を立ててベンチに上ったり、場所柄をわきまえず振る舞っていた。こんな状況下では謹んで祈りを捧げることなど不可能で、この粗野な群衆が何か暴力沙汰を起こす



のではないかという心配で私の胸はいっぱいだった。突き刺すような視線で見つめる人々の間を、今度もまた無事に通り抜けて帰宅し子供部屋から静かな庭を見下ろしたとき、私は心から神に感謝したものだ。

ナポレオン戦争前は海外貿易組合<sup>174)</sup>発行の債権証券の他にプロイセンには有価証券がなく、ニコライは貯金をすべて同じような仕方でも投資したくはなかったので、いくつかの家々にあるいは多額の、あるいは少額の資本金を投下していた。抵当権は必ずしも保障されていなかったが、家の所有者はニコライの個人的な顔見知りで誠実かつ勤勉な男だったので、戦争前の平和な頃には貸付金の利子を苦もなくきちんと払ってくれた。

ところが、1806年の戦争で家々はその価値の大部分を失ってしまい、大陸封鎖の影響で商売は滞り、フランス軍から課せられる法外な軍税のおかげで手持ちの現金は底を突いてしまった。こうなってはもう期限厳守の利息払いなど不可能で、細々とした財産は整理され、家々は競売にかけられた。少しでも手元に残すために、最後の抵当権者はほとんど価値のなくなった家を競り落とさなければならなかった。

ニコライが亡くなったとき遺言執行者として全権を委任された父は、相続財産として残された少なくとも9軒の家を管理するはめになった。この厄介な仕事を父は持ち前の誠実さで引き受け、必要がある場合には家の改修を行い、経済状況が改善された後にたいした損失もなくほぼすべての家を売却した。

フランス軍に占領されていた頃、莫大な負担金を工面するために市当局は、財産の多寡に応じて市民をいくつかの階層に分けていた。最も裕福な市民階層からは、最悪の事態になったとき自らを顧みず難局に当たる「償還保証市民」が数人指名され、ニコライもその一人だった。こうしてニコライは、賠償してもらえる見通しも立たぬ状況下で、財産の大部分を失ってしまったのである。1809年にオーストリアが再びフランス軍に征服されたのを見て、ナポレオンによる支配が長期に及ぶことを疑う者など当時はいなかった。1810年、ベルリンは再び軍税の分割払い金を支払わなければならない、償還保証市民たちもこれを分担することになった。この時、何らかの手違いでニコライには請求が回って

こなかった。これを知ったニコライは父を市役所に送り、海外貿易会社債権証券で持っていた最後の2万ターラーを市当局に譲渡した。

翌年の冬、私たちはブリューダー通りの家の二階に移り住んだ。これまで祖父ニコライがひっそりと暮らしていた住まいは、陽気な子供たちによってまた活気付いた。ニコライの大きな部屋は父が使った。部屋にあるたくさんの棚や箱の中を遠慮なく引っかき回してよいとの許可が出たため、この部屋は以前よりもずっと居心地のよいものとなった。まもなく、ソファの脇の小さな机の引き出しから、ニュルンベルクの魔法の本が見つかった。大喜びで引き出しから取り出したものの、そのからくりが分かってしまうと興味がなくなってしまった。

母はブリューダー通りに面した素敵な部屋をもらった。この部屋は、広大な家の中で父の部屋のちょうど対角線上、一番遠いところに位置していた。家事をこなして行く上で不都合はあったが、何ともしようがなかった。子供たちはこの部屋の配置を大いに楽しんだ。父の部屋から、まず隠し戸を通して本がびっしり並ぶ小部屋に入り、天井の高い図書室を駆け抜け、歩くと軋む廊下の上を走って、入り口からまた中へ入って食堂を通り、やっと青で内装を整えた母の部屋にたどり着いた。台所と寝室を通して行く方がもっと近いのだが、その場合ドアを八つ通り抜けなければならなかった。上述の経路の場合は六つのドアで済んだ。

他の部屋も以前のように嚴重に鍵を掛けて閉め切ることがなくなったので、グレーの広間にうまくもぐり込んで、スイスの風景画を眺めては満ち足りた気分になったものだ。飾り文字で書かれたフランス語の署名を、私は間もなく暗記してしまった。

フリッツと私はあてがわれた祖父の寝室で楽しく過ごした。私は、銀の飾り金具が付いた、大きくて素敵なクルミ材の戸棚をもらった。仕切りや引き出しがたくさんついていたので、生活に必要な物はすべて戸棚の中に収まった。この戸棚を見ては今でも祖父ニコライのことを思い出し、感謝の気持ちを日々新たにしている。

それまで私たちが暮らしていた、中庭と庭園に面した一階の住まいには、二番目の母の父親、枢密顧問官アイヒマン夫妻が住むことになった。すでに以前から私たち家族の一員になっていた母の妹イエットヒェンおばさんは、ニコライの生前に譲り受けた二階の部屋でそのまま暮らし、食事だけ下の両親と共にした。お互いに思いやりの気持ちを持つことで、この三世帯の共同生活はとても楽しいものとなった。この頃のことを思うと今でも心が温かくなってくる。

祖父ニコライの遺した多くのものが次第に用済みになり、片付けられていったが、その中で、ナイトテーブルの上の石盤が私たちの注意を引いた。私たちは父に頼んでそれを譲ってもらった。頑丈な茶色の枠にはめ込まれていて、左右の枠には表から裏へいくつか穴が開けられ、左右の穴を結んでひもが掛けられていた。まるで罫線入りノートのようなようだった。夜中に何かアイデアが浮かぶと——祖父の頭は常に回転していたので、よくそういうことがあったようだ——、暗闇の中でニコライはすぐさまそれを石筆で、ひもに沿って書き付けていたのだ。

フリッツが図書室の片隅で風変わりな鉄製の器具を見つけたが、その使い方がまったく分からなかった。約6インチの長さの箱で、一方の側に鉄の六芒星、他方の側に小さな文字盤と針が付いていた。とびらを開けて中を覗いてみると、鉄の歯車や毬果がいくつかあった。この重い箱を父のところまで運んでいったが、父にも皆目見当がつかなかった。書店の支配人リッター氏<sup>175)</sup>によれば、その箱は、ドイツ大旅行の際にニコライが使っていた路程計だった。馬車の車体にねじで取り付けられていた。後輪が一回転するたびに、リムから突き出ているピンが六芒星に噛み合い、星を一芒分回転させる。そして、これに連動している針が、馬車の進んだ距離を指し示す仕組みになっていた。後にニコライの『旅行記』の中に、この路程計の正確な挿絵と使用説明を見つけた<sup>176)</sup>。

ニコライのような個人が路程計を発明して、自分が訪問する町までの正確な距離を測定し、それが重要な功績として感謝を受ける。1781年当時、駅通業や旅客業はまだそんな状態にあったのだ。

ニコライの大きな部屋で私たちは前よりもずっと自由に振る舞い、椅子をひっくり返して画架代わりに使うことを許されたので、そこに二つ折り本を立てかけてコドヴィエツキの銅版画をじっくりと鑑賞し、味わうことができた。一卷また一卷と検討して行くうちに、マイルとローデの銅版画を挿絵に使った本を何冊か見付けた。マイルの版画は繊細に仕上がっていたが、題材が面白くなかった。例えば、エンゲルの『演技術』に挿入された版画は味気なく、これと言った特徴のないものだった。これにくらべてコドヴィエツキは、人の心のさまざまな動きを、生氣溢れる人物の姿を通して実にうまく表現することができた。マイルはニコライと個人的に親しく、『ある太った男の物語』<sup>177)</sup>の挿絵を担当したが、コドヴィエツキが『ゼバルドゥス・ノートアンカー』につけた挿絵とくらべると足もとにも及ばなかった。

#### 註

原典には、若干の事項、外国語、さらに人名についての註がついている。翻訳する際には、当然これらの註を踏まえて訳語を決めているため、事項や外国語については原註をあえて訳し出す必要がない場合、訳し出すことが不可能な場合もある。また人名に関しては、原註の説明で十分な場合、不十分な場合、あるいは、今回の翻訳の趣旨に照らして不必要な情報(例えば、墓地の場所など)が盛り込まれている場合もある。したがって、原註は必要に応じて取捨選択し、あるいは手を加えて、訳者自身がつけた註とまとめて一本化することにした。その代わりに、原註をそのまま訳している場合も含めて、何らかの形で原註を参考に行っている箇所では、註の中に「(原註参照)」と断り書きを入れることにした。

本文中に登場する人物の名前、生年・死亡年等についてはさらに、原註以外に下記文献の人名索引も参照した。複数の異説がある場合にはそれをむりにまとめず併記することにし、記述が異なる箇所には下線を引いて注意を喚起するようにした。場合によってはさらに他の文献も参考にしたが、その場合にはその旨該当する註に明記した。また、現在ではすでに忘れ去られてしまっている人物、当時としてもそれほど重要でなかった人物については、どうしても調べがつかないこともあった。

- Albrecht, Wolfgang (Hrsg.): Gotthold Ephraim Lessing: Briefe, die neueste Literatur betreffend. Mit einer Dokumentation zur Entstehungs- und Wirkungsgeschichte. Leipzig: Verlag Philipp Reclam jun. 1987.
- Becker, Peter Jörg u.a. (Hrsg.): Friedrich Nicolai. Leben und Werk. Ausstellung zum 250. Geburtstag, 7. Dezember 1983 bis 4. Februar 1984. Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung 1983.
- Ebert, Marlies/Hecker, Uwe: Das Nicolaihaus. Brüderstraße 13 in Berlin. Ein Beitrag zur Kulturgeschichte der Stadt Berlin. (「解題、および翻訳の目的」でも触れたが、これは出版前の原稿である。)
- Lepsius, Bernhard (Hrsg.): Lili Parthey. Tagebücher aus der Berliner Biedermeierzeit.

Berlin-Leipzig: Gebrüder Paetel 1926. (この文献に関しては、人名索引だけでなくレブジウスによる序論も参考にした。)

- Radczun, Evelyn (Hrsg.): Christian Friedrich Daniel Schubart: Deutsche Chronik. Eine Auswahl aus den Jahren 1774–1777 und 1787–1791. Leipzig: Verlag Philipp Reclam jun. 1988.
- Weber, Peter (Hrsg.): Friedrich Gedike und Johann Erich Biester (Hrsg.): Berlinische Monatsschrift (1783–1796). Auswahl. Leipzig: Verlag Philipp Reclam jun. 1985.

人名、地名等のカタカナ表記に関しては、原則として Duden in 10 Bänden. Bd. 6: Das Aussprachewörterbuch. 2., völlig neu bearbeitete und erweiterte Aufl. Bearbeitet von Max Mangold in Zusammenarbeit mit der Dudenredaktion. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag 1974. に従ったが、例えば「ベルリン」(前記 Duden では「ベルリン」)のように、特に日本語として定着していると思えるものについてはそちらを優先した。どうしても読み方を特定できないものについては、とりあえずこうではないかと思われるカタカナ読みを付けて置いた。

プロイセン官僚機構の職名、役職名等については、定訳のあるものはそれに従ったが、それ以外はとりあえず訳者の考えた日本語を当てて置いた。

- 1) パルタイ、グスタフ・フリードリヒ・コンスタンティン (Parthey, Gustav Friedrich Konstantin: 1798–1872)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの娘ヴィルヘルミーネ・ニコライとフリードリヒ・ダーニエール・パルタイの長男。リリー・パルタイの兄。父親フリードリヒ・ダーニエールが亡くなった後ニコライ書店を引き継ぐことになるが、信頼の置ける経営者の手助けにより研究・収集活動に専念することができた。古典古代研究、考古学が専門で、イタリアやエジプト、レバント(地中海東部沿岸地方)にたびたび長期の研究調査旅行をし、研究成果は出版されている。1824年にカールスバート出身のヴィルヘルミーネ・ミッテルバッハー (Wilhelmine Mittelbacher) と結婚。1857年には科学アカデミーの会員となったが、1872年4月2日、研究調査旅行の途上ローマで亡くなり、その地に埋葬された。(Vgl. Koebel, Gabriele: Nachwort zu: Gustav Parthey: Das Haus in der Brüderstraße. Aus dem Leben einer berühmten Berliner Familie. Hrsg. von Gabriele Koebel. Berlin: Verlag Das Neue Berlin. 2. Aufl. S. 413–420.) なお、ヴィルヘルミーネに関しては、『リリーの日記』巻末のニコライ・パルタイ・レブジウス家系図には「ヴィルヘルミーネ・ミッターバッハー (Wilhelmine Mitterbacher: 1799–1876)」(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 431.)、エーベルト/ヘッカーには「ヴィルヘルミーネ・ミッターバッハー (Wilhelmine Mitterbacher: ?–?)」(Vgl. Ebert/Hecker: a.a.O.) とある。
- 2) ニコライ、クリストフ・フリードリヒ (Nicolai, Christoph Friedrich: 1733–1811)。(原註参照)
- 3) 戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人——フリードリヒ・ニコライ』朝文社、2001年。ニコライの生涯、啓蒙主義出版業者としての活動、当時の作家、学識者、プロイセン官僚たちとの交友関係、当時のベルリンにおける啓蒙主義の状況等について詳述しているばかりか、主要著書についてはその概要や発表当時の反響にいたるまで紹介している。巻末には資料として、ニコライのライフワークとも言える「ドイツ百科叢書」の(全巻についてではなく、戸叶氏の勤務先の図書館が所蔵している巻に限定しての)具体的な構成、この雑誌で書評の対象となった書物の分野別内訳、『王都ベルリンとポツダム、およびこの両都市に見られるあらゆる注目すべき人・物・事、さらにその周辺地域についての記述』第三版 („Beschreibung der Königlichen Residenzstädte Berlin und Potsdam, aller daselbst befindlicher Merkwürdigkeiten, und der umliegenden

Gegend. Dritte völlig umgearbeitete Auflage“)と『1781年のドイツ、スイス見聞録』(„Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahre 1781“)の概要が紹介されている。ニコライに関するこれだけまとまった研究書は、日本では他に類を見ない。

- 4) 『詩と真実』(„Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit“)第13巻でゲーテは、『若きヴェルターへの悩み』にまつわるニコライとの一件について触れている。(Vgl. Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Bd. 9: Autobiographische Schriften I. Textkritisch durchgesehen von Lieselotte Blumenthal. Kommentiert von E. Trunz. München: Verlag C. H. Beck <sup>11</sup>1989, S. 590ff.) その591ページで言及されている風刺詩『ヴェルターへの墓の上にはしゃがむニコライ』(„Nicolai auf Werthers Grabe“, 1775)の具体的な内容については、Goethes Werke. Weimarer Ausgabe. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. Weimar: Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger 1887-1919. Abt. 1: Goethes Werke. Bd. 5, Abt. 1. Weimar 1893 (Fotomechanischer Nachdruck der Weimarer Ausgabe. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1987. Bd. 5), S. 159. を参照。さらに、592ページで引用されている詩は、ワイマール版には『ニコライに寄せる『若きヴェルターへの悩み』(„„Die Leiden des jungen Werther“ an Nicolai“, 1775)という標題で収録されている。(Vgl. ebd., S. 160.)『クセーニエン』(„Xenien“)誌上でシラーと共同で行ったニコライ攻撃については、例えば Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 1: Gedichte und Epen I. Textkritisch durchgesehen und kommentiert von E. Trunz. München: Verlag C. H. Beck <sup>14</sup>1989, S. 215f. und Anm. dazu (S. 635.) を参照。『ファウスト』(„Faust“)第1部「ヴァルブルグスの夜」の場面でのニコライ風刺については、Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 3: Dramatische Dichtungen I. Textkritisch durchgesehen und kommentiert von E. Trunz. München: Verlag C. H. Beck <sup>14</sup>1989, S. 130f. und Anm. dazu (S. 571f.) を参照。
- 5) ライヒ＝ラニツキは、ゲルヴィーヌス (Gervinus) やハイネ、エーリヒ・シュミット (Erich Schmidt) やパウル・リラ (Paul Rilla) の例を挙げながら、「ドイツ文学史においてニコライが身代わりとなって罰を受け続けた」様子を概観している。(Vgl. Reich-Ranicki, Marcel: Friedrich Nicolai. Der Gründer unseres literarischen Lebens. In: Die Anwälte der Literatur. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt 1994, S. 32-52. Hier S. 35.) 例えば、日本語訳が出ているマルティエーニの文学史では四箇所ニコライに触れているが、記述そのものが少ない上に、やはり、「啓蒙主義者フリードリヒ・ニコライ (Friedrich Nicolai 1733-1811) は優れた批評活動の後に啓蒙小説《M. ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生活と意見》(Das Leben und die Meinungen des Herrn M. Sebalduß Nothanker 1773) を書き、晩年古典主義、ロマン派の人々、そしてカントに反対する論争によって失笑を買った」、「ニコライは《若きヴェルターへの喜び》(1775) というパロディーを書く不見識を犯しさえした」といったような否定的評価が目立つ。(フリッツ・マルティエーニ(高木実、尾崎盛景、梶田光行、山田広明訳)『ドイツ文学史 原初から現代まで』三修社、1979年、179、215ページ参照)
- 6) 一番最初に出版されたのは第3巻 Nicolai, Friedrich: Sämtliche Werke · Briefe · Dokumente. Kritische Ausgabe mit Kommentar. Hrsg. von P. M. Mitchell · Hans-Gert Roloff · Erhard Weidl. Bd.3: Literaturkritische Schriften I. Bearbeitet von P. M. Mitchell. Berlin · Bern · Frankfurt/M. · New York · Paris · Wien: Peter Lang 1991. だが、ペーター・ラング社のパンフレットによれば、この全集出版の計画自体はすでに1981年(つまり、20年ほど前)に公表されている。なお、この全集出版の企画とほぼ同時期の1985年から始まったオームス社によるリプリント版ニコライ全集 (Nico-

lai, Friedrich: Gesammelte Werke. Hrsg. von Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann. Hildesheim・Zürich・New York: Georg Olms Verlag 1985ff.) の出版、および、1989年12月2日付け「フランクフルター・アルゲマイネ新聞」(„Frankfurter Allgemeine Zeitung“) 誌上に掲載されたマルセル・ライヒ＝ラニツキのエッセイ(その短縮版が、上の註に挙げた Reich-Ranicki, Marcel: Friedrich Nicolai. Der Gründer unseres literarischen Lebens. In: Die Anwälte der Literatur. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt 1994, S. 32-52. である)なども、ドイツにおける一連のニコライ見直し作業の一環と見なすことができるだろう。

7) すでに編集・出版されている書簡もいくつかある。出版年の古い順に列挙すると次の通りである。

- Werner, Richard Maria (Hrsg.): Aus dem Josephinischen Wien. Geblers und Nicolais Briefwechsel während der Jahre 1771-1786. Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz 1888.
- Pfeilschifter, Georg: Friedrich Nicolais Briefwechsel mit St. Blasien. Ein Beitrag zu seiner Beurteilung des Katholizismus auf Grund seiner süddeutschen Reise von 1781. München: Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften in Kommission bei der C. H. Beck'schen Verlagsbuchhandlung 1935.
- Ischreyt, Heinz (Hrsg.): Johann Jacob Ferber: Briefe an Friedrich Nicolai aus Mitau und St. Petersburg. Eingeleitet von Albrecht Timm. Herford und Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung 1974.
- Fabian, Bernhard und Spieckermann, Marie-Luise (Hrsg.): Friedrich Nicolai. Verlegerbriefe. Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung 1988.
- Ischreyt, Heinz (Hrsg.): Die beiden Nicolai. Briefwechsel zwischen Ludwig Heinrich Nicolay in St. Petersburg und Friedrich Nicolai in Berlin (1776-1811). Ergänzt um weitere Briefe von und an Karl Wilhelm Ramler, Johann Georg Schlosser, Friedrich Leopold Graf zu Stolberg, Johann Heinrich Voß und Johann Baptist von Alxinger. Lüneburg: Verlag Nordostdeutsches Kulturwerk 1989.
- Maurach, Bernd u.a. (Hrsg.): Der Briefwechsel zwischen Friedrich Nicolai und Carl August Böttiger. Bern・Berlin・Frankfurt/M.・NewYork・Paris・Wien: Peter Lang 1996.
- Jacob-Friesen, Holger: Profile der Aufklärung. Friedrich Nicolai-Isaak Iselin. Briefwechsel (1767-1782). Edition, Analyse, Kommentar. Bern・Stuttgart・Wien: Verlag Paul Haupt 1997.

ヴァイドル氏によれば、ポツダム広場の近くにある国立図書館には、ニコライ宛の書簡が18572通、ニコライからの書簡が381通保管されている。仮にこれを合わせて20000通と概算し、1通あたりの印刷ページを1ページと考えても、註釈や索引を含めないで1巻500ページの書簡集が全部で40巻になる。この中ですでに編集・出版済みの書簡は4~5パーセント程度とのことである。(Vgl. Weidl, Erhard: Vorüberlegungen zur editorischen Erschließung der Nicolaischen Korrespondenz. Ein Werkstattbericht. In: Jahrbuch für Internationale Germanistik. Hrsg. von Hans-Gert Roloff, u.a. Jahrgang XXI-Heft 1. Bern・Frankfurt/M.・New York・Paris: Peter Lang 1989, S. 154-178. Hier S. 161-162.)

8) 上の註に挙げた Jacob-Friesen, Holger: Profile der Aufklärung. Friedrich Nicolai-Isaak Iselin. Briefwechsel (1767-1782). Edition, Analyse, Kommentar. Bern・Stuttgart・Wien: Verlag Paul Haupt 1997. の他に、Antoine, Annette: Literarische Unternehmungen der Spätaufklärung. Der Verleger Friedrich Nicolai, die *Straußfedern* und ihre Autoren.

2 Bde. Würzburg: Königshausen & Neumann 2001. と Habersaat, Sigrid: Verteidigung der Aufklärung. Friedrich Nicolai in religiösen und politischen Debatten. 2 Bde. Würzburg: Königshausen & Neumann 2001. の二点が、ヴァイデル氏の指導を受けた研究者によって発表された業績である。特に Antoine と Habersaat の業績は二巻本になっていて、いずれもそのうちの一卷が書簡集、他の一卷がその書簡集を分析し、資料として用いた研究論文という体裁を取っている。また、イギリス文学をドイツに紹介し、初めてシェークスピアの全作品をドイツ語に訳したことで知られるエシェンブルク (Eschenburg, Johann Joachim: 1743–1820) との間で交わされた書簡が、近い将来ヴァイデル氏自身によって刊行されるようである。

- 9) ゲッキング、レーオポルト・フリードリヒ・ギュンター・フォン (Göcking, Leopold Friedrich Günther von: 1748–1828)。詩人で、「ゲッティンゲン森の詩社」(Göttinger Hainbund) と親しかった。ベルリン枢密財務顧問長官。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 425. 参照)
- 10) ゲッキングによれば、月曜クラブは 1749 年に、スイスの牧師でギリシャ文学の翻訳家としても知られるシュルテス/シュルタイス (Schultheiß/„Allgemeine Deutsche Biographie“によれば Schultheiß, Johann Georg: ?–1804) によってベルリンで設立された。会員数は 24 人に限定されていたが、会員が友人等を会合に連れてくることは可能で、その際には人数制限はなかった。会員の補充は投票によって行われ、反対投票が二票あると会員にはなれなかった。毎週月曜日の夕方 6 時から 7 時の間に飲食店に集まり、8 時に食事をして、10 時には散会となった。このクラブでは、チェス以外の遊技は禁止されていた。率直な意見交換が行われていたわりには、会員同士の間には仲違いや誤解はまったく生じなかったようである。ゲッキングは、特に著名な会員で 1820 年当時すでに亡くなっていた人物の名前を、会員として採用された年代の古い順に列挙している。ここでは、後の翻訳の中にも出てくる人物を中心に抜粋して書き出しておく。ズルツァー (Sulzer, Johann Georg: 1720–1779)、ラムラー、アグリコーラ (Agricola, Johann Friedrich: 1720–1774)、レッシング、ニコライ、マイル、アプト (Abbt, Thomas: 1738–1766)、テーデン、エンゲル、ピースター、ヴェルナー、テラー、クライン、ゲーディケ、クラブロートなどである。ニコライが月曜クラブに入会したのは 1756 年だった。会員になって 49 年目の 1805 年 3 月 18 日、ニコライの 72 歳の誕生日がちょうど月曜日に当たり、クラブの会員たちがお祝いをした。ゲッキングは、その席上でピースターが述べた祝辞を紹介している。ピースターの祝辞によれば、月曜クラブの設立者・長老シュルテス/シュルタイスがスイスで暮らすようになって以降、ラムラーがベルリンでその職務を代行していたが、1798 年にラムラーが亡くなってからは、ニコライが長老代行の職務を引き受けた。そして、1804 年 5 月 7 日にシュルテス/シュルタイスが亡くなると、ニコライは正式にクラブの長老に就任した。1805 年 3 月 18 日は、長老就任後最初の誕生日でもあった。ピースターはさらに、この誕生日が月曜日に重なったことに象徴されるニコライとクラブとの因縁めいた関係、ニコライの人物、クラブに対する貢献についても言及している。(Vgl. Göcking, Leopold Friedrich Günther von: Friedrich Nicolai's Leben und literarischer Nachlaß. Berlin: Nicolaische Buchhandlung 1820, S. 73–84.)

なお、エンゲルによれば、ニコライが月曜クラブに入会できたのは、当時のドイツ文芸の状況を鋭く批判した『ドイツにおける文芸の現状に関する書簡』(„Briefe über den itzigen Zustand der schönen Wissenschaften in Deutschland“) が高く評価されたためである。(Vgl. Engel, Eva J.: Vivida vis animi. Der Nicolai der frühen Jahre (1753–1759). In: Friedrich Nicolai 1733–1811. Essays zum 250. Geburtstag. Hrsg. von Bernhard Fabian. Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung 1983. S. 9–57. Hier S. 29.)



- 11) 水曜会の本来の名称は「啓蒙友の会」(Gesellschaft von Freunden der Aufklärung)で、1783年に設立された。会員数は当初12名だったが、後に24名まで増やされた。毎回会員の一人が自分の論文を朗読し、それに対して他の会員たちが口頭、あるいは文書でそれぞれの見解を述べ合った。論題に上がったテーマとしては、国家行政、財務行政、立法、思弁哲学、実践哲学などが中心で、文学について論じられることはごくまれだった。会場場所は、論文を朗読する会員宅。主な会員は、シュトゥルーエンゼー (Struensee, Karl August von: 1735-1804)、ディーテリヒ (Diterich, Johann Samuel: 1721-1797)、テラー、ツェルナー、ゲーディケ、メーゼン、スアレス、ゼレ、ニコライ、ビースター、ドーム、クライン、名誉会員メンデルスゾーン。会員のだれもがフリードリヒ大王の崇拜者で、プロイセン、あるいは啓蒙主義のメッカであるベルリンに誇りを持っており、フリードリヒ大王死後も啓蒙専制主義を理想とし、これがやがては啓蒙されたリベラルな法治国家に発展して行くものと信じていた。水曜会の存在、ここで議論される内容に関しては、長らく極秘にされていた。会員の多くがプロイセンの官僚であり、彼らが職務を離れたところで自由に議論できる場を確保するためであった。しかし、秘密結社を禁止する勅令が出たときに、その存在を公表して会の存続を図ったのが裏目に出て、当局の監督下に置かれるよりは会を解散する道を選んだ。(Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 117., Göcking: a.a.O., S. 89-92., Vierhaus, Rudolf: Friedrich Nicolai und die Berliner Gesellschaft. In: Friedrich Nicolai 1733-1811. Essays zum 250. Geburtstag, Hrsg. von Bernhard Fabian. Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung 1983. S. 87-98. Hier S. 88-89.)

ところで、水曜会が設立された1783年に、ゲーディケとビースターが編集委員を務める啓蒙主義の機関誌「ベルリン月報」(„Berlinische Monatsschrift“)が創刊された。その創刊号でゲーディケとビースターは、1)学問の全領域からの、とりわけ、世間一般にとって重要であり素人にも興味深いような、比較的新しい発見についての情報、2)諸国民とその慣習や制度についての描写、特に、われわれの近隣諸国に関するものが好ましい、3)人間に関係があり、われわれ自身およびわれわれの同胞についての知識を広めるような、あらゆるものに関する観察報告、4)とりわけ、まだ功績相応に知られていないような、注目に値する人々についての伝記風の情報、5)ドイツ語を発達させ、古今のドイツ文学を知るための寄稿論文、6)まだほとんど利用されたことのない、重要な古典古代の傑作の翻訳、7)非凡で注目に値する外国の著作からの抜粋、8)われわれの意図に合致した、様々な種類の、多様な内容の論文、といった8項目を設けて掲載記事の募集をしている。書評、翻訳、言語の育成などを扱った論文を募集している点では、18世紀50年代から80年代にかけて全盛を極めた道徳週刊誌の一つに数え入れられそうだが、その一方で「ベルリン月報」はかなり政治的関心の強い雑誌であり、この点で他の道徳週刊誌と一線を画していた。その理由は、編集委員のゲーディケとビースターがともにプロイセンの役人であり、プロイセン官僚機構の中で啓蒙主義陣営に立って強い指導力を発揮していたツェードリッツ男爵 (Zedlitz, Karl Abraham, Freiherr von: 1731-1793)の影響のもと、その精神を受け継いで広め、さまざまな改革を促進して行くことを使命と考えていたからである。当時はフリードリヒ二世の政権末期に当たり、プロイセン政府内でも啓蒙主義勢力と反啓蒙主義勢力が拮抗していた。後者を代表するのがヨハン・クリストフ・フォン・ヴェルナーであり、フリードリヒ二世の後を継いで王位に就いたフリードリヒ・ヴィルヘルム二世は、ヴェルナーから強い影響を受けていた。(拙論『「ベルリン月報」とカント」〔獨協大学『ドイツ学研究』第29号(1993年)、209-228ページ〕、特に209-212ページ参照)

月曜クラブのメンバーと水曜会のメンバーがかなり重複している点は、当時の、特

- に啓蒙主義を信奉する人々が同志とのコンタクトを求めて同時に複数の会合に顔を出していたことを考えればそれほど不思議ではないが、興味深いのは、守秘義務を厳しく守っていた水曜会と、ある意味で公共性をその第一原理とする雑誌「ベルリン月報」との密接な関係である。この点についてフィーアハウスも、「水曜会のメンバーで、『ベルリン月報』に投稿していた人は少なくない。それどころか、水曜会がこの雑誌の後ろ盾になっていたと言えるかもしれない[後略]」(Vgl. Vierhaus: a.a.O., S. 89.)と指摘している。また、ヴェーバーによれば、ゲーディケとビースターにとって水曜会は情報収集の場であり、考えをまとめる場であり、雑誌の協力者の宝庫であったばかりか、二人はさらに水曜会の会合でディスカッションのやり方を学び、これが「ベルリン月報」の編集方針にも生かされることになった。(Vgl. Weber, Peter: Die „Berlinerische Monatsschrift“ als Organ der Aufklärung. Anhang zu: Ders. (Hrsg.): Friedrich Gedike und Johann Erich Biester (Hrsg.): Berlinerische Monatsschrift (1783–1796). Auswahl. Leipzig: Verlag Philipp Reclam jun. 1985. S. 356–452. Hier S. 364.)
- 12) もちろんバルタイの伝記には、ニコライの晩年しか見ていないという問題点はある。
- 13) パルタイ、リリー (Parthey, Lilli: 1800–1829)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの娘ヴィルヘルミーネとフリードリヒ・ダーニエール・パルタイの長女。グスタフ・フリードリヒ・コンスタンティン・パルタイの妹。ベルンハルト・クライン (Bernhard Klein) と結婚。ツェルターの教え子。(原註参照)なお、リリーに関しては、『リリーの日記』のタイトルページ等には「パルタイ、リリー (Parthey, Lili: 1800–1829)」(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O.)、エーベルト/ヘッカーには「パルタイ、リリー (Parthey, Lilli: 1800–1829)」(Vgl. Ebert/Hecker: a.a.O.)とある。また、クラインに関しては、原註にさらに「クライン、ベルナルト (Klein, Bernard: 1793–1832)」、エーベルト/ヘッカーには「クライン、ベルンハルト・ヨーゼフ (Klein, Bernhard Joseph: 1793–1822)」(Vgl. Ebert/Hecker: a.a.O.)とある。
- 14) レプジウス、ベルンハルト (Lepsius, Bernhard: ?–?)。リリー・パルタイの孫。
- 15) 補足資料 1、2 参照。
- 16) この地区の名前はもちろん、ニコライとは関係ない。今もここにある、1230 年頃建造されたベルリン最古の教区教会、ニコライ教会 (Nikolaikirche) に由来する名前である。補足資料 3 参照。
- 17) コドヴィエツキ、ダーニエール (Chodowiecki, Daniel: 1726–1801)。画家、銅版画家。当時の最も有名な挿絵画家で、ニコライの著作『学士ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』(„Das Leben und die Meinungen des Herrn Magister Sebaldus Nothanker“) や『若きヴェルターの喜び、大人になったヴェルターの悩みと喜び』(„Freuden des jungen Werthers, Leiden und Freuden Werthers des Mannes“) を含むニコライ書店から出版された数多くの作品、レッシング、ビュルガー、クロップシュトック、ゲーテ、シラー等の作品の挿絵、口絵、ピネットを手掛けた。ベルリン芸術アカデミー院長。(原註、Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 127 und 145., Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 420. 参照)
- 18) ツェルター、カール・フリードリヒ (Zelter, Karl Friedrich: 1758–1832)。(原註参照)
- 19) „Jugenderinnerungen von Gustav Parthey. Berlin 1871. Neuherausgegeben von Ernst Friedel. Berlin 1907.“
- 20) 章割り、各章の表題については原典の通りにしてある。
- 21) テラー、ヴィルヘルム・アブラハム (Teller, Wilhelm Abraham: 1741–1804)。ペトリ教会の牧師。監督教区長、科学アカデミー会員。(原註参照)なお、ヴェーバーには「テラー、ヴィルヘルム・アブラハム (Teller, Wilhelm Abraham: 1734–1804)」

- (Vgl. Weber (Hrsg.): a.a.O., S. 476.) とある。
- 22) レッケ、シャルロッテ、エリーザベト・コンスタンティーナ・フォン・デア (Recke, Charlotte, Elisabeth Konstantina von der: 1756–1833)。メーデム伯爵の長女。作家。1814年から1818年にかけて、ブリュダー通りのニコライの家に住んでいた。(原註参照)なお、エーベルト/ヘッカーでは「レッケ、シャルロッテ・エリーザベト・コンスタンツェ・フォン・デア (Recke, Charlotte Elisabeth Constanze, von der: 1756–1833/ただし、本文中では 1754–1833)」(Vgl. Ebert/Hecker: a.a.O.)、ヴェーバーでは「レッケ、エリーザ・シャルロッテ・コンスタンティア・フォン・デア (Recke, Elisa Charlotte Konstantia v. d.: 1754–1833)」(Vgl. Weber (Hrsg.): a.a.O., S. 474.) となっている。
  - 23) パルタイ、フリードリヒ・ダーニエール (Parthey, Friedrich Daniel: 1745–1822)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの娘ヴィルヘルミーネ・ニコライと結婚。二人の間にできた子どもが、グスタフ・フリードリヒ・コンスタンティン・パルタイ、リリー・パルタイ。ヴィルヘルミーネの死後、ヴィルヘルム・アイヒマンの娘で、クリストフ・フリードリヒ・ニコライの三男ダーフィットの未亡人となっていたシャルロッテと再婚。(原註、Ebert/Hecker: a.a.O. 参照)
  - 24) ヒラー、ヨハン・アーダム (Hiller, Johann Adam: 1728–1804)。作曲家、ライプツィヒの楽長。自らのジングシュピールによって、ドイツ語を使った音楽劇発展の土台を築いた。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 427. 参照)
  - 25) メーデム伯爵 (Medem, Graf von: ?-?)。(原註参照)なお、エーベルト/ヘッカーには「メーデム伯爵、ヨハン・フリードリヒ・フォン (Medem, Johann Friedrich, Reichsgraf von: ?-?)」(Vgl. Ebert/Hecker: a.a.O.) とある。
  - 26) 1786年5月、「ベルリン月報」誌上にカリオストロの正体を暴露する「デンマーク王立芸術アカデミー J. M. プライスラー教授に宛てて」(„An Herrn J. M. Preißler, Professor bei der königl. dänischen Akademie der Künste.“) が掲載された後、翌1787年にはニコライ書店から『悪名高きカリオストロの1779年のミータウ滞在、および当地での魔術的行為に関する報告』(„Nachricht von des berühmigten Cagliostro Aufenthalte in Mitau, im Jahre 1779, und von dessen dortigen magischen Operationen.“) が出版された。なお、石川氏は、フォン・デア・レッケ夫人のこの二つの著作がシラーの『招霊妖術師』(„Der Geisterseher“)の内容に大きく影響を与えたのではないかと推測している。(石川實「シラーと『招霊妖術師』」[石川實訳『招霊妖術師』、国書刊行会、1980年、205–233ページ]、221–223ページ参照)
  - 27) メーデム、アンナ・シャルロッテ・ドロテア・フォン (Medem, Anna Charlotte Dorothea von: 1765–1821)。メーデム伯爵の次女。フリードリヒ・ダーニエール・パルタイが彼女の家庭教師をしていた。1779年にクーアランド公 (Peter v. Biron, Herzog v. Kurland: 1724–1800) と結婚(クーアランド公にとっては三度目の結婚)。1796年にレービジャウの領地を手に入れる。(原註、Ischreyt (Hrsg.): Johann Jacob Ferber, S. 177., Ischreyt (Hrsg.): Die beiden Nicolai, S. 407 und 409., Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 432. 参照)
  - 28) メーデム、ヨハン・フリードリヒ・フォン (Medem, Johann Friedrich von: ?–1778)。フリードリヒ・ダーニエール・パルタイとの旅行中に病死。(原註参照)なお、『リリーの日記』序論には「メーデム、フリードリヒ・フォン (Medem, Friedrich von: ?–1778)」(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 14–16.) とある。
  - 29) ブレッシヒ、ヨハン・ローレンツ (Blessig, Johann Lorenz: 1747–1816)。神学者、哲学者、シュトラスブルクの教授。(Vgl. Jacob-Friesen, Holger: a.a.O., S. 622.)
  - 30) ニコライ、ヴィルヘルミーネ (Nicolai, Wilhelmine: 1761–1803)。クリストフ・フ

- リードリヒ・ニコライの長女。フリードリヒ・ダーニエール・パルタイの最初の妻。グスタフ・フリードリヒ・コンスタンティン・パルタイとリリー・パルタイの母。(原註参照)
- 31) この別荘については、「レーム城、ベトリ教会の火事」の章に詳しい描写が出てくる。なお、「解題、および翻訳の目的」で述べたとおり、『リリーの日記』の編者レプジウスは、その序論で別荘近辺の様子を大雑把にはあるが図解している。(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 21.) 補足資料 4 参照。
- 32) ニコライ、クリストフ・ゴットリーブ (Nicolai, Christoph Gottlieb: 1690-1752)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの父。(原註、Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 122. 参照)
- 33) ツインマーマン、ゴットフリート (Zimmermann, Gottfried: 1670-1723)。(原註参照)
- 34) ニコライ、ゴットフリート・ヴィルヘルム (Nicolai, Gottfried Wilhelm: 1715-1758)。原註には「フランクフルト・アン・デア・オーダーの大学教授」とあるが、本文中でパルタイ自身が述べているように、書店を継いだ兄と大学教授をしていた兄とは別人物で、書店を継いだ兄(長男)の方がゴットフリート・ヴィルヘルムである。(原註、Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 4.、Möller, Horst: Aufklärung in Preußen. Der Verleger, Publizist und Geschichtsschreiber Friedrich Nicolai. Berlin: Colloquium Verlag 1974, S. 23 und 617. 参照)なお、フランクフルト・アン・デア・オーダーの大学教授をしていたのは、次の註に述べる別の兄である。
- 35) ニコライ、ゴットロップ・ザームエール (Nicolai, Gottlob Samuel: ?-?)。(Vgl. Möller: a.a.O., S. 617.) なお、『リリーの日記』序論には「ニコライ、ゴットロップ・ザームエール (Nicolai, Gottlieb Samuel: ?-?)」(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 3.) とある。『ドイツにおける文芸の現状に関する書簡』の著者をめぐる一件(この『書簡』には「フランクフルト・アン・デア・オーダーの哲学正教授ゴットロップ・ザームエール・ニコライによる」(von Gottlob Samuel Nicolai, ordentlichem Professor der Philosophie in Frankfurt an der Oder) 序文が付いており、そのため、最初はニコライの兄ゴットロップ・ザームエールが著者だと考えられていた)などを考え合わせれば、メラの方が正しいようである。(Vgl. Nicolai, Friedrich: Sämtliche Werke · Briefe · Dokumente. Kritische Ausgabe mit Kommentar. Bd.3: Literaturkritische Schriften I. Bearbeitet von P. M. Mitchell. Berlin · Bern · Frankfurt/M. · New York · Paris · Wien: Peter Lang 1991, S. 53., Engel: a.a.O., S. 20.)
- 36) ランゲ、ザームエール・ゴットホルト (Lange, Samuel Gotthold: 1711-1781)。詩人、牧師。ホラチウス通、ホラチウス翻訳家としての彼の名声は、レッシングの著書『ラウプリンゲンの牧師 S. G. L. 氏のためのハンドブック』(„Ein Vade Mecum für den Herrn S.G.L., Pastor in Laublingen“, 1754)によって大いに揺らいだ。(原註、Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 606. 参照)
- 37) ヴェイドル氏によれば、「ドイツ百科叢書」は 1765 年から 1806 年まで刊行され、補遺や索引を含めて全 256 巻、一巻当たりの平均ページ数は 640 ページである。(Vgl. Weidl: a.a.O., S. 156.) また、厳密に言えば、この文芸批評誌は 1793 年以降「新ドイツ百科叢書」(„Neue allgemeine deutsche Bibliothek“ = „NADB“) という名称に変わった。
- 38) シャールシュミット、オイゼービア・マカーリア (Schaarschmidt, Eusebia Macaria: 1741-1793)。プロイセン国王の侍医を務めたこともある生理学・病理学博士ザームエール・シャールシュミット (Samuel Schaarschmidt) 教授の娘。クリストフ・フリードリヒ・ニコライと結婚。パルタイの本文、註、そしてパルタイを参考にしてレ

- プジウスが『リリーの日記』につけた序論では「オイゼービア・マカーリア」となっているが、ゲッキングおよび『リリーの日記』巻末のニコライ・バルタイ・レブジウス家系図では「エリーザベト・マカーリア (Elisabeth Macaria)」、エーベルト/ヘッカーおよび „Allgemeine Deutsche Biographie“ では「エリーザベト・マカーリア (Elisabeth Makaria)」となっている。Macaria か Makaria かの問題はさておき、『リリーの日記』に挿入されたニコライ家の肖像画にも「エリーザベト (Elisabeth)」とあるので、恐らく、バルタイが間違っ「オイゼービア」としたものをレブジウスが『リリーの日記』の序論にも持ち込んでしまったのだろう。(原註、Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 5 und 431., Ebert/Hecker: a.a.O., Göckingk: a.a.O., S. 28. 参照)
- 39) エンゲル、ヨハン・ヤコブ (Engel, Johann Jakob: 1741-1802)。詩人、美学者、批評家。1766 年以降ライプツィヒで家庭教師、1776 年からベルリンでギムナジウム教授を務めるかたわらフンボルト兄弟の家庭教師。1786 年から 1790 年まで、新設されたベルリン国立劇場の舞台監督。喜劇、悲劇、文学理論に関する論文も執筆した。科学アカデミー会員。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 422. 参照)
- 40) 原文では、Andere Leute haben nur ein Steckenpferd, aber Nicolai hat einen ganzen Stall voll. となっていて、「道楽、春駒」を意味する Steckenpferd と、「厩、馬小屋」を意味する Stall がうまく呼応し、言葉遊びになっている。
- 41) この銀婚式の様子については、ゲッキングも簡単に言及している。「結婚 25 年目の年に、ニコライ夫妻双方の友人たちが多数集まって銀婚式のお祝いをした。友人たちはニコライ家の結婚・家庭暦を印刷させ、ベルリンの有名な画家テルブッシュ (Therbusch, Anna Dorothea) が描いた一家の肖像画を銅版に彫らせ、これを暦のとびらに掲載した。暦には、一方のページに日付・曜日とその日のモットー(固有名は赤字で、その他は黒字で印刷されていた)が、他方のページにその日のニコライ家における行事がメモされていた。) ゲッキングはさらにこの暦の一部を筆写しているが、そこには、ニコライが毎週月曜日にクラブ(つまり、月曜クラブ)に通っていたこと、また、毎週金曜日には音楽愛好家たちのコンサートがあり、ニコライも長男と一緒にバイオリンを弾いて参加していたことなどが証言されている。(Vgl. Göckingk: a.a.O., S. 28-29.)
- 42) ビースター、ヨハン・エーリヒ (Biester, Johann Erich: 1749-1816)。「ベルリン月報」の編集者、「ドイツ百科叢書」の協力者。ニコライの紹介で 1777 年以降プロイセン国務・司法大臣ツェェドリッツ男爵の私設秘書、1784 年からベルリン王立図書館司書。水曜会の第一秘書。(原註、Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 95. 参照)
- 43) ドーム、クリスティアン・コンラート (Dohm, Christian Konrad: 1751-1820)。ベルリンの記録文書係。歴史編集者。レッシングやメンデルスゾーンが提唱した寛容の精神に基づいて、ユダヤ人に完全な市民権を保証するために戦った。(原註参照) なお、ベッカーには「ドーム、クリスティアン・ヴィルヘルム (Dohm, Christian Wilhelm: 1751-1820)」(Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 106.)、ヴェーパーには「ドーム、クリスティアン・ヴィルヘルム・フォン (Dohm, Christian Wilhelm von: 1751-1820)」(Vgl. Weber (Hrsg.): a.a.O., S. 469.) とある。
- 44) ゲーディケ、フリードリヒ (Gedike, Friedrich: 1754-1803)。教育学者、翻訳家、抒情詩人。とりわけ教育学関係の著書と教科書を出版。ビースターとともに「ベルリン月報」を編集発行。1795 年から灰色の修道院長。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 424. 参照)
- 45) グライム、ヨハン・ヴィルヘルム・ルートヴィヒ (Gleim, Johann Wilhelm Ludwig: 1719-1803)。詩人。ハルバーシュタットの司教座聖堂秘書、司教座聖堂参事会員。アナクレオン派の中心人物。クライスト (Kleist, Ewald Christian von: 1715-1759)、

- レッシング、クロップシュトック等当時の数多くの有名人と交友関係を持っていた。(原註、Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 598.、Radcun (Hrsg.): a.a.O., S. 425. 参照)
- 46) クライン、エルンスト・フェルディナント (Klein, Ernst Ferdinand: 1743-1810)。ハレの法学者。クラインの娘 (Julie Klein) はニコライの長男ザームエールと結婚。(原註参照)なお、『リリーの日記』巻末のニコライ・パルタイ・レプジウス家系図では「クライン、エルンスト・フェルディナント (Klein, Ernst Ferdinand: 1744-1810)」(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 431.) とある。
- 47) マイル、ヨハン・ヴィルヘルム (Meil, Johann Wilhelm: 1733-1805)。画家、銅版画家。レッシングの著書の表題紙や挿絵、ニコライの『ゼバルドゥス・ノートアンカー』等の挿絵を制作したこともある。(原註、Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 610.、Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 59 und 108. 参照)
- 48) メーゼン、ヨハン・カール・ヴィルヘルム (Möhsen, Johann Karl Wilhelm: 1722-1795)。ベルリンの医師、1778年には王家の侍医を務める。(Vgl. Habersaat: a.a.O., Bd. 2, S. 24.)
- 49) エルリヒス、ヨハン・カール・コンラート (Oelrichs, Johann Carl Conrad: 1722-1793)。歴史家。(原註参照)
- 50) エースフェルト、カール・ルートヴィヒ (Oesfeld, Carl Ludwig: 1781-1843)。地図制作者。ニコライの『王都ベルリンとポツダム』に付属の地図は、エースフェルトが制作したものである。(原註参照)
- 51) ラムラー、カール・ヴィルヘルム (Ramler, Karl Wilhelm: 1725-1798)。詩人、編集者、翻訳家。1748年から1790年まで、ベルリン士官学校の論理学、文芸学教授。レッシングの友人。ベルリン国立劇場支配人。月曜クラブの設立者・長老シュルテス (シュルタイス)がスイスで暮らすようになって以降、ベルリンで長老の職務を代行。(原註、Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 616. 参照)
- 52) テーデン、ヨハン・クリスティアン (Theden, Johann Christian: 1714-1797)。ベルリンの軍医監。(原註参照)
- 53) ヴェルナー、ヨハン・クリストフ・フォン (Wöllner, Johann Christoph von: 1732-1800)。プロイセンの司法・文部大臣。プロイセンにおける反啓蒙主義運動の指導的人物。薔薇十字団支部設立に関わり、その神秘主義的・宗教的態度によってフリードリヒ・ヴィルヘルム二世に決定的な影響力を持っていた。1788年には宗教・検閲勅令を発布した。(Vgl. Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 439.)なお、薔薇十字団、ヴェルナー、フリードリヒ・ヴィルヘルム二世の関係についてさらに詳しくは、拙論「十八世紀後半の時代思潮とフリードリヒ・ニコライの『ゼバルドゥス・ノートアンカー』」〔日本ゲーテ協会編『ゲーテ年鑑』第37巻(1995年)、187-207ページ〕、192ページおよび注13、ヴェルナーの宗教・検閲勅令についてさらに詳しくは、拙論『『ベルリン月報』とカント』、222-224ページを参照。
- 54) ニコライ、ザームエール (Nicolai, Samuel: 1762-1790)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの長男。ハレの有名な法学者エルンスト・フェルディナント・クラインの娘ユーリエと結婚。(原註参照)
- 55) ニコライ、カール・アウグスト (Nicolai, Karl August: 1769-1799)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの次男。(原註参照)
- 56) ニコライ、ダーフィット (Nicolai, David: 1773-1804)。クリストフ・フリードリヒ・ニコライの三男。ヴィルヘルム・アイヒマンの娘シャルロッテと結婚。(原註参照)
- 57) アイヒマン、ヴィルヘルム (Eichmann, Wilhelm: 1748-1829)。大蔵省、後に市参事会の行政官。シャルロッテ・アイヒマンの父。(原註参照)
- 58) アイヒマン、シャルロッテ (Eichmann, Charlotte: 1779-1861)。ヴィルヘルム・ア

- イヒマンの娘。ニコライの三男ダーフィットと結婚したが、彼に先立たれ、後にフリードリヒ・ダーニエール・パルタイと再婚。(原註参照)
- 59) フリードリヒ・ヴィルヘルム三世 (Friedrich Wilhelm III: 1770–1840)。プロイセン王で、在位期間は1797年から1840年まで。(原註参照)
  - 60) ニコライ、シャルロッテ (Nicolai, Charlotte: 1775–1808)。(原註参照)
  - 61) ファシュ、カール・フリードリヒ (Fasch, Karl Friedrich: 1736–1800)。指揮者。ベルリン合唱協会の創設者。(原註参照)
  - 62) ロホリッツ、フリードリヒ (Rochlitz, Friedrich: 1769–1842)。音楽批評家。ライプツィヒで「一般音楽新聞」 („Allgemeine musikalische Zeitung“) を創刊した。(原註参照)
  - 63) カイナー(旧姓パルタイ)、ドロテア (Keiner, Dorothea, geb. Parthey: ?-?)。(原註参照)なお、ベッカーには「カイナー、ドロテア・エリーザベト (Keiner, Dorothea Elisabeth: ?-?)」(Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 27.) とある。
  - 64) 鉛白は最も古く隠蔽力の大きな白色顔料だが、なかでも「薄鉛板を数多くつり下げた室に、50~70度Cの二酸化炭素、空気、酢酸および水蒸気の混合ガスを送り、表面に炭酸水酸化鉛を生成させるドイツ法によるものが、隠蔽力が大きいとされている。」ここで言及されている Essigkammer とはこの「酢酸貯蔵庫」のことか。(『DVD-ROM 版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』小学館、参照)
  - 65) フンボルト、ヴィルヘルム・フォン (Humboldt, Wilhelm von: 1767–1835)。言語学者、政治家。プロイセンの文部大臣。1810年にベルリン大学を創設。(原註参照) 補足資料5参照。
  - 66) ポンペイウスはカエサルの娘ユリアと結婚したが、ポンペイウスが前106年生まれているのに対しカエサルは前100年生まれ、つまり、義理の息子さんの方が義理の父よりも6歳年上だったわけである。(『DVD-ROM 版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』、参照)
  - 67) ゴールドスミス (Goldsmith, Oliver: 1728–1774) の代表作『ウエイクフィールドの牧師』 („The Vicar of Wakefield“, 1766)。
  - 68) パルタイ、モーリッツ (Parthey, Moritz: 1807–1872)。フリードリヒ・ダーニエール・パルタイと二番目の妻シャルロッテの子ども。グスタフ・フリードリヒ・コンスタンティン・パルタイ、リリー・パルタイの異母弟。(原註参照)
  - 69) 原文では、Es gab vornehme und gemeine, falsche und halbgefütterte Zöpfe usw. となっている。vornehme「上流階級の、贅沢な、値が張る」と gemein (= allgemein)「庶民の、普通の、低価格の」は対立概念。falsch は echt/eigen の対立概念で、辮髪を結うほど自分の髪の毛がない人は falsche Zöpfe「他人の髪の毛で作った辮髪」を付けていた。また、自分の髪の毛がないわけではないが、太い辮髪を結うには足りないような場合には、他人の髪の毛等で芯を作りその周りを自分の髪の毛で包んで辮髪を結っていた。これが、halbgefütterte Zöpfe「半分裏打ちした辮髪」である。
  - 70) ジャン・パウル (Jean Paul, eigtl. Jean Paul Friedrich Richter: 1763–1825) の小説『巨人』 („Titan“, 1800–1803) のこと。
  - 71) 原文では、Während des Französischen Krieges (1806 bis 1807) wurden die meisten Zivilzöpfe in Berlin abgeschnitten, [...] となっている。Zivilzöpfe = Zöpfe von Zivilisten im Gegensatz zu solchen von Soldaten。
  - 72) 原文では chapeau bas。脇の下に抱えて携帯する平たい帽子。(原註参照)
  - 73) ブリューダー通り13番のニコライ家は現在、「博物館ニコライハウス」として利用されている。正面ファサード、吹き抜けの階段の手すり、中庭の一部に当時の面影が残っている。将来的にはこの家の歴史、この家の住人たち(ベルリン磁器工場の設立

者ゴツコフスキー、ニコライ・バルタイ一家、対ナポレオン解放戦争期の詩人テオドール・ケルナーなど)に関する常設展が置かれる予定だが、今のところはベルリンの演劇史に関する特別展が開かれているだけである。(2002年3月、Stiftung Stadtmuseum Berlin/Stadtmuseum Berlin GmbH 発行の博物館案内小冊子参照)補足資料6、7参照。

この家がニコライの手に渡った経緯については本文中にも簡単に紹介されているが、ここでは、Winkler, Uwe: Zur Geschichte des Nicolaihauses und des Grundstücks Brüderstraße 13. In: Museums Journal. III/2000. Hrsg. von der Stiftung Stadtmuseum Berlin. S. 55-57. の内容を要約することで、この家の歴史を、孫のグスタフ・フリードリヒ・コンスタンティン・バルタイが相続して書店を売却するあたりまでもう少し詳しく振り返っておきたい。

[以下要約] プリュエダー通り 13 番の地所にはもともと二軒の家が建っていた。一軒は選帝侯侍医オットー・ベッティヒャー (Otto Böttcher) の所有で、もう一軒はケルン地区の市民ペーター・アルブレヒト (Peter Albrecht) のものだった。1650 年の火災で二軒とも焼けてしまったが、ベッティヒャーはすぐに家を再建した。アルブレヒトの地所はそのまま手付かずの状態になっていたが、1660 年に選帝侯が買い上げ、ベッティヒャーにプレゼントした。ベッティヒャーの死後、その娘が 1664 年に二つの地所を、選帝侯宮廷漁師長、調理師で、後のケルン地区市長ハインリヒ・ユールウス・ブランデス (Heinrich Julius Brandes) に 2300 ターラーで売り渡した。1674 年、ブランデスが家の拡張工事を行った際、二つの地所は一つにまとめて登記され、後にプリュエダー通り 13 番の番地を与えられた。敷地の奥には醸造所などが建てられた。1709 年、裁判官ヨハン・フォルラート・ハッパハ (Johann Vollrath Happach) がこの地所と建物一式を 8060 ターラーで競り落とし、すぐに同じ値段で陸軍中将アルブレヒト・コンラート・フィンク・フォン・フィンケンシュタイン伯爵 (Graf Albrecht Conrad Finck von Finckenstein) に売却した。ヴスターハウゼンの代官で王直属小作人のリヒャルト・シェーネベック (Richard Schönebeck) が、1710 年 5 月 1 日にこれをフォン・フィンケンシュタイン伯爵から同じ条件で買い取り、左右二つの側翼を増築してプリュエダー通り側の建物と奥の建物を(つまり、中庭を囲む口の字型に)結びつけ、この家はほぼ今の姿になった。プリュエダー通り側の建物に現存する、見事な彫刻を施したオーク材の手摺りがついたバロック風木製階段は、シェーネベックが設えたものである。1719 年には、これらがすべて 12500 ターラーで、枢密顧問官兼軍事顧問官フリードリヒ・エルンスト・フォン・クニプハウゼンとその妻シャルロッテ・ルイーゼ (Charlotte Luise) の手に渡った。二人は、奥の建物のさらに奥にあった「フランス屋敷」の一部を 1100 ターラーで買い取り、そこに厩と、シュプレー川に流れ込む排水溝を造った。その後 1747 年 2 月 15 日に、商人で手工業工場主のヨハン・エルンスト・ゴツコフスキーが、フォン・クニプハウゼン夫人から 14000 ターラーでこの家を購入した。彼はここにビロード織工場を設立したらしい。「フランス屋敷」の地所を 700 ターラーでさらに買い足したりしたが、7 年戦争後の経済危機で破産し、結局プロイセン国家がこの家一式を差し押さえ、その価格を 18580 ターラーと査定した。1773 年の公開競売で、ハーフェルベルクの司教座教会参事会会員オットー・フリードリヒ・フォン・ブレドー (Otto Friedrich von Bredow) が 15050 ターラーで落札し、商人ヨハン・クリストフ・ロイチュ (Johann Christoph Roitzsch) に所有権を譲り渡した。そして、ロイチュの共同出資者である商人カール・フリードリヒ・ディーコーから、1787 年にニコライが、32500 ターラーでこの家を買取ったのである。ニコライは、左官の親方で、後のベルリン合唱協会会長カール・フリードリヒ・ツェルターに依頼して、居住用兼出版社用の家に改築し



でもらった。ツェルターは、ブリューダー通り側の建物の中央に出入り口を置き、大きな舞踏会用ホールが設えられていた奥の建物内を細かく仕切り、いくつかの部屋、小ホール、二つの通路を造った。既は「園亭の広間」に造り替えられ、階段で奥の建物の玄関と結びつけられた。さらに、右の側翼には木製の廊下を取り付けられた。ブリューダー通りに面した建物の一階には出版社の事務所、二階には家族の部屋や書斎、三階には客室があった。1811年にニコライが亡くなると、義理の息子、宮廷顧問官ダーニエル・フリードリヒ・バルタイ (Daniel Friedrich Parthey (Friedrich Daniel Parthey の間違い))がこの家と出版社を相続し、1821年にはその息子、エジプト学者で文献学者のフリードリヒ・グスタフ・コンスタンティン・バルタイ (Friedrich Gustav Konstantin Parthey (Gustav Friedrich Konstantin Parthey の間違い))が出版社業を継いだ。ニコライから始まって孫のバルタイまで、数十年もの間、この家はベルリンの精神文化の中心だった。討論会や芝居の上演、ホームコンサートなどが催され、哲学者のゲオルク・フリードリヒ・ヘーゲル (Georg Friedrich Hegel)、詩人のヨハン・ヴィルヘルム・ルートヴィヒ・グライム、医師のクリスティアン・ヴィルヘルム・フーフェラント (Christian Wilhelm Hufeland)、彫刻家のヨハン・ゴットフリート・シャードー、建築家のカール・フリードリヒ・シンケル (Karl Friedrich Schinkel)、画家・エッチング画家のダーニエル・コドヴィエツキ、クリスティアン・ベルンハルト・ローデなどが出入りしていた。また、1811年から1813年まで、対ナポレオン解放戦争期の詩人カール・テオドール・ケルナー (Karl Theodor Körner) が、この家に客人として暮らしていた。グスタフ・バルタイは、1858年にニコライ書店の小売部門を手放し、1866年には出版部門を売却した。小売部門は1892年に、出版部門はその8年後この家から出ていったが、家の所有者は依然としてバルタイ家であった。20世紀の40年代以降は「バルタイ家共同相続」の対象となり、1910年から1936年までは、1905年に設立されたレッシング博物館が置かれていた。[以上要約]

なお、「解題、および翻訳の目的」で触れたとおり、『リリーの日記』の編者レプジウスは、その序論でニコライ家の間取りを大雑把に図解している。(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 2.) 補足資料8参照。

- 74) つまり、「ブリューダー通り」(Brüderstraße)という名が「慈悲の修道士会修道院」(das Kloster der Barmherzigen Brüder)のBrüderに由来するという説である。補足資料9参照。
- 75) Schloßplatz. 補足資料10参照。
- 76) 「ブリューダー通り」の名の由来については、「この名前、『黒の修道士』(Die schwarzen Brüder = ドミニコ会修道士)から取られた。1469年に(フランシスコ会修道士の『灰色の修道院』に対抗して)王宮前広場に『黒の修道院』が建設される以前、黒の修道士たちの最初の修道院がここに建てられたからである。」という説もある。(Vgl. Führer durch das Lessing-Museum im Nicolai-Körner-Hause. Berlin C2, Brüderstr. 131. Hrsg. im Auftrage der Lessing-Gesellschaft e.V. Berlin 1929, S. 7.)
- 77) 「灰色の修道院」(das Graue Kloster)という名称は、フランシスコ会修道士たちが灰色 (grau) の修道服を着ていたことに由来する。マティーアスによれば、8~9世紀頃ドイツ北・東部に移住したスラブ系民族ウェンド人を、アスカーニエン家出身のブランデンブルク辺境伯アルブレヒト熊王 (Albrecht der Bär: 1100-1170) が駆逐し、今のクロスター通り (Klosterstraße) の辺りに住むようになった。その子孫アルブレヒト三世 (Albrecht III.) とオットー背高王 (Otto der Lange) が、今の市役所通り (Rathausstraße) からリッテン通り (Littenstraße) に沿って小教区教会 (Parochialkirche) に及ぶ地所を、修道院を造るようにとフランシスコ会修道士に寄贈した。さ

- らに煉瓦の調達が可能となった後、1290年に修道士たちは修道院の建設を始めた。1320年にアスカーニエン家の子孫が死に絶えると、ブランデンブルク選帝侯国はホーエンツォレルン家出身のニュルンベルク辺境伯に譲渡された。1539年、選帝侯ヨアヒム二世 (Joachim II.) がブランデンブルクに宗教改革を導入し、灰色の修道院の歴史に終止符が打たれた。(Vgl. Matthias, Ursula (Hrsg.): Das Kloster der Grauen Mönche in Berlin und das Berlinische Gymnasium zum Grauen Kloster. Berliner Geschichte. Gernrode 2002.) 補足資料 11 参照。
- 78) クレーデン、カール・フリードリヒ・フォン (Klößen, Karl Friedrich von: 1786–1856)。歴史編集者。プロイセンで最初の実業学校を創立した。(原註参照)
- 79) Jungfernbrücke. 補足資料 12 参照。
- 80) クニプハウゼン、ボド・ハインリヒ・フォン (Knyphausen, Bodo Heinrich von: 1729–1789)。大臣。スウェーデン、パリ、ロンドン駐在プロイセン公使。(原註参照) なお、エーベルト/ヘッカーには「クニプハウゼン、フリードリヒ・エルンスト・フォン (Knyphausen, Friedrich Ernst von: 1671–1731)」(Ebert/Hecker: a.a.O.)、ヴィンクラーには「クニプハウゼン、フリードリヒ・エルンスト・フォン (Knyphausen, Friedrich Ernst von)」(Winkler: a.a.O., S. 55.) とある。ただし、ヴィンクラーによる「博物館ニコライハウス」の歴史を読む限りでは、原註の方が間違っている可能性が高い。
- 81) ゴツコフスキー、ヨハン・エルンスト (Gotzkowski, Johann Ernst: 1710–1775)。ベルリンにピロード、絹織り工場を設立した。1761年にはベルリン磁器工場を設立し、1763年にフリードリヒ二世に売り渡した。これが「KPMベルリン」(Königliche Porzellan-Manufaktur Berlin)の歴史の始まりである。(原註参照)
- 82) ディーコー、カール・フリードリヒ (Dieckow, Karl Friedrich)。(Winkler: a.a.O., S. 56.)
- 83) 「直線的な部材で構成される三角形を単位とした構造骨組の一種で、各部材の端部節点が生じてピン接合となっているものをいう。部材の中間点に荷重が作用すれば、その部材には軸方向力のほかに曲げモーメントや剪断(せん断)力が生じるが、節点の位置に荷重が加わると各部材には軸方向力しか発生しない。このため曲げモーメントを受ける部材と比較して一般に変形が小さい。トラス構造には、すべての部材が一つの平面内に存在する平面トラスと、一つの節点に部材が三次元的に集まる立体トラスとに大別され、立体トラスでは6本の直線材で構成される四面体が単位になっていることが多い。トラス構造は、建築では屋根の小屋組みや張間(支点間の距離)の大きなはりを構成するのに用いられ、木造の軸組なども筋かいを設け、三角形を単位とした構造骨組(トラス)に置換することにより構造的に有利な骨組を得ている。また、和風小屋組みにおいても、規模が大きくなると構造的にも経済的にもトラス小屋組みのほうが有利となる場合が多い。土木構造物では、トラスによっておもな架構が構成されたトラス橋が、およそ40メートル以上のスパンに用いられる。現在までの世界最大のトラス橋は、片持(かたもち)ばり形式とアーチ形式のトラスとを組み合わせた548メートルの梁間(りょうかん)をもつカナダのケベック橋であるといわれている。トラスは、単位となる三角形の構成の仕方によってキングポストトラス king post truss、クイーンポストトラス queen post truss、ハウトラス Howe truss、プラットトラス Pratt truss、ワーレントラス Warren truss、フィンクトラス Fink truss、マンサードルーフトラス mansard roof truss などがある。送電用鉄塔や鋼製集合煙突などを支持する架構は、地面を固定端とする片持ばり形式のトラス構造である。
- トラス構造の材料としては木材、鋼材が多く、木材は圧縮力を負担し、鋼材は引張り、圧縮両方の力に抵抗するように設計される。節点の構造は、ピンなどの平面内の

回転機構を備えたものや、ボール継手などの立体トラス節点用の機構が用いられるが、軽微なトラスばりや溶接トラス構造では節点を完全なピン接合とせずに、節点がピンでないことから生ずる二次的な部材応力をも考慮に入れた設計にすることもある。トラス構造の支点の拘束条件やトラス部材の配列の仕方いかんによっては、トラスの部材応力を単に力のつり合い式のみでは求めえない不静定トラスもしばしば用いられるが、この場合のトラスの解法には部材の変形の関係を考えに入れねばならない。」(『DVD-ROM 版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』、参照)

- 84) ニコライの家に向かって右に二つ目の建物。17世紀に建てられたこの家は、1737年からペトリ教会の監督教区長宅として使われるようになった。本文中でバルタイが紹介している言い伝え以外にも、「1735年に、銀のスプーンを盗んだという理由で、この家の前で下女が公開の絞首刑に処せられたが、その後間もなく彼女の無実が明らかになった。」という、この家まつわる話が伝えられている。この家は現在「博物館ガルゲンハウス」(Museum Galgenhaus)として用いられているが、「ガルゲンハウス」(Galgenhaus)という名前は、上述の言い伝え(Galgen=「絞首台」)に由来する。(2002年3月、Stiftung Stadtmuseum Berlin/Stadtmuseum Berlin GmbH 発行の博物館案内小冊子参照)補足資料13参照。

なお、ペトリ教会は、ブリュエーナー通りとシャレン通り(Scharrenstraße)が交差するあたりに立っていた。現在そこには「ペトリ広場」(Petriplatz)という街路標識が立っているだけである。補足資料14参照。

- 85) Alexanderplatz. 補足資料15参照。
- 86) 原文では Stelzenkrug。1705年に傷痍軍人収容施設に贈られた居酒屋で、アレクサンダー通り46番にあった。(原註参照)
- 87) 原文では Etagère。仕切りがいくつもついた書架。(原註参照) Bergère, Guéridon とともに、ニコライの時代にすでにアンティーク家具として貴重なものだった。
- 88) 原文では Bergère。幅広の、革張りの肘掛け椅子。(原註参照)
- 89) 原文では Guéridon。小振りの燭台。(原註参照)
- 90) カルシュ、アンナ・ルイーゼ(Karsch, Anna Luise: 1722-1791)。通称「カルシン夫人」。農家出身の抒情詩人で、貴族のパトロンや、ラムラー、グライム、ズルターといった詩人たちの支援を受けて名声を得る。天分に恵まれた詩人と賞賛された。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 429. 参照)
- 91) ロホー男爵、フリードリヒ・エーバーハルト・フォン(Rochow, Friedrich Eberhard, Freiherr von: 1734-1805)。教育学者、ハルバーシュタットの司教座聖堂参事会会員。自らの地所に小学校を作ったことで功績をあげた。1772年にニコライ書店から、『農民の子供のための、あるいは村の学校で使用するための教科書試論』(„Versuch eines Schulbuches für Kinder der Landleute oder zum Gebrauche in Dorfschulen“)という本を出版。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 436. 参照)
- 92) ツォリコーファー、ゲオルク・ヨーアヒム(Zollikofer, Georg Joachim: 1730-1788)。スイスの神学者。1758年からライプツィヒの改革派教会で説教を行う。大評判になった説教集の他に『新賛美歌集』(„Neues Gesangbuch“, 1766)を出版したが、これはドイツ全土に大きな影響を与えた。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 440. 参照)
- 93) ツェルナー、ヨハン・フリードリヒ(Zöllner, Johann Friedrich: 1753-1804)。ベルリンの宗教局評定長官、監督教区長。(原註参照)「ベルリン月報」1783年9月号に掲載された小論『婚姻関係を結ぶ際にもはや聖職者の手を煩わせないようにする提案』(„Vorschlag, die Geistlichen nicht mehr bei Vollziehung der Ehen zu bemühen“)でビースターが市民婚を提唱したのに対して、ツェルナーは、啓蒙主義の名のもとに

宗教の価値が貶められているが、そもそも「啓蒙」とは何なのかはまだにはっきりとした定義がなされていないのではないかと問い質した。「啓蒙とは、人間が自分で招いた未成年状態から抜け出すことである。未成年状態とは、他者の指導なしに自分の悟性を使うことができない状態である。」という有名な一節で始まるカントの小論『啓蒙とは何か』(„Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?“)は、このツェルナーの問いかけに答えて書かれたもので、「ベルリン月報」1784年12月号に掲載された。(拙論「『ベルリン月報』とカント」、215ページ参照)

- 94) ゼレ、クリスティアン・ゴットリーブ (Selle, Christian Gottlieb: 1748-1800)。ベルリンの医師で、哲学関係の著作がある。(原註参照)
- 95) スアレス、カール・ゴットリーブ (Suarez, Karl Gottlieb: 1746-1798)。ベルリンの法律家。(原註参照)
- 96) ローデ、クリスティアン・ベルンハルト (Rode, Christian Bernhardt: 1725-1797)。歴史画家、宗教画家、エッチング工。ベルリン芸術アカデミー院長。アレクサンダー広場 (Alexanderplatz) に立つベルリン二番目の教区教会、マリーエン教会 (Marienkirche) の祭壇画の作者。(原註、Michaelis, Rainer: Der Hochaltar der Berliner Marienkirche. DKV-Kunstführer Nr. 546/9. München · Berlin: Deutscher Kunstverlag. 参照) 補足資料 16 参照。
- 97) 『フリードリヒ・ニコライの生涯と風変わりな意見。前世紀の文学史と今世紀初頭の教育学に関する寄稿論文』(„Friedrich Nicolai's Leben und sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Literargeschichte des vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts“)
- 98) フィヒテは、犬を引き合いに出して次のようにニコライを揶揄している。「話したり書いたりする能力を与えて、ニコライ的厚顔無恥とニコライほどの寿命を保証してやることができれば、犬でさえわれらが主人公と同じくらしい成果は上げるだろう。これは確かである。ちょうどわれらが主人公のニコライ性にむっとしたように、最初はこの犬の犬性に不満を感じる人がいるかも知れないが、構わない。惑わされず尻込みせず、一度言ったことをいつも繰り返してこれに固執し、倦まずたゆまず『俺は正しい、他の連中がみな間違っているんだ』と叫んで書き続ければ、そしてさらに、ちょうどニコライが、自分は無学な市民なのにこんなことはすべて知っていると言っただけでいつも自慢してきたように、自分はただの無学な犬なのにこんなことはお見通しだと考えて有頂天になり自慢すれば、間違いなくこの犬は非常に広範囲に及ぶ影響力を持つようになるだろう。彼の学説は時代を席卷し、それが犬の立てた学説だと思に至る人はいないだろう。ある美学が確立されて、この美学に従ってどのスピッツも『エミーリア・ガロッチィ』の美を芸術的にずたずたに分解し、『ヘルマンとドロテア』の誤りを、今のところゴットフリート・メルケルにしかできないくらいの巧みさで指摘することができるだろう。そして、聖書からはついにありとあらゆる迷信が削ぎ落とされて、啓蒙されたプードルがもっともだと思ふような仕方、まるでプードルが自分で書いたものみたいに解釈されることだろう。」(Vgl. Fichte, Johann Gottlieb: Friedrich Nicolai's Leben und sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Literargeschichte des vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts. Hrsg. von A. W. Schlegel. Tübingen: J. G. Cotta'sche Buchhandlung 1801. In: Fichte, Johann Gottlieb: Sämtliche Werke. Hrsg. von J. H. Fichte. 8. Bd. Berlin: Verlag von Veit und Comp. 1846 (Unveränderter Nachdruck. Walter de Gruyter & Co. 1965. Bd. 8), S. 1-93. Hier S. 60-61.)
- 99) 1799年2月28日にベルリン科学アカデミーで行われた講演で、同年の「新ベルリン月報」(„Neue Berlinische Monatsschrift“)誌上に『数度にわたる幻影現象の例。

- 注釈付き。1799年2月28日、ベルリン王立科学アカデミーに於ける講演』（„Beispiel einer Erscheinung mehrerer Phantasmen; nebst einigen erläuternden Anmerkungen. Vorgelesen in der K. Akademie der Wissenschaften zu Berlin, d. 28. Hornung 1799“）として発表された。
- 100) 註4) 参照。
- 101) ニコライの小説『学士ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』（„Das Leben und die Meinungen des Herrn Magister Sebaldus Nothanker“）。
- 102) トマス・アモリー（Thomas Amory）の小説『ジョン・バンクル殿の生涯と意見』（„The Life and Opinions of John Buncler Esq.“, 1756）のドイツ語訳『ヨハン・ブンケルの生涯と意見、および、注目すべきさまざまな女性たちの生涯』（„Leben, Bemerkungen und Meinungen Johann Bunkels nebst den Leben verschiedener merkwürdiger Frauenzimmer.“）が、1778年にニコライ書店から出ている。（Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 69.）
- 103) アイヒマン、ヘンリエッテ（Eichmann, Henriette: 1781–1842）。ヴィルヘルム・アイヒマンの娘で、医師コールラウシュと結婚。（原註参照）
- 104) ザルツマン、クリスティアン・ゴットヒルフ（Salzmann, Christian Gotthilf: 1744–1811）。教育学者、作家。1781年にデッサウの「汎愛校」（Philanthropin）で教授、祭司を務める。1784年に、パーゼドー（Basedow, Johann Bernhard: 1723/24–1790）の基本的な考え方に従ってシュネプフェンタールに独自の教育施設を設立した。（Vgl. Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 436.）ここで言われている『入門書』（„Elementarbuch“）とは、『道徳入門書』（„Moralisches Elementarbuch“, 2 Bde., 1782f.）のことか。
- 105) カンペ、ヨーアヒム・ハインリヒ（Campe, Joachim Heinrich: 1746–1818）。教育学者、言語学者、出版者。ヴァイセ（Weise, Christian Felix: 1726–1804）と並ぶドイツ青少年文学の創始者。神学を学んだ後、長い間フンボルト兄弟の家庭教師をしていた。1776年から1777年まで、デッサウでパーゼドーの教育機関「汎愛校」に加わり、ハンブルク近郊に独自の教育機関を設立。学校制度改革のために招聘されたブラウンシュヴァイクで、1787年に教科書を扱う書店を開き、書籍出版を通じて教育の分野における啓蒙を促進しようとした。教育学関係の数多くの業績と並んで、1801年から1811年にかけて出版された『ドイツ語辞典』（„Wörterbuch der deutschen Sprache“）全5巻が有名。（Vgl. Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 626.、Fabian/Spieckermann (Hrsg.): Friedrich Nicolai. Verlegerbriefe, S. 202–203.、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 420.）なお、『旅行記』全12巻については不明。
- 106) カンペの青少年叢書全37巻の中で一番有名な、ダニエル・デフォー（Daniel Defoe）原作『ロビンソン・クルーソー』（„Robinson Crusoe“）の翻案（„Robinson der Jüngere“, 1779–1780）のことか。これはカンペとヴェーツェル（Wezel, Johann Karl: 1747–1819）による翻案で、ヨーロッパ中の言語に翻訳された。（Vgl. Fabian/Spieckermann: a.a.O., S. 203.、Schlosser, Horst Dieter (Hrsg.): dtv-Atlas zur deutschen Literatur. Tafeln und Texte. 6. Aufl. München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1994, S. 157.）
- 107) ヴェーバー、カール・ユーリウス（Weber, Karl Julius: 1767–1832）。ランゲンブルク出身の作家。（原註参照）
- 108) チェボー、デュドネ（Thiébauld, Dieudonné: 1733–1807）。フランス人作家。1765年にフランス文法の教授としてベルリンに招聘され、フリードリヒ二世の著作の添削を任された。1804年に、彼の著書『ベルリン生活20年間の思い出』（„Mes Souvenirs de vingt ans de séjour à Berlin“）が出版された。（原註参照）
- 109) シャードー、ヨハン・ゴットフリート・フォン（Schadow, Johann Gottfried von:

- 1764-1850)。彫刻家、素描画家、ベルリン芸術アカデミー院長。ブランデンブルク門 (Brandenburger Tor) の上に立つ四頭立て二輪馬車カドリガ (Quadriga) の原作者。シャードーのオリジナルとしては、四頭の馬のうち一頭の頭部だけが、今もメルキッシュ博物館に所蔵・展示されている。さらに、ニコライの胸像の石膏模型がメルキッシュ博物館に、プロイセン王女ルイーゼ (1776-1810) とフリーデリーケ (1778-1841) の大理石立像を始めとしたいくつかの彫刻作品、絵画数点が旧ナショナルギャラリー (Alte Nationalgalerie) に展示されている。ちなみに、ウンター・デン・リンデン通り (Unter den Linden) をブランデンブルク門に向かって歩き、S パーンのウンター・デン・リンデン駅の少し手前で右へ折れてシャードー通り (Schadowstraße) に入ると、今日もなおシャードーゆかりの建物「シャードーハウス」(Schadowhaus) が残っている(原註参照)
- 110) ツィーテン、ハンス・ヨーアヒム・フォン (Ziethen, Hans Joachim von: 1699-1786)。プロイセンの騎兵隊将軍。(原註参照)
- 111) ザイドリッツ、フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン (Seydlitz, Friedrich Wilhelm von: 1721-1773)。プロイセンの騎兵隊将軍。(原註参照)
- 112) ヴィンターフェルト、ハンス・カール・フォン (Winterfeldt, Hans Karl von: 1707-1757)。プロイセンの将軍。(原註参照)
- 113) エレ (Elle) とは、前腕部、小指側の骨のことだが、当時はこれを長さの尺度として用いていた。1 エレは約 55~85 センチ。(Vgl. Duden. Deutsches Universalwörterbuch (CD-ROM). Ver. 3. Mannheim: Bibliographisches Institut & F. A. Brockhaus AG 2001.)
- 114) レシュブルクによれば、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、ベルリンでは一種の「気球熱」が起こった。世界で最初に気球(熱気球)を上げることに成功したのはフランスのモンゴルフィエ兄弟 (Brüder Montgolfier) だが、同じ 1783 年 12 月にはベルリンで、化学者フランツ・カール・アハルト (Franz Carl Achard) が気球を上げる実験をし、その数週間後には薬剤師のマルティーン・ハインリヒ・クラブロートが水素ガス気球の実験をした。有人気球の例としては、ジャン・ピエール・ブランシャール (Jean Pierre Blanchard) が 1788 年 9 月にブランデンブルク門近辺で行った試みが最初で、無事実験を成功させたブランシャールには詩が捧げられたり、記念メダルが鑄造されたり、また、気球が上昇してから着陸するまでの様子を描いたスケッチが出版されたりした。これが「気球熱」を煽り立て、特に女性たちの間では気球をイメージした髪型や、巨大な帽子、ゴンドラをついた気球形の髪飾りなどが流行した。その後も、失敗例も含めて、さまざまな気球飛行の試みが行われた。レシュブルクは、特にドイツ初の女性(気球)飛行士ライヒャルト夫人 (Johanne Wilhelmine Siegmunde Reichard) による有人飛行の例に注目している。1811 年(ニコライはこの年の 1 月 8 日に亡くなっている)4 月 16 日夕方 5 時半、予定より二時間半遅く、23 歳のライヒャルト夫人を乗せた気球はものすごいスピードで空中に上昇し、観客たちの視界から消え、5 時 55 分には着陸に成功した。同年 5 月 2 日の二回目の飛行では、悪天候にもかかわらずニコライ地区からフランクフルト門の上空を飛び、1811 年から 1820 年の間に合計 17 回の気球飛行を敢行したが、事典や飛行史をひもといても彼女に関する記述は見当たらない。第一回目の飛行を成功させたときには人々に熱狂的に迎えられ、センセーションを巻き起こしたものの、ブランシャールのように詩を捧げられたり記念メダルが発行されることはなかった。
- レシュブルクの文章からは、ニコライに連れられてパルタイが見に行った気球がどの気球なのかまでは分からないが、気球を上げる際にはまず王立図書館 (Königliche Bibliothek) に展示する習慣があったようである。そしてこの習慣も、人々の「気球

- 熱」が冷めて行く時の移り変わりの中で、1817年をもって終わりととなった。(Vgl. Löschburg, Winfried: Im Gasthof »Zu den drei Lilien«. Geschichten rund um die Berliner Nikolaikirche. Berlin: Buchverlag Der Morgen 1986. S. 118-128.)
- 115) ベーベル広場 (Bebelplatz)。地下にはナチ時代の焚書を記憶に留めるための本のない図書館が設えられていたが、最近この場所に地下駐車場を建設中である)を間に挟んで、ベルリン国立歌劇場 (Staatsoper) の方向を向いて立つ建物。現在は、この建物にフンボルト大学 (Humboldt-Universität) 法学部が入っている。1774年から1780年にかけて建造されたこの図書館は、その弓形に反ったバロック様式のファサードからの連想で、「整理箆筒」(Kommode)という愛称で呼ばれていた。(Vgl. Löschburg: a.a.O., S. 120.) 補足資料17参照。
- 116) エピキュロスが唱えた、万物を構成する究極の実体アトマ(原子)の何か。(『DVD-ROM版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』、参照)
- 117) シェッペンシュテット (Schöppenstedt) はレッシングが図書館司書として勤務していたヴォルフエンビュッテル (Wolfenbüttel) 近郊の町。近くにティル・オイレンシュピーゲルが生まれたとされるクナイトリング (Kneitlingen) 村があり、その関連で、シェッペンシュテットの町の住人は愚鈍であると言われていた。
- 118) ゴットシェート、ヨハン・クリストフ (Gottsched, Johann Christoph: 1700-1766)。ライプツィヒの作家、文芸批評家。啓蒙主義の心からの信奉者であり擁護者。フランス古典主義を模範として、ドイツの劇文学を改革した。『ドイツ人のための批判的詩学の試み』 („Versuch einer Critischen Dichtkunst vor die Deutschen“, 1730) などが有名。(原註、Radczun (Hrsg.): a.a.O., S. 425. 参照) なお、「さよならはゴットシェートが考え出したもの」で何が意味されているのか、あるいはゴットシェートのどの著作が当て擦られているのかは不明。
- 119) ホメロスの作とされる叙事詩『イーリアス』に登場する英雄で、50人に匹敵する大声の持ち主。(国松孝二他編『独和大辞典』第2版、小学館、1998年、2220ページ、相良守峯編『新訂 独和辞典』博友社、1963年、1403ページ、『DVD-ROM版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』、参照)
- 120) コールラウシュ、ハインリヒ (Kohlrausch, Heinrich: ?-1826)。ベルリンの医師。ヴィルヘルム・アイヒマンの娘ヘンリエtteと結婚。(原註参照)
- 121) アルテンシュタイン (Altenstein, Karl [Sigmund Franz] Freiherr von Stein zum: 1770-1840) が1817年から1838年まで長を務めていた「文部・医事省」(Ministerium für Kultus, Unterricht und Medizinalwesen) のこと。(原註、„Meyers Enzyklopädisches Lexikon“ 参照)
- 122) ラーベナー、ゴットリーブ・ヴィルヘルム (Rabener, Gottlieb Wilhelm: 1714-1771)。風刺作家。(原註参照)
- 123) フンボルト、アレクサンダー・フォン (Humboldt, Alexander von: 1769-1859)。自然科学者。ラテンアメリカ、メキシコ、ヴェネズエラ、アルタイ山脈、ウラル山脈へ探検旅行を行った。彼の『コスモス』 („Kosmos“, 1845-1862) は、当時の自然科学の概要をまとめたものである。(原註参照)
- 124) フリッシュ、ヨハン・クリストフ (Frisch, Johann Christoph: 1737-1815)。画家、エッチング工、クリスティアン・ベルンハルト・ローデの弟子。1805年からベルリン芸術アカデミー院長。(原註参照)
- 125) グラフ、アントーン (Graff, Anton: 1736-1813)。肖像画家、風景画家。1766年からドレスデン宮廷の御用画家。市民の肖像画の創始者。ロマン派風景画の発展に大いに貢献した。(Vgl. Radczun: a.a.O., S. 425.) 彼の描いたニコライの肖像画がメルキッシュ博物館に、本文中にも登場するフォン・デア・レッケ夫人の肖像画、当時の

- ベルリンにおけるユダヤ人サロンの中心人物ヘンリエッテ・ヘルツ (Henriette Herz: 1764–1847。彼女の夫で医師のマルクス・ヘルツ (Marcus Herz: 1747–1803) はメンデルスゾーンの友人で、カント哲学に心酔していた)の肖像画他数点が旧ナショナルギャラリーに展示されている。
- 126) スタル男爵夫人、ジェルメス・フォン (Staël, Germaine, Baronin von: 1766–1817)。フランスの女流作家。『ドイツ論』 („De l'Allemagne“, 1810) で有名。(原註参照)
- 127) 兵器庫 (Zeughaus) は現在、「ドイツ歴史博物館」(Deutsches Historisches Museum) として利用されている。ベルリン国立歌劇場から見て、ウンター・デン・リンデン通りを挟んで右斜め前に位置する。補足資料 18 参照。
- 128) 古代ローマの戦争の女神で、軍神マルスの妃あるいは妹とされている(原註、『独和大辞典』、331 ページ参照)。
- 129) カール・ヴィルヘルム・フェルディナント (Karl Wilhelm Ferdinand: 1735–1806) のこと。1780 年から 1806 年までブラウンシュヴァイク公。1806 年にはプロイセン軍の指揮を執った。(原註参照)
- 130) メレンドルフ伯爵、ヴィーヒャルト・ヨーアヒム・ハインリヒ・フォン (Möllendorf, Wichard Joachim Heinrich, Graf von: 1724–1816)。プロイセンの陸軍元帥。(原註参照)
- 131) ナポレオン一世、ボナパルト (Napoleon I., Bonaparte: 1769–1821)。フランス皇帝で、在位期間は 1804 年から 1814 年まで。(原註参照)
- 132) ウンター・デン・リンデン通り沿いに、フリードリヒ二世の騎馬像を間に挟んでフンボルト大学の向かいに立つ建物のことか。後のプロイセン王・ドイツ皇帝ヴィルヘルム一世 (Wilhelm I.: 1797–1888) が結婚後 1829 年に入居し、1834 年から 1837 年にかけて、ブランデンブルク門を造ったカール・ゴットハルト・ラングハンス (Carl Gotthard Langhans) の息子カール・フェルディナント・ラングハンス (Carl Ferdinand Langhans) に増改築をさせ、1888 年に亡くなるまで住み続けた建物である。現在この建物には、フンボルト大学法学部が入っている。(Vgl. de Bruyn, Günter: Unter den Linden. Berlin: Siedler Verlag 2002, S. 97–98.)
- 133) Schloßbrücke。ウンター・デン・リンデン通りとカール・リープクネヒト通り (Karl-Liebknecht-Straße) を結ぶ橋。補足資料 19 参照。
- 134) フリードリヒ・ダーニエール・パルタイの妹ドロテア・パルタイとザームエール・ヴァーレンティーン (Samuel Valentin: 1787–?)。最初の夫。二人目の夫は上記の商人カイナー)との間に生まれた子ども、フリードリヒ・ヴァーレンティーン (Friedrich Valentin) あるいはクリスティアン・ヴァーレンティーン (Christian Valentin) のことか。(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 431.)
- 135) ドゥノン、ドミニク・ヴィヴァン (Denon, Dominique Vivant: 1747–1825)。フランスのエッチング工、芸術作家、収集家、パリの博物館総支配人。占領した国々の芸術作品を「奪取」する任務をナポレオンから与えられ、「ナポレオン軍お付きの盗人」(der Dieb im Gefolge der Großen Armee) と呼ばれていた。(原註参照)
- 136) フリードリヒ二世 (Friedrich II.: 1712–1786)。プロイセン王で、在位期間は 1740 年から 1786 年まで。(原註参照)
- 137) Schloßfreiheit。補足資料 20 参照。
- 138) アレクサンドルー一世 (Alexander I.: 1777–1825)。ロシア皇帝で、在位期間は 1801 年から 1825 年まで。(原註、『DVD-ROM 版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』、参照)
- 139) ハルトウング、アウグスト (Hartung, August: ?–?)。ハルトウング学校教授で校長。(原註参照)



- 140) パウリ (Pauli: ?-?)。神学者、灰色の修道院教諭。(原註参照)
- 141) ゲルン、アルベルト・レーオポルト (Gern, Albert Leopold: 1789-1869)。ベルリン劇場の俳優、喜劇俳優。(原註参照)
- 142) デフリーント、ルートヴィヒ (Devrient, Ludwig: 1784-1832)。天才的な俳優で、E.T.A. ホフマンの友人。ジャンダルメン広場 (Gendarmenmarkt) に立つコンツェルトハウス (Konzerthaus) の裏手、シャルロッテン通り (Charlottenstraße) とタウベン通り (Taubenstraße) が交差する角のレストラン、ルッター & ヴェークナー (Lutter & Wegner) には歓談するデフリーントと E.T.A. ホフマンの絵が飾られている。なお、デフリーントの甥カール・デフリーント (Karl Devrient: 1797-1872) もまた俳優で、彼と結婚したヴィルヘルミーネ・シュレーダー = デフリーント (Wilhelmine Schröder-Devrient: 1804-1860) は歌手として有名だった。ワグナーは彼女の熱狂的なファンで、『ニーベルングの指輪』に登場するブリュンヒルデは彼女をイメージしながら彼女のために作られた役柄だと言われている。(原註、三光長治『ワグナー カラー版 作曲家の生涯』新潮社(新潮文庫)、1990年、23-26ページ参照)
- 143) リヒトヴァー、マッグヌス・ゴットフリート (Lichtwer, Magnus Gottfried: 1719-1783)。寓話作家、ハルバーシュタットの役人。(原註、Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 607. 参照)
- 144) ダップ、ライムント (Dapp, Raymund: 1744-1819)。ニーダーバルニム郡クラインシェーネベックの牧師。(Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 117.)
- 145) メーデム伯爵の次女。1779年にクーアラント公と結婚。註27) 参照。
- 146) ユラン、ピエール・オーギュスタン (Hulin, Pierre Augustin: 1758-1841)。フランスの将軍、1806年にはベルリン総督。(原註参照)
- 147) 公女ドロテア (Dorothea: 1783-1862) は、クーアラント公とクーアラント公夫人の間に生まれた四女。(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 432.) なお、『リリーの日記』序論には、ドロテアの生年は1793年と記載されている (Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 18.)。他の兄弟の生年を考慮すればこちらの方が正しい。
- 148) タルラン/タレラン公爵、シャルル・モリス (Talleyrand, Charles Maurice, Herzog: 1754-1838)。フランスの政治家、外交官。(原註参照)
- 149) ペリゴール伯爵 (Périgord, Graf von: ?-?)。上記タルラン/タレラン公爵の甥。(原註参照) なお、『リリーの日記』には「タルラン/タレラン = ペリゴール、エトムント・フォン (Talleyrand = Périgord, Edmund von: 1787-1872)、後のディーノ公爵 (Herzog von Dino)」(Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 18 und 432.) とある。
- 150) 現在のカール・マルクス並木通り (Karl-Marx-Allee) の中間地点から少し西側、シュトラウスベルガー広場 (Strausberger Platz) の南側には今日もなお「ブルーメン通り」、さらに「新ブルーメン通り」(Neue Blumenstraße) という名前の通りが残っている。(Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 13.) 補足資料21参照。
- 151) つまり、粘土 (Lehm) 採取場にかけて「レーム小道」(Lehmgsasse) と呼ばれていたわけである。
- 152) ブシェ (Bouché)。フランス人一家で、ベルリンに大きな園芸農園を持ち、有名な花や果物の品種を栽培していた。(原註参照)
- 153) モルゲン (Morgen) は昔の地積単位。1モルゲンは、一連の牛が午前中に耕すことのできる土地の広さで、約2エーカー。(『新訂 独和辞典』、999ページ参照) 1モルゲンは約30アール。(『独和大辞典』、1564ページ参照)
- 154) 原文では Ackerbürger。「小都市の住民であって農耕を営む者」(『新訂 独和辞典』、139ページ参照)。「(18世紀までの)市内に自作農地を持つ市民」(『独和大辞典』、61ページ参照)。

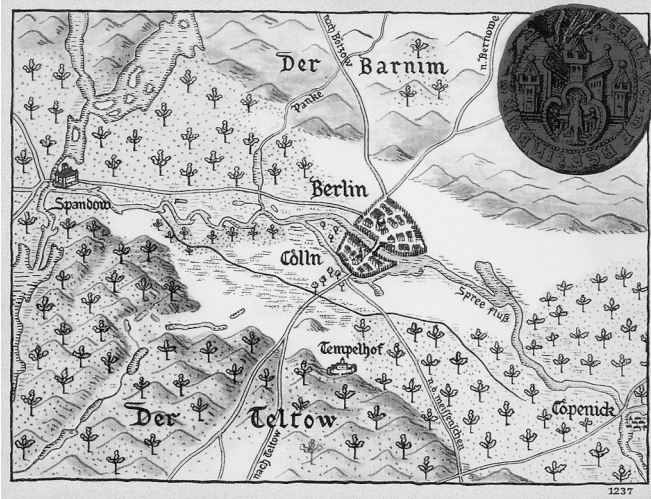
- 155) サンスーシーやオラーニエンブルクの王室用温室では、18世紀後半からパイナップルが栽培されていた。(原註参照)
- 156) ヴィルデノー、カール・ルートヴィヒ (Willdenow, Carl Ludwig: 1765–1812)。植物学者、薬剤師、医師。ベルリンで活動し、1810年からは大学に奉職した。(原註参照)
- 157) クラプロート、マルティーン・ハインリヒ (Klaproth, Martin Heinrich: 1743–1817)。ベルリンの化学者、薬剤師、ベルリン芸術アカデミーと科学アカデミーの会員。水素ガスを使って気球を上げる実験をした。(原註、Löschnburg: a.a.O., S. 125. 参照)
- 158) ボーデ、ヨハン・エーラート (Bode, Johann Ehlert: 1747–1826)。天文学者、ベルリン天文台所長。(原註参照)
- 159) ヒルシュフェルト、クリスティアン・カイ・ローレンツ (Hirschfeld, Christian Cay Lorenz: 1742–1792)。有名な園芸家、皇太子教育係、キールの教授。(Vgl. Becker (Hrsg.): a.a.O., S. 46., Jacob-Friesen: a.a.O., S. 629.) ここで言及されているのは、『造園術論』 („Theorie der Gartenkunst“, 5 Bde., 1777–1782) のこと。
- 160) ディートリヒ、フリードリヒ・ゴットリープ (Dietrich, Friedrich Gottlieb: 1768–1850)。ここで言及されているのは、『園芸術・植物学事典』 („Lexikon der Gätnerlei und Botanik“, 30 Bde., 1802–1840) のこと。
- 161) トムソン、ジェームズ (Thomson, James: 1700–1748)。イギリスの詩人。代表作『四季』 („The seasons“, 1726 und 1730) は、1745年にブローケス (Brockes, Barthold Hinrich: 1680–1747)、1766年から1769年にかけてトープラーによりドイツ語に訳され、ドイツの詩文学に大きな影響を与えた。(Vgl. Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 623., Radczun: a.a.O., S. 438., Schlosser (Hrsg.): a.a.O., S. 139.)
- 162) Alexanderstraße. 補足資料 22 参照。
- 163) Mühlendamm. 補足資料 23 参照。
- 164) リトファス、エルンスト・グレゴリウス (Litfaß, Ernst Gregorius: 1780–1816)。印刷業者・書籍出版業者。1795年、アードラー通り(ユングフェルン橋の西端から南へ下る、現在のオーバーヴァッサー通り (Oberwasserstraße) にほぼ該当する)6番に印刷所・出版社を設立した。1854年4月20日、この場所に彼の息子エルンスト (Litfaß, Ernst Theodor Amandus: 1816–1874) が最初の「広告柱」(Litfaßsäule) を立てた。(原註、Ernst Litfaß (1816–1874). Bestandskatalog des Nachlasses. Sonderausstellung anlässlich des 150. Geschäfts- und Bürgerjubiläums von Ernst Litfaß im Märkischen Museum. Berlin: Stadtmuseum Berlin 1996. 参照)補足資料 24 参照。
- 165) フランツ一世 (Franz I.: 1768–1835)。フランツ二世として最後の神聖ローマ帝国皇帝、在位期間は1792年から1806年まで。フランツ一世としてオーストリア皇帝、在位期間は1804年から1835年まで。(原註参照)
- 166) ルーイ・フェルディナント (Louis Ferdinand, egtl. Friedrich Ludwig Christian, Prinz von Preußen: 1772–1806)。フリードリヒ二世の甥。(Vgl. „Meyers Enzyklopädisches Lexikon“)
- 167) カール・ルートヴィヒ・ヨハン (Karl Ludwig Johann: 1771–1847) のこと。オーストリア大公。1809年の対ナポレオン戦争では傑出した最高指揮官振りを発揮した。(原註参照)
- 168) ベラーマン、ヨハン・ヨーアヒム (Bellermann, Johann Joachim: 1754–1842)。灰色の修道院付属ギムナージウムの校長。(原註参照)
- 169) Waisenturm. 補足資料 25 参照。
- 170) ナポリ湾岸の町ヘルクラネウムは、79年8月24日、ヴェスヴィオ火山の噴火

によってポンペイとともに熱泥流に襲われ埋没した。18世紀になるとこの町で発掘調査が行われ、大量の出土品が発見された。とりわけセンセーションを巻き起こしたのは炭化した図書館の発見で、パルタイが言及しているのはこのことである。(原註、『DVD-ROM 版 スーパー・ニッポニカ 2002 日本大百科全書』、参照)

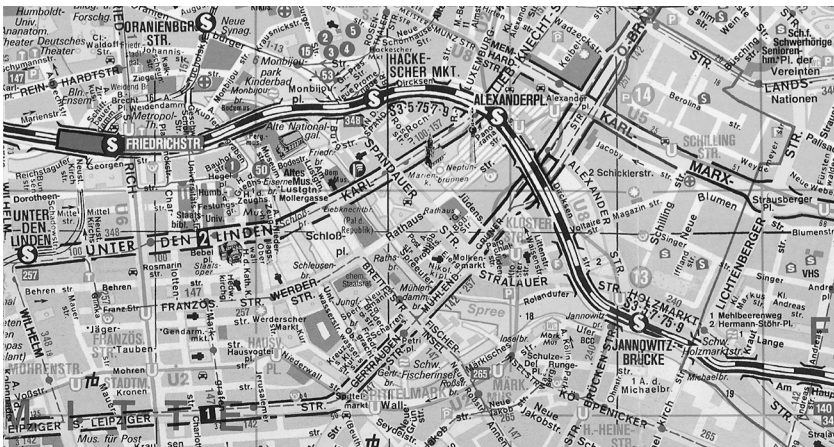
- 171) シュトラック、ヨハン・ハインリヒ (Strack, Johann Heinrich: 1805-1880)。建築家、シンケル (Schinkel, Karl Friedrich: 1781-1841) の弟子。ベルリンのナショナルギャラリーとペトリ教会の建設者。(原註参照)
- 172) フリードリヒ・ヴィルヘルム一世 (Friedrich Wilhelm I.: 1688-1740)。プロイセン王で、在位期間は 1713 年から 1740 年まで。フリードリヒ二世の父親。(原註、Albrecht (Hrsg.): a.a.O., S. 597. 参照)
- 173) 人名 Rädcl と、「(この場合は、大工職人蜂起の)首謀者」を意味する Rädclsführer との取り違い、書き間違いにまつわるエピソードである。
- 174) プロイセン国立銀行は、1772 年に「海外貿易会社」として発足し、1904 年に「王立海外貿易会社(プロイセン国立銀行)」と改名された。(原註参照)
- 175) リッター、ヨハネス (Ritter, Johannes: ?-?)。ニコライ書店の支配人。アレクサンダー・フォン・フンボルトとともに比較地理学の基礎を築いた地理学者カール・リッター (Ritter, Karl: 1779-1859) の兄弟。(原註参照)
- 176) 補足資料 26 参照。
- 177) ニコライの小説『ある太った男をめぐる、三度の結婚と三度のひじ鉄、幾多の恋愛の物語』 („Geschichte eines dicken Mannes worin drey Heurathen und drey Körbe nebst viel Liebe“) のこと。

## 補足資料

1. 1237年のベルリン (Vgl. Die Entwicklung Berlins. Produktion: Bien & Giersch Projekt-agentur GmbH. Edition Panorama Berlin.)



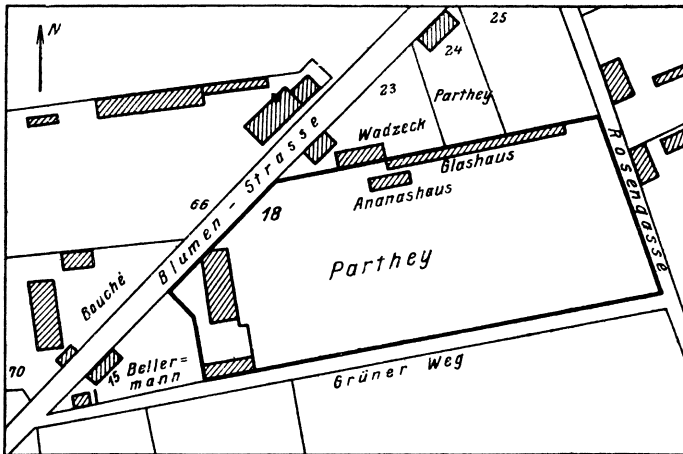
2. 現在のベルリン市街地図より (Vgl. Falkplan Berlin. 63. Aufl. Ostfildern: Falk Verlag 2001.)



3. ニコライ地区に立つニコライ教会



4. 1820年のブルーメン通り別荘近辺の様子 (Vgl. Lepsius, Bernhard (Hrsg.): Lili Parthey. Tagebücher aus der Berliner Biedermeierzeit. Berlin-Leipzig: Gebrüder Paetel 1926. S. 21.)



5. 左: フンボルト大学の正門前に立つヴィルヘルム・フォン・フンボルトの像  
右: 改装中のフンボルト大学



6. ブリュエダー通り 13 番、ニコライの家(現博物館ニコライハウス)

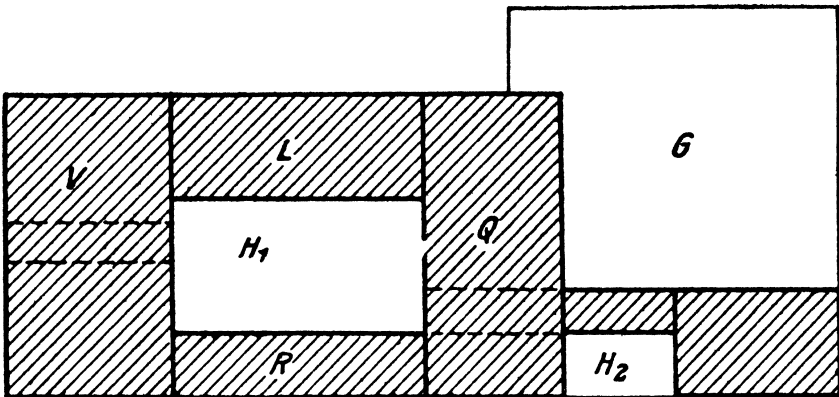


7. 左: 1890年のニコライ家の中庭 (Vgl. Demps, Laurenz: Altberliner Impressionen. Mit Grafiken von Hans-Hermann Schlicker. 1. Aufl. Berlin: Staatsverlag der DDR 1987. S. 21.)

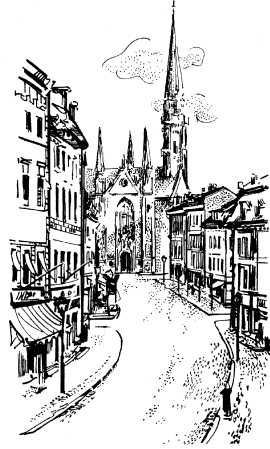
右: 現在のニコライ家の中庭



8. ニコライ家の間取り。V: プリューダー通りに面した表の家屋、L: 左の側翼、R: 右の側翼、Q: 奥の家屋、G: 庭、H: 中庭 (Vgl. Lepsius (Hrsg.): a.a.O., S. 2.)



9. 左: 1800 (1808) 年のブリュエー通りとペトリ教会 (Vgl. Becker, Peter Jörg u.a. (Hrsg.): Friedrich Nicolai. Leben und Werk. Ausstellung zum 250. Geburtstag, 7. Dezember 1983 bis 4. Februar 1984. Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung 1983.)  
 右: 1885 年のブリュエー通りとペトリ教会 (Vgl. Demps: a.a.O., S. 19.)



現在のブリュエー通り(右の  
 写真、右手中央にニコライの家)



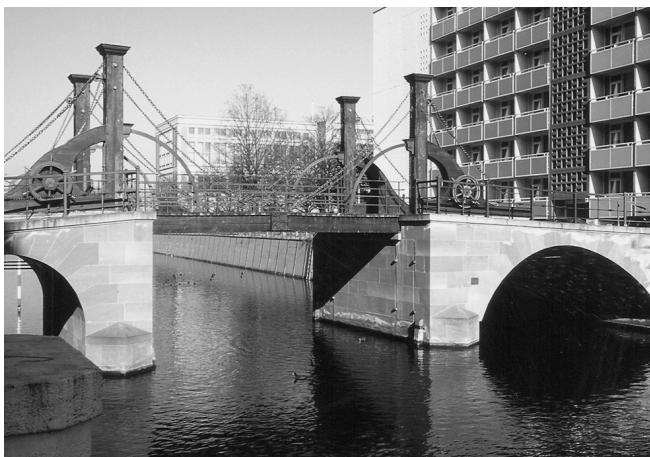
10. 王宮前広場の、昔司教座教会が立っていた辺りから見た共和国宮殿（Palast der Republik）



11. クロスター通りに残る修道院の廃墟



## 12. ユングフェルン橋



## 13. プリュエーダー通り 10 番、ペトリ教会監督教区長宅(現博物館ガルゲンハウス)



14. ベトリ広場(左: シャレン通りから撮った写真、右: シャレン通りとブリューダー通りの交差する辺りの写真)



15. アレクサンダー広場に立つテレビ塔



## 16. マリーエン教会



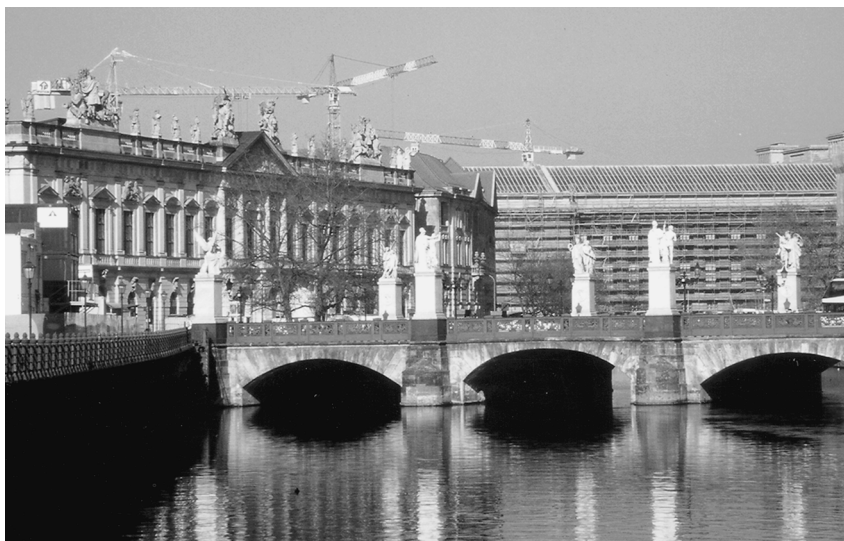
17. 上: 王立図書館(現フンボルト大学法学部。その前がペーベル広場)  
下: 左手にベルリン国立歌劇、右手奥に王立図書館、手前はウンター・デン・リンデン通り



18. 兵器庫(現ドイツ歴史博物館。手前はウンター・デン・リンデン通り)



19. シュロス橋(橋の左手奥にドイツ歴史博物館)



## 20. 特権区域(手前。背景に共和国宮殿、テレビ塔、ニコライ教会の尖塔)



## 21. ブルーメン通り



21. 新ブルーメン通り



22. アレクサンダー通り



23. モルケン市場の回りからミュールendamを望む(右手奥は、ニコライ教会の尖塔)



24. オーバーヴァッサー通り(ユングフェルン橋左端から手前に延びる通り)





25. ヴァイゼン通り(孤児院、孤児院の塔もこの通り沿いにあったと思われる)



26. カートル (Catel) が 1781 年に発明した路程計。ただし、パルタイの説明では六芒星となっているがこの図では五芒星。(Vgl. Nicolai, Friedrich: Gesammelte Werke. Hrsg. von Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann. Bd. 15: Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781. 1. und 2. Band. Hildesheim · Zürich · New York: Georg Olms Verlag 1994 (Reprographischer Nachdruck der Ausgaben. Berlin und Stettin 1783).)

